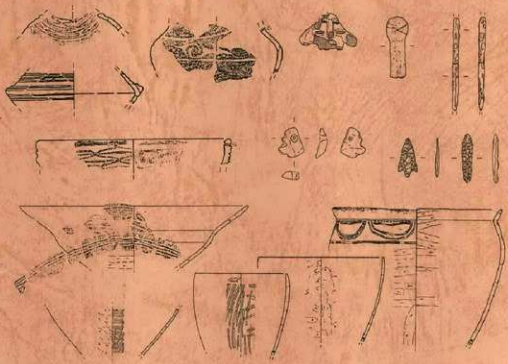
坂城町埋蔵文化財調査報告書第20集

金井東遺跡群

保地遺跡 II

—長野県埴科郡坂城町宅地造成事業に係る緊急発掘調査報告書—



2002. 3

坂城町土地開発公社
坂城町教育委員会

金井東遺跡群

保地遺跡 Ⅱ

2002. 3

坂城町土地開発公社
坂城町教育委員会

序

坂城町教育委員会教育長　大橋　幸文

坂城町の保地遺跡は、坂城町の先史時代を知る上で最も重要な遺跡の一つです。昭和40年（1965）に実施された緊急発掘調査では、縄文時代後・晩期の土器などとともに、人頭骨が出土したことで広く知られました。

今回の発掘調査で新たに発見された縄文時代後・晩期の遺構、遺物の中で多くの人骨を伴う墓址や、埋甕址の発見は考古学上特筆されるものとのことです。学術的な調査研究の内容は、本文に詳述されています。

報告書の草稿を一読しましたが、考古学は「もの」を手がかりに時代や社会を再現しようとする学問であり、本書も学術報告書に位置づけられるものではありますが、一般の人にも考古学が大地に埋もれているロマンを発見することだということを十分に味わってもらうことができるように思いました。

特に縄文時代の人骨が多量に見つかったことは、様々な条件がもたらしたものでしょうが、まさに奇跡といえるのではないでしょうか。また、人骨とともに見つかったヒスイのペンダントの美しさは、目に焼き付いてはなれません。古墳時代の銀メッキのイヤリングも忘れられない発見です。小さな埋甕には、子供の亡骸を葬る例もあるといいます。もし、そうだとすれば、保地遺跡で発見された埋甕はどんな思いで埋葬されたものなのでしょうか。いつの時代にも人は生まれ、人は必ず死にます。発見された墓や人骨から、縄文人の葬祭、日本人の死生観に思いをめぐらさずにはいられません。

保地の縄文人の食生活についても教えられることがありました。縄文人の生活は、一般的に狩猟・採集・漁労といいますが、本遺跡での漁労については千曲川を遡上してきたサケ・マスがその対象であった可能性が高いということです。

本遺跡から出土した獣骨については、ニホンジカ・イノシシ・ニホンオオカミ・ツキノワグマ・ムササビがあり、そのほとんどがニホンジカとイノシシでした。ニホンオオカミは江戸時代から明治時代にかけて生息していたオオカミより大きなオオカミでした。坂城の縄文時代には、かなり大きなオオカミが生息していることが分かり、大変興味深いものがあります。

このように、本遺跡の発掘調査によって縄文人の一生について多くのことを知ることができました。

この報告書に収めた、㈱長野県埋蔵文化財センター　百瀬長秀氏、京都大学霊長類研究所　茂原信生氏、国立環境研究所化学環境部　米田穣氏からの玉稿は、それぞれ専門の世界から光を当てていただきました。衷心より感謝いたします。

保地遺跡の発掘調査は、時間と経費の限られた厳しい調査ではありましたが、調査指導者の上田女子短期大学　塩入秀敏氏をはじめ、調査にあたられた全ての皆さんのご尽力で無事終了することができました。心からお礼を申し上げます。

読みごたえのある充実した内容の報告書であることを大変にうれしく思い、広く活用されることを願って序文といたします。

例　言

1　本書は、長野県埴科郡坂城町金井東遺跡群保地遺跡Ⅱの発掘調査の報告書である。
2　発掘調査は、坂城町土地開発公社より委託を受け、坂城町教育委員会が実施した。
3　発掘調査所在地及び面積
　金井東遺跡群保地遺跡Ⅱ　長野県埴科郡坂城町大字南条字保地2207　約960㎡（試掘調査含む）
4　調査期間　現地調査　平成11年4月21日～6月4日、平成11年7月7日～11月19日（試掘調査含む）
　　整理調査　平成11年11月24日～平成14年3月31日
5　本書の主な執筆・編集は、塩入・助川・齋藤が行った。また、以下の方々から玉稿を賜った。記して厚くお礼申し上げたい。

（財）長野県埋蔵文化財センター	百瀬長秀氏	第Ⅳ章第2節「縄文時代～弥生時代の土器」
京都大学霊長類研究所	茂原信生氏	第Ⅴ章「保地遺跡（長野県坂城町）から出土した縄文時代人骨」
		第Ⅵ章「保地遺跡出土の獣骨の観察記録、特にオオカミを中心として」
国立環境研究所　化学環境部	米田　穣氏	第Ⅵ章「保地遺跡出土人骨の炭素・窒素安定同位体比にもとづく食性復元」

6　本書の作成にあたり、助川・齋藤のほか、朝倉、天田、小宮山、坂巻、塚田、萩野が主な作業を行った。
7　本書で使用した航空写真は、（株）みすず綜合コンサルタントが撮影したものである。
8　本書及び調査に関する資料は、坂城町教育委員会の責任下において保管されている。
9　本調査及び本書作成にあたって、下記の方や機関から御配意を得た。記して感謝の意を表したい。（敬称略、五十音順）
　阿部泰之、石川日出志、汲原信生、品川欣也、白沢勝彦、関　孝一、鵜田典昭、寺内隆夫、中沢道彦、永峯光一、馬場伸一郎、原　明芳、平林　彰、廣瀬昭弘、町田勝則、水沢教子、綿田弘実、和根崎　剛、翠川泰弘、百瀬長秀、屋根祥多、山崎芳春
　さらしなの里歴史民俗資料館、（社）更埴地域シルバー人材センター、長野県立歴史館

凡　例

1　遺跡の略号は、下記のとおりである。
　H→竪穴住居址　F→掘立柱建物址　D→土坑址　S→集石址　Q→特殊遺構　P→ピット
2　遺構名は、時代別ではなく発掘調査時においての命名順である。
3　本書に掲載した実測図の縮尺は該当個所のスケールの上に記した。
4　挿図中におけるスクリーントーンは、下記を示す。
　遺構　遺構構築土→斜線　焼土→網点（細）　粘土→網点（太）
　遺物　須恵器断面・土師器黒色処理、石器付着物→網点
5　遺物の挿図中での表記は、第1図1は、簡易的に1－1とした。
6　土層の色調は『新版　標準土色帖』の記載に基づいて記載した。
7　土師器・須恵器の観察表の法量は、口径・底径・器高の順に記載し、―は不明、（ ）が残存値、＜ ＞が推定値、（ ）・＜ ＞がない場合は、完存値を示し、単位はcmである。

目　次

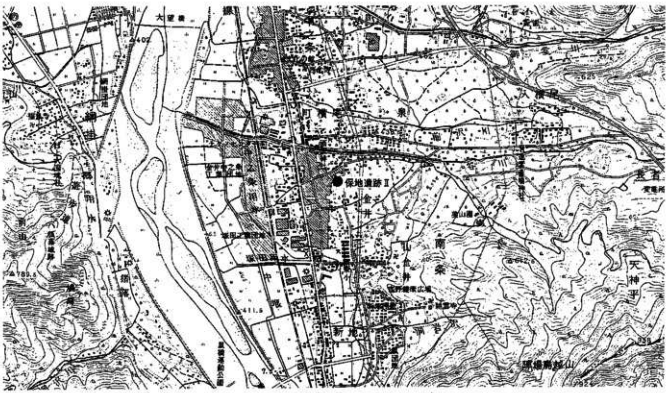
序
例言
凡例
第Ⅰ章　発掘調査の経緯 …… 1
　第1節　発掘調査に至る動機と経緯 …… 1
　第2節　調査の構成 …… 2
　第3節　調査日誌 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 3
　第1節　地理的環境 …… 3
　第2節　歴史的環境 …… 3
　第3節　保地遺跡について …… 6
第Ⅲ章　調査の概要 …… 7
　第1節　調査の方法 …… 7
　第2節　基本層序 …… 8
　第3節　検出された遺構・遺物 …… 8
第Ⅳ章　調査の結果 …… 10
　第1節　試掘調査1～3号トレンチの結果 …… 10
　　1　墓址 …… 10
　　2　埋甕址 …… 16
　第2節　縄文～弥生時代の土器 …… 18
　第3節　保地遺跡Ⅱ出土の石器について …… 38
　第4節　本調査の結果 …… 42
　　1　竪穴住居址 …… 42
　　2　掘立柱建物址 …… 57
　　3　土坑址 …… 60
　　4　集石址 …… 63
　　5　特殊遺構 …… 64
　　6　ピット及び遺構外出土遺物 …… 65
第Ⅴ章　保地遺跡（長野県坂城町）から出土した縄文時代人骨 …… 67
第Ⅵ章　保地遺跡出土人骨の炭素・窒素安定同位体比にもとづく食性復元 …… 90
第Ⅶ章　保地遺跡出土の獣骨の観察記録、特にオオカミを中心として …… 94
第Ⅷ章　総括 …… 98
出土土器・石器観察表 …… 101
写真図版
あとがき
報告書抄録

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る動機と経緯

金井東遺跡群保地遺跡Ⅱは、坂城町大字南条に位置し、谷川が形成する扇状地の扇央部に立地する。標高は、428m内外を測る。保地遺跡は、昭和40年に道路建設に伴う緊急発掘調査が実施されており、そこから縄文時代後・晩期の土器群が出土していることから、縄文時代の遺跡として広く名を知られている。保地遺跡の歴史的な環境、位置づけについては後で触れることとする。

今回、この地に坂城町土地開発公社の宅地造成事業が計画され、遺跡が破壊される恐れが生じた。そのため、原因者である坂城町土地開発公社と遺跡の保護措置について協議を行ったところ、試掘調査を実施して遺跡の状況を確認することとなり、平成11年４月21日から試掘調査を実施した。開発対象地に３本のトレンチを設定して遺構・遺物の確認を行った結果、全てのトレンチで遺構・遺物が検出された。遺構はトレンチの全域で激しく重複して検出され、遺構プランの把握が困難なほどであった。また、遺物は石器と、縄文時代から平安時代にかけての土器がそれぞれ大量に出土したが、中でも注目されたのは、遺存状態の良好な人骨とそれに伴う墓址や埋甕址が検出されたことであった。この結果を基に再度協議した結果、宅地造成に係る進入道路部分については発掘調査を実施し、宅地部分は盛土によって遺跡を保護することとなった。しかし、検出された人骨や墓址などは盛土される部分にあたるが、特に人骨については現状のままで埋め戻すと土圧による破損や、大気と湿気に晒されたことによる劣化・滅失のおそれがあったため、その部分については発掘調査を行うこととなった。尚、トレンチ内の墓址・埋甕址の調査は、試掘調査の遺構確認作業後、引き続いて実施し、道路部分の発掘調査はその後で実施した。



第１図　保地遺跡Ⅱ位置図（1：25,000）

第２節　調査の構成

発掘調査体制

調査指導者　塩入秀敏（上田女子短期大学教授、日本考古学協会会員）

調査担当者　助川朋広（坂城町教育委員会学芸員）、齋藤達也（坂城町教育委員会学芸員）

調査補助員　朝倉妙子、天田澄子、大谷恵子、片桐はまよ、久保田和江、小宮山秀子、酉東千佳子、坂巻ケン子、鈴木洋子、塚田さゆり、中村優子、宮川千栄子（以上、町臨時職員）

調査協力員　朝倉今朝男、伊藤篤、池田てる子、栗林初恵、清水よ志、竹鼻茂、塚田智子、柳沢勲夫、山極なつ子、山極るみ子、山辺久雄（以上、更埴地域シルバー人材センター派遣作業員）

整理調査体制

調査指導者　塩入秀敏（前出）

調査担当者　助川朋広（前出）、齋藤達也（前出）

調査補助員　朝倉妙子、天田澄子、大谷恵子、片桐はまよ、久保田和江、小宮山秀子、酉東千佳子、坂巻ケン子、鈴木洋子、塚田さゆり、中村優子、萩野れい子、宮川千栄子

調査補助員　臼井かね、大柴はつい、川島和子、小島光子、小林巴、塚田智子、中沢久恵、中島千津子、宮入梅子

（事務局）

教育長　大橋幸文

教育次長　宮原健一（平成11年７月１日就任、生涯学習課長兼務）

生涯学習課長　赤池利博（平成11年６月30日退任）

文化財係長　池田美智康（平成12年３月31日退任）
池田弥惣（平成12年４月１日就任）

文化財係　助川朋広、齋藤達也
朝倉妙子、天田澄子、大谷恵子、片桐はまよ、久保田和江、小宮山秀子、酉東千佳子、坂巻ケン子、鈴木洋子、塚田さゆり、中村優子、萩野れい子、宮川千栄子（以上、町臨時職員）

第３節　調査日誌

試掘調査・発掘調査

平成11年４月21日　試掘調査開始。遺構の切り合い激しく、遺構確認は困難を極める。１号トレンチ西部で人骨片が出土。

７月13日　１号トレンチ１号墓址の調査を開始。

７月21日　屈葬された人骨が出土した土坑を５号墓址と命名して調査開始。

７月27日　１号墓址敷石下の調査を開始。夥しい数の人骨が出土。

９月29日　１号トレンチの墓址調査と並行して、１～３区の発掘調査を開始。

９月30日　遺構検出作業を行う。切り合いが激しいため、トレンチを設定して遺構の確認を試みる。

10月18日　Ｈ１号住居址調査開始。
10月21日　６号墓址調査終了し、１号トレンチの調査終了。
11月17日　Ｈ４号住居址カマド調査開始。
11月19日　空中撮影し、本日をもって発掘調査終了。

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

坂城町は北信地方と東信地方の接触点にあたり、善光寺平を構成する更埴地方の最南端に位置する。また、町は貫流する千曲川の氾濫によって形成された氾濫原と、千曲川に流れ込む小河川がつくりだす扇状地によって形成された坂城広谷と呼ばれる幅広い貫通谷に立地している。町の北から東にかけては五里ヶ峰・大峰山・虚空蔵山をはじめとする標高1100～1300m前後の山々が連続し、更埴市、真田町、上田市との市町村界を形成し、西は大林山、三ッ頭山などの標高1000m前後の山々が連続し、上山田町、上田市との市町村界となっている。南は千曲川右岸の岩鼻と左岸の半過の岩鼻が狭隘な地形を形成し、上田盆地と隔てられている。このような地形から、古来よりこの地域は千曲川流域の要衝として注目されてきた。

この地域の気候は、南北に開けた広谷をなしていることから、季節風の影響を受けやすいため、夏季は南風、冬季は北風が強い。また、盆地状になっていることから寒暖の差が大きい。降水量は少なく、日本で最も雨量の少ない地域の一つとされている。現在では、この気候を生かして、工業が主要な産業となっており、農業では、バラ・ぶどうの栽培が盛んである。

第２節　歴史的環境

ここで、坂城町の各時期について代表的な遺跡を挙げつつ、町の歴史的環境について概略的に触れておくこととする（括弧内の数字は第２図における遺跡番号を示す）。

後期旧石器時代の遺物は、保地遺跡で上ヶ屋型彫刻器とされる石器が採集されている（第３節参照）。

縄文時代の遺構・遺物では、早期押型文系の土器が坂城地区の和平Ａ遺跡や平沢遺跡で採集されている。また、平成12年度に発掘調査が実施された坂城地区の込山Ｃ遺跡からも押型文系の土器片が出土しているが、これらは現在整理中である。この他に込山Ｃ遺跡では縄文時代前期・中期の土器も確認されている。後期・晩期では、学史的にも有名な南条地区の保地遺跡が挙げられる（第３節参照）。縄文時代晩期の遺物では、昭和初期に遮光器土偶の頭部が込山Ｄ遺跡（30－４）より採集されている。

弥生時代では、中期の遺跡として坂城地区の込山Ｂ遺跡が挙げられる。平成11年度に発掘調査が実施されているが、現在整理中である。後期後半では、平成５年度に実施された南条地区の塚田遺跡（1－7）の発掘調査で、この時期に属する竪穴住居址36棟をはじめとする遺構と、土器、石器、土製品、及び鉄器などが出土している。

1　南条遺跡群(弥～平)　1－1　東裏遺跡(弥～平)　1－2　御殿裏遺跡(鼠宿)(弥～平)　1－3　百々目利遺跡(弥～平)
1－4　中町遺跡(新地)(弥～平)　1－5　出町遺跡(弥～平)　1－6　廻り目遺跡(弥～平)　1－7　塚田遺跡(弥～平)
1－8　青木下遺跡(縄～平)　2　金井西遺跡群(縄～平)　2－1　金井遺跡(縄～平)　2－2　社宮神遺跡(縄～平)　2－3　並木下遺跡(縄～平)
3　金井東遺跡群(縄～平)　3－1　保地遺跡(縄～平)　3－2　山金井遺跡(縄～平)　3－3　大木久保遺跡(縄～平)　3－4　酒玉遺跡(縄～平)
4　栗ケ谷古墳(古墳)　5　社宮神経塚(中)　6　町横尾遺跡(縄～平)　7　北畑古墳(古墳)　8　中之条遺跡群(縄～平)　8－1　寺浦遺跡(縄～平)
8－2　上町遺跡(弥～平)　8－3　東町遺跡(弥～平)　8－4　北浦遺跡(縄～平)　8－5　宮上遺跡(縄～平)　8－6　北川原遺跡(縄～中)
9　南条塚穴古墳(古墳後期)　10　谷川古墳群(古墳後期)　10－1　入横尾支群向田古墳(古墳後期)　10－2　入横尾支群刈塚古墳(古墳後期)
11　入横尾遺跡(平)　12　谷川古墳群上原支群(古墳後期)　13　前原墳墓群(中～近世)　14　御堂川古墳群山口支群(古墳後期)　15　山崎遺跡(縄)
16　御堂川古墳群山崎支群(古墳後期)　17　御堂川古墳群前山支群(古墳後期)　17－1　前山1号墳(古墳後期)　17－2　前山2号墳(古墳後期)
17－3　前山3号墳(古墳後期)　17－4　前山4号墳(古墳後期)　17－5　前山5号墳(古墳後期)　17－6　前山6号墳(古墳後期)　17－7　前山7号墳(古墳後期)　17－8　前山8号墳(古墳後期)　17－9　前山9号墳(古墳後期)　17－10　前山10号墳(古墳後期)　17－11　前山11号墳(古墳後期)
17－12　前山12号墳(古墳後期)　17－13　前山13号墳(古墳後期)　17－14　前山14号墳(古墳後期)　18　御堂川古墳群東平支群二塚古墳(古墳後期)
19　御堂川古墳群山田支群(古墳後期)　20　豊満堂遺跡(縄～弥)　21　岡畝遺跡(弥～平)　22　入塚古墳(古墳後期)　23　四ツ屋遺跡群(縄～平)
24　戌久保遺跡(古～平)　25　入田遺跡(奈～平)　26　塚内古墳(古墳)　27　金比羅山遺跡(縄～平)　28　蓬平経塚(中)
30－4　込山遺跡群込山D遺跡(横町)(縄～平)　53　岡畝製鉄遺跡(中)　61　坂木代官所跡(近世)　62　田町遺跡群(古～平)　63　御所沢墳墓群(中)
65　中之条石切場跡(近世)　66　砥沢古墳(古墳後期)　67　中之条代官所跡(近世)　68　鳳岨窯跡(平)　69　鍵音坂城跡(中)
70　南蟹の川遺跡(奈～中)　73　高ツヤ城跡(中)　74　虚空蔵山城(中)　89　上平貴銅鉱採掘跡(近代)

第2図　周辺遺跡分布図

古墳時代では、前期古墳は確認されていないが、中期古墳には中之条地区の仮称東平１号墳・２号墳が挙げられる（註１）。これらは、平成６年度に上信越自動車道建設に伴い発掘調査が実施されている（若林 1999）。後期古墳では、町内でもいくつかの古墳群の存在が知られているが、中でも代表的なものは、村上地区の福沢古墳群小野沢支群に属する御厨社古墳である。内部施設に千曲川水系最大の横穴式石室を持ち、室全長11.2mを測り、勾玉や切子玉、耳環などが出土している。古墳時代後期の集落・祭祀遺跡では、環状に配列された土器群が検出され、全国的にも注目された南条地区の青木下遺跡（１－８）が代表的である。青木下遺跡は現在整理中である。

奈良時代・平安時代の遺跡では、中之条地区に位置する中之条遺跡群（８）とその周辺遺跡に多くの調査例があり、この地域における奈良・平安時代の状況が徐々に解明されつつある。具体的には、寺浦遺跡（８－１）、豊饒堂遺跡（20）、上町遺跡（８－２）、東町遺跡（８－３）、宮上遺跡（８－５）、北川原遺跡（８－６）、開畝遺跡（21）で調査が実施され、古墳時代後期後半～平安時代までの集落遺構と遺物が多数出土している。また、平安時代では、生産遺跡として坂城地区の土井ノ入窯跡があり、瓦の生産が行われていたことが分かっている。ここで生産された瓦は、現在の坂城小学校がある場所に８世紀末から９世紀頃に存在していたとされる込山廃寺に用いられたほか、上田市信濃国分寺・国分尼寺、更埴市正法廃寺の補修用の差し瓦として使用されていたことが判明している。

中世に入ると、平安時代後期、寛治８年（嘉保元）（1094）に村上地区に配流されてきた源盛清が後に村上氏として勢力を持つようになり、戦国時代には村上義清が活躍するようになった。義清の頃、村上氏の居館は現在の満泉寺一帯に所在したとされ、その背後にそびえる葛尾山の山頂には、義清が使用した葛尾城跡があるが現存していない。このほか、中世の遺跡では坂城地区の観音平経塚をはじめとする経塚と、中之条地区の開畝製鉄遺跡（53）がある。観音平経塚は昭和54年と平成4年に調査が行われている（若林 1999）。開畝製鉄遺跡は、昭和52・53年に県内初の製鉄遺跡調査として、坂城町教育委員会によって学術調査が実施され、16世紀頃の製鉄炉址２基が確認されている。

近世、江戸時代に入ると、現在の坂城地区と中之条地区を主体とする坂木村、中之条村は天和８年（1622）に幕府天領が置かれ、以後明治維新まで続いた。このことから当地域を重要視していたことがうかがわれる。陣屋は最初、坂木（61）に置かれたが、明和4年（1767）に焼失し、その後、安永８年（1779）中之条に陣屋（67）が置かれている。

以上、坂城町の歴史について概略した。

註１　周知の御堂川古墳群東平支群１号墳・２号墳とは異なる可能性があるため、仮称とされている。今後、正式な古墳名称の確定が必要である。

参考文献

小平　光一　1996『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』坂城町教育委員会

坂城町教育委員会　1978『開畝製鉄遺跡－第1次調査報告』　1979『開畝製鉄遺跡－第２次調査報告』

助川　朋広　1993『中之条遺跡群宮上遺跡Ⅱ』　1995『南条遺跡群東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡』　1996『中之条遺跡群寺浦遺跡Ⅱ』　2000『開畝遺跡Ⅲ』坂城町教育委員会

森嶋　稔ほか　1981『坂城町誌』中巻　歴史編（一）

柳沢　亮　1998「第５節 開畝遺跡」『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書２』（財）長野県埋蔵文化財センター

若林　卓　1999「第９章 東平古墳群」「第11章 観音平経塚」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21』（財）長野県埋蔵文化財センター

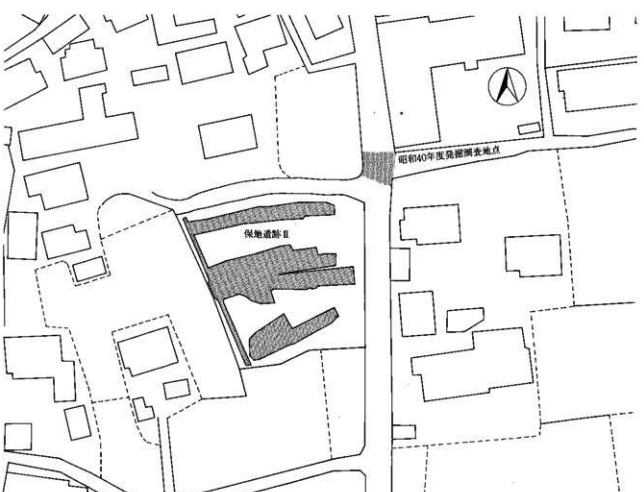
第３節　保地遺跡について

保地遺跡は、町内でも特に重要な遺跡の一つである。

その理由の一つは、後期旧石器時代の14,000～15,000年前のものとされる上ヶ屋型彫刻器が採集されていることである。この石器は、町内では最古の遺物であり、ほかに町内でこの時期の遺構・遺物が確認されていないことから、保地遺跡は、坂城町唯一の後期旧石器時代の遺跡と位置づけられている。

もう一つ重要な点は、縄文時代後・晩期の良好な資料が出土していることである。昭和40年に実施された緊急発掘調査では、周囲に不規則な配石を伴う石囲い炉と遺存状態の良好な人頭骨が出土した。遺物も縄文時代後期・晩期の土器・石器などが出土している。遺構は、遺物の出土状況から縄文時代後期後半とされ、人骨が、頭骨のみの出土で抜歯されていることから、儀礼的な特殊遺構とされている（関　1966）。また、出土した土器群の内、非連続的な三叉文をもつ土器などが保地段階として大洞ＢＣ式併行期に位置付けられる（永峯　1981）など、学史的にも注目された。

今回の調査地点は、昭和40年の調査地点の南西に隣接し、前回出土資料に関連する縄文時代後・晩期の遺構・遺物の存在は調査前より予想されていたことであり、今回の調査結果はそれを裏付け、新たな知見が得られることなった。



第３図　保地遺跡発掘調査位置図（１：1000）

参考文献
永峯光一　1981「縄文晩期の土器　――中部・北陸地方」『縄文土器大成　4　晩期』講談社
関　孝一　1966「長野県埴科郡保地遺跡発掘調査概報」『考古学雑誌』第51巻第3号

第Ⅲ章　調査の概要

第1節　調査の方法

本遺跡の調査には、調査区の遺構・遺物の正確な位置を記録でき、なお周辺に存在する遺構・遺物の調査にも整合できるように、Ⅶ系国家座標の座標軸を基にグリッドを組んだ。グリッドは、200m×200mの大グリッドを設け、区画を行った。その中を40m×40mに25等分した中グリッドを設定（第3図）し、東北端より、A・B・C・・・Y区とアルファベットの大文字で命名した。本調査区では、O・T区が相当する。さらにその中グリッドを4m×4mのグリッドで100区画に分割し、南北列を北から算用数字で1・2・3・・・10、東西列を東から五十音順で、あ・い・う・・・こ、とし、各グリッドの北東交点を小グリッドとした。遺構外出土遺物の取り扱い及び遺構の検出位置は、この小グリッドの単位で行った。また、遺構の実測は1/20を基本として簡易遣り方測量で行った。

第4図　保地遺跡Ⅱ発掘調査区設定図（1：3,000）

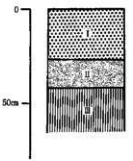
第2節　基本層序

調査区内の基本層序は、基本的に3層に分けられる。

Ⅰ層は、にぶい黄褐色を呈する耕作土である。

Ⅱ層は、黒褐色を呈する粘質土層である。遺物を多量に含む遺物包含層となる。調査区が西に下がる地形のため、Ⅱ層は調査区の西側の方が厚く堆積していた。

Ⅲ層は、にぶい黄褐色を呈する砂礫層の地山である。遺構の検出はこの上面で行った。しかし、遺構は、激しく重複していたため、遺構の把握は極めて困難な状況であった。



第5図　基本層序模式図

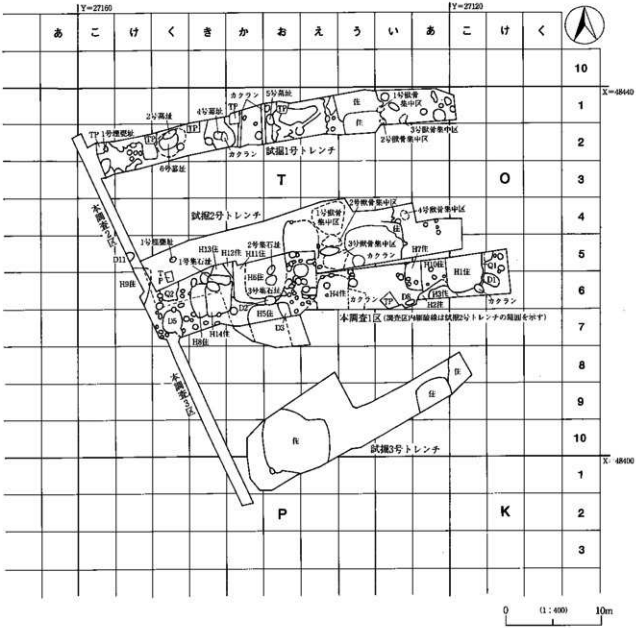
第3節　検出された遺構・遺物

保地遺跡Ⅱの発掘調査で検出された遺構・遺物は以下のとおりである。

遺構）縄文時代後期・晩期	土坑址	3基	
	特殊遺構	1基	
	ピット	1基	
	墓址	5基	（試掘調査時に検出・調査）
	埋甕址	2基	（試掘調査時に検出・調査）
古墳時代後期～奈良・平安時代	竪穴住居址	14棟	
	掘立柱建物址	5棟	
	土坑址	8基	
	集石址	3基	
	特殊遺構	2基	
時期不明	ピット	102基	

遺物）縄文時代前期～弥生時代中期　土器・土偶・土製品・石器・石製品・木製品

古墳時代後期～奈良・平安時代　土師器・須恵器・耳環・刀子



第6図　保地遺跡Ⅱ遺構配置図（1：400）

第Ⅳ章　調査の結果

第１節　試掘調査１～３号トレンチの結果

第Ⅰ章第１節でも少し触れたように、今回の発掘調査では、本調査に先立って試掘調査を実施した。試掘調査後の保護協議では、道路を除く開発対象地の大部分は盛土によって遺跡を保護することが決定されたが、試掘調査の際検出された遺構からは、遺存状態の良好な人骨や獣骨が一部検出されており、盛土を施しても既に大気に晒された人骨は劣化・滅失してしまい、それらを保護できない可能性が高かった。そのため、人骨・獣骨を出土する遺構と１号トレンチ１号埋甕址、及び２号トレンチ１号埋甕址については継続して調査を実施することとなった（註１）。本節はそれらの調査結果の報告である。なお、人骨についての形質人類学的な特徴や理化学的な分析結果については第Ⅴ～Ⅶ章に譲る。　※ 註は第Ⅳ章末（66ページ）に掲載

１　墓址

（１）１号トレンチ１・２・６号墓址

遺構及び人骨の出土状況（第７～９図）

１・２・６号墓址は、Ｔく２グリッドで検出された。これらは、それぞれが平面的に隣接し、重複関係が認められるが、墓址としての埋葬過程等の何らかの関連性があると考えられるため、ここに一括して示すこととする。また、これらの墓址に加えて調査の中途段階では、３号墓址も命名されていたが、調査の進行に伴い、３号墓址は６号墓址の一部であることが判明したため欠番とした。本報告において、発掘調査中に命名した遺構の名称はそのまま用いているため、３号墓址は欠番のままとして扱った。

（ⅰ）１号墓址（第７図）

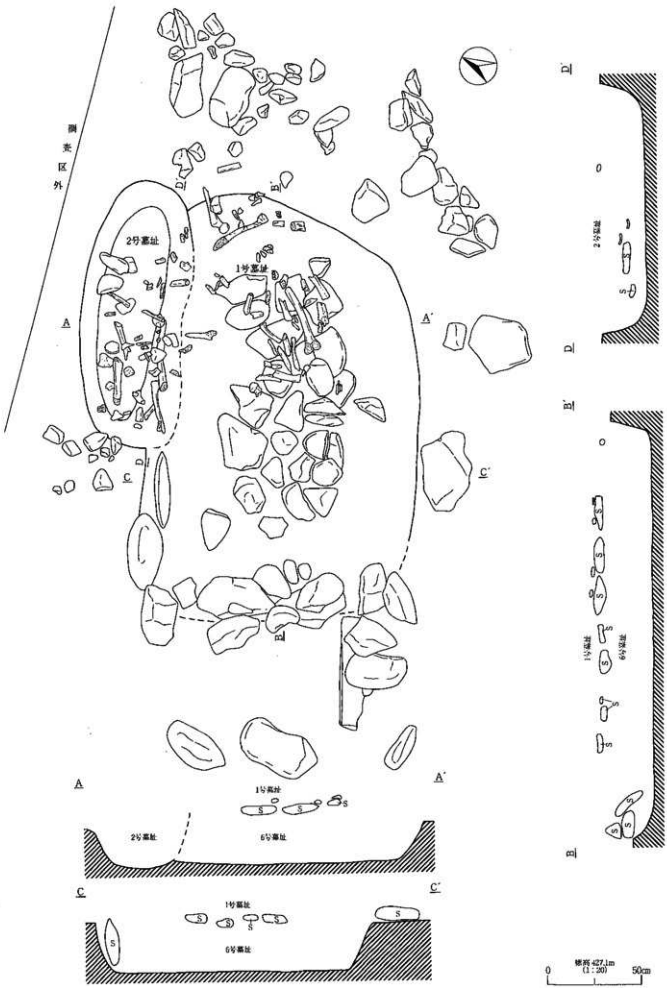
１号墓址は、敷石状の配石部分及びその周辺から出土した人骨をもって遺構としたが、掘り方は確認できなかったため、詳細は不明である。敷石は長軸約1.4m、短軸約70cmで、長軸方位はＮ－60°－Ｅを指す。人骨は敷石上に、東寄りにかたまって出土した。敷石の東に散在している人骨も１号墓址の人骨と同一個体と思われる。人骨は頭蓋骨と岩干の四肢骨片で構成され、形質人類学的分析から少なくとも３個体分の人骨が埋葬されていたことが指摘されている。敷石の長軸に沿って出土した四肢骨もいくつか見られるが、意図的に並べたものかは定かではない。敷石については１号墓址に伴うものと思われる。

（ⅱ）２号墓址（第７図）

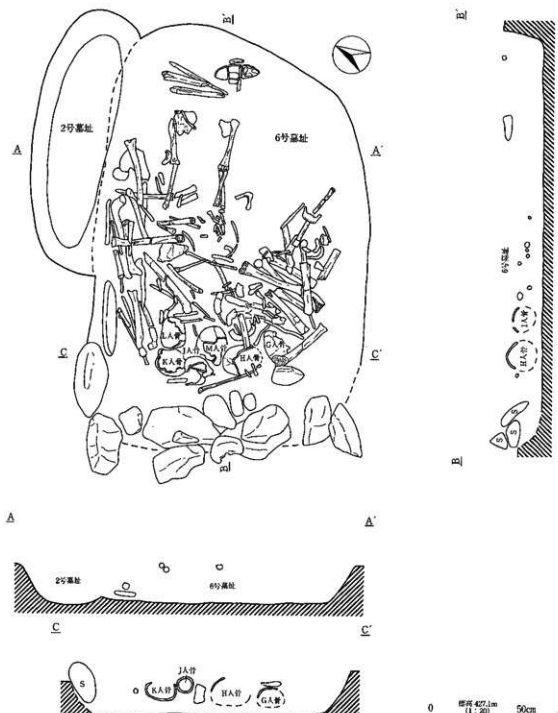
２号墓址は、１・６号墓址の北側に隣接し、６号墓址を切って構築され、長楕円形の掘り方を呈している。掘り方は長軸1.4m、短軸約60cmを測り、長軸の方位はＮ－68°－Ｅを指す。人骨はバラバラの状態で出土し、頭蓋骨片が主で、四肢骨は少数であった。少なくとも３個体分の人骨が埋葬されていることが形質人類学的分析で指摘されている。

（ⅲ）６号墓址（第８・９図）

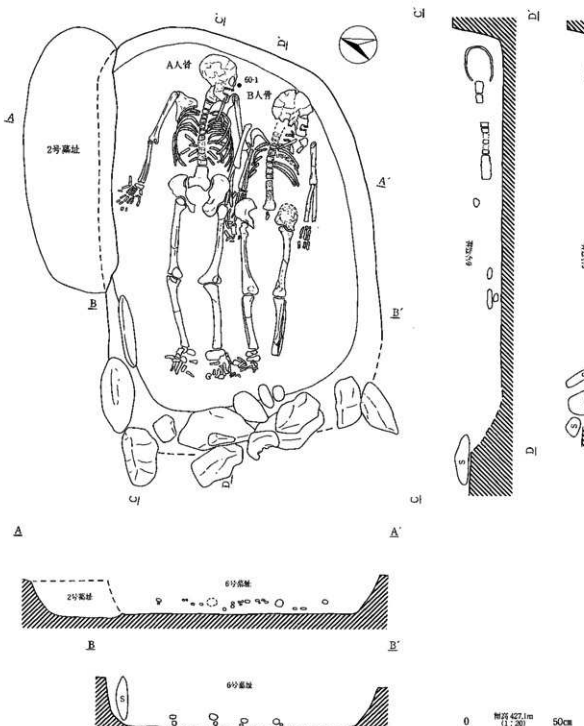
６号墓址は、１号墓址の敷石下から検出された。掘り方プランは隅丸長方形を呈し、長軸約2.1m、短軸1.4mを測り、長軸の主軸方位はＮ－64°－Ｅを指す。西壁及び北壁の一部には、長さ約30cm前後の自然石（川原石）が横位に埋設されていた。北壁の一部に自然石が検出されなかったが、２号墓址と重複していることから２号墓址に破壊されてしまったのか、初めから埋設されなかったのか状況は知り得ない。



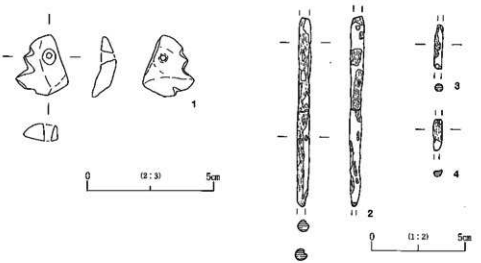
第7図　試掘1号トレンチ1号・2号墓址および周辺集石実測図



第8図　試掘1号トレンチ2号墓址掘り方及び6号墓址人骨実測図①



第９図　試掘１号トレンチ６号墓址人骨実測図②（A・B人骨）



第10図　試掘1号トレンチ6号墓址出土遺物実測図

本址からは大量の人骨が出土した。発掘調査では頭蓋骨や下顎骨などにより、人骨の個体数が特定できるものに対し、A～M人骨と命名した（註3）。このうちA・B人骨は、ほぼ全身の骨格で、D・E・F人骨は下顎骨のみ、C・G～M人骨は頭蓋骨である。これらの個体識別によって本址から少なくとも13体分の人骨が出土しているものと推察される。これらの人骨の出土状況は、A人骨とB人骨を埋葬した後、C～N人骨を再葬した状況と思われた。人骨自体の遺存状態は極めて良好であった。

A人骨・B人骨は2体を並べて埋葬したもので、一次埋葬と考えられる。2体とも頭位は東で、顔面は南側に向けられた仰臥伸展葬であった。また、この2体には腕の部分の上下関係が見られ、A人骨が先に埋葬されたことが看取された。しかしこの埋葬に伴う時間差は、極めて短時間と思われ、同時に2体が埋葬されたものと考えられる。人骨鑑定の結果からA人骨は熟年の男性、B人骨は熟年の女性であることがわかっている。出土遺物として、A人骨の下顎骨の南側からは、翡翠製の垂飾品（10－1）が出土し、出土状況からA人骨が身に着けていたものと思われる。

二次埋葬されたものとしてはC～N人骨があり、N人骨についてはA人骨の上半部直上に埋葬されていた。検出されたのは左右の腕と肩甲骨で、両手を下に伸ばした状態で検出された。本人骨の出土位置は、A人骨のほぼ直上にあたり、A人骨とN人骨の間には黒褐色粘質土の堆積がみられたことから、この2体の埋葬には時間差が認められる。A人骨埋葬後の一定時間経過後に、A人骨に重ねるようにしてN人骨を埋葬したとも考えられるが、定かではない。また、さらに多くの人骨がA・B人骨の下半身上位レベル（本墓址の西側）から、四肢骨と頭蓋骨が集中して検出されている。頭蓋骨が西側に7体検出されていたため、G～M人骨と命名した、これらの頭蓋骨の顔面の向きには規則性がなく、埋葬というよりもただ堆設された状態に近いと思われた。四肢骨については北側中央付近に散在していたが、西側に見られた頭蓋骨と同じレベルにて検出されていることから、これらの人骨と同じ個体であると思われる。N人骨については、G～M人骨の埋葬にあたり、攪乱されてしまった可能性が高いといえよう。

遺物（第10図１～４、第19図１号墓址－１～４、２号墓址－１～３、６号墓址－１～11）

１号墓址より出土した１～４は、破片は小さいが堀之内２式が過半を占め、加曽利Ｂ１～２式の破片が加わる。

２号墓址より出土した１～３は、堀之内２式、加曽利Ｂ１式、晩期前半の土器が混在している。

６号墓址より出土した１～11は、堀之内２式、加曽利Ｂ１～後期末の土器が見られるが、破片が大きく、過半を占めるのは堀之内２式である。

10－１は６号墓址Ａ人骨下顎骨周辺より出土した垂飾品である。翡翠製で片側より穿孔されている。重さは5.2ｇを測る。10－２～４は６号墓址人骨より出土した木製品である。２はＧ人骨頭蓋骨内の含土より出土したもので、赤彩されている。３・４はＡ人骨の頭骸骨の周辺より出土したものである。

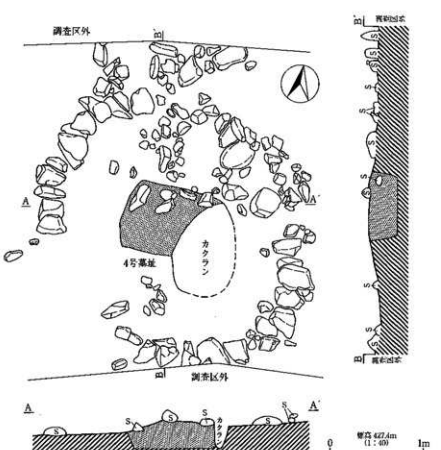
この他に、１・２・６号墓址のいずれの墓址からも焼骨片が少量出土している。焼骨はいずれも細片で、獣骨と思われる。

時期　１・６号墓址は出土土器から、縄文時代後期の堀之内２式期に位置付けられる。２号墓址は遺物から時期を判断することはできないが、６号墓址を切っているのでそれ以降の縄文時代後期・晩期の幅の中に位置付けておきたい。

（２）４号墓址

遺構及び人骨の出土状況（第11・12図）

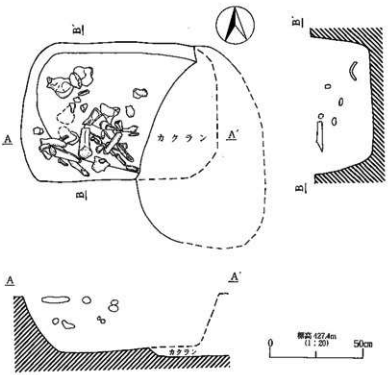
４号墓址は、Ｔか２、Ｔき１・２グリッドで検出された。遺構は東側が攪乱されているが、短軸70cm、長軸約１ｍの隅丸長方形を呈し、長軸の方位はＮ－90°－Ｗを指し、深さは30cmを測る。墓坑の周囲には配石遺構が存在している。この配石遺構は、長さ30cm前後の石が墓坑を囲むように配されており、４号墓址と関連していることも考えられるが、詳細は不明である。人骨は多量の細片を伴ってバラバラの状態で出土し、墓坑内の南寄りにややかたまっ



第11図　４号墓址および周辺配石実測図

ていた。人骨は、形質人類学的分析から少なくとも２個体埋葬されていたことが判明した。出土状況から、これらの人骨は一度に埋葬されたものと思われる。遺物は縄文時代後晩期の土器及び石器が出土しているが土器片についてはいずれも細片で、量が少ない。

時期　出土遺物から縄文時代後・晩期に位置付けることはできるが、より詳細な時期は不明である。



第12図　試掘１号トレンチ４号墓址実測図

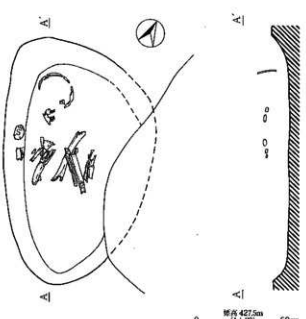
（３）５号墓址

遺構（第13図）

本址はＴお１・２グリッドで検出された。遺構は、楕円形を呈し、１体の人骨が埋葬されていた。掘り方は東側が別遺構によって破壊されている（註３）が、長軸1.5m、短軸約80cmの楕円形を呈し、長軸の方位はＮ－21°－Ｗを指すものと思われる。底面は平坦で、遺構検出面からの深さは20cmである。

人骨の遺存状態は良好とはいえないが、人骨の頭位は北西にあって、顔面を左（西）に向けて屈葬されていたことが看取された。

時期　時期を決定できる遺物が出土していないため、本址の所属時期は不明であるが、周辺の状況から、縄文時代後・晩期の所産であろうか。



第13図　試掘１号トレンチ５号墓址実測図

２　埋甕址

（１）１号トレンチ１号埋甕址

遺構（第14図）

検出位置　Ｔこ２グリッド。**重複関係**　なし。**平面形態**　掘り方は長軸65cm、短軸約45cmの楕円形を呈する。長軸の方位はＮ－４°－Ｗを指す。遺構検出面からの深さは20cmである。**遺物の出土状況**（第20図）

埋甕は掘り方の中央部に正位に設置されていた。器壁が薄く、ケズリがなく、オサエ・ナデ整形する体部無文の深鉢である。

時期　埋甕は晩期に属する可能性が高いが、詳細は未確定である。

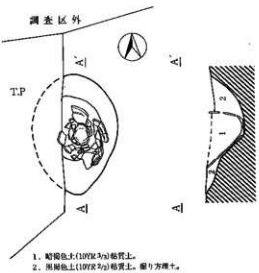
（2）2号トレンチ1号埋甕址

遺構（第15図）

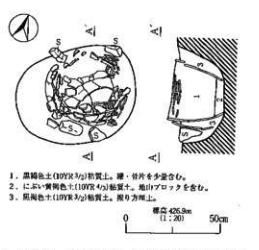
検出位置　T-5グリッド。**重複関係**　なし。**平面形態**　掘り方は長軸65cm、短軸50cmの楕円形を呈する。長軸の方位は、N－61°－Eを指す。**遺物の出土状況**（第20図）　埋甕は掘り方の中央部に設置されていた。埋甕は底部の欠損した深鉢（4）で、その周囲には、埋甕を囲むように別の深鉢2個体の胴部片（1・3）が、横位に据えられていた。そのことから、掘り方が掘削された後、埋甕の大きさに合わせて埋土をして、1・3を据え、最後に4を設置したものと思われる。さらに埋甕の内部上面には、蓋をするような状態で、1・2・5が重なって出土した。これらは、上から5、2、1の順に重なり、いずれも外面は上を向いていた。1は、埋甕の周囲と内部上面の両方に用いられたようである。

遺物（第20図）

出土状況から、絶好の一括資料といえよう。5点とも晩期中頃に属し、時期は概ね一致する。1は安行3C式後半、2は大洞C1式でいずれも他地域の系譜。3・4は砲弾形の無文深鉢、5は無文浅鉢の体部で、いずれも当地域の系譜だ。3・4は佐野2式の指標たる特徴的な胎土をもつ。「安行3C式後半＝大洞C1式＝佐野2式」という並行関係が成り立つ可能性がでた。「安行3d式＝大洞C2式＝佐野2式」というこれまでの編年観とは、一括資料の裏付けを欠いており、本址出土遺物により、編年観の見直しは必須となろう。ただ、佐野2式の胎土は浮線文期にも若干残存するので、その使用期間には一定の時間幅がありそうだ。その初現が佐野1式後半に遡るかどうか、検討を要する。



第14図　試掘1号トレンチ1号埋甕址実測図



第15図　試掘2号トレンチ1号埋甕址実測図

時期　縄文時代晩期中頃に位置付けられる。

第２節　縄文～弥生時代の土器

（財）長野県埋蔵文化財センター　百瀬長秀

１　土器と土製品

（１）土器の概要（第16～30図）

①　記述方法

出土土器には時間幅が大きく、完形品はわずかしかないので、時期別に土器の全体像を把握するのは困難だ。個別記述は避け、既存の編年観に従って簡略に記述する。

②　胎土

後期以降の土器の胎土を、肉眼観察によって以下のように識別し、断面図中に記号で表示した。

無印：標準的胎土。色調は黄褐色（7.5～10YR、３/３～８/４程度）が多い。赤褐色風化粒子、ローリングを受けた砂、少量の雲母、長石などを含む。

○：白みがかった胎土。ローリングを受けた砂、長石を含む。北陸方面に関わる。

●：暗赤褐色の胎土(2.5～５YR、３/２～３/３程度)で、雲母とガラス状石英を多量に含む。佐野２式の指標とされる［永峰光一1967］。

□：暗青灰色の胎土。多量の雲母を含む。関西方面にかかわる。

■：一般的胎土だが、雲母を多量に含む。加曽利Ｂ式精製土器に特徴的。

△：赤色塗彩

×：その他一般的とは言いがたい胎土。

③　縄文前期土器［422、423］

423は胎土に繊維を含み、422は含まないが、ともに単節斜縄文を全面に施す。

④　縄文後期前半の土器［Ｄ６－１～６、Ｄ７－11･12、Ｑ３－１～15、試掘１号トレンチ１号墓址（以下、Ｍ１）－１～８、試掘１号トレンチ２号墓址（以下、Ｍ２）－１、試掘１号トレンチ６号墓址（以下、Ｍ６）－１～６、１･21～59］

Ｄ６－１、Ｍ６－１、１は称名寺式。破片が小さく詳細不明。

Ｑ３－１～６、Ｍ１－１、21～26は堀之内１式。Ｑ３－２は南三十稲場式と関わるか。23、24は粗製土器で加曽利Ｂ式期まで継承される。

Ｄ６－２～６、Ｄ７－11･12、Ｑ３－７～15、Ｍ１－２～８、Ｍ２－１、Ｍ６－２～６、27～59は堀之内２式。注口土器の比率が高いが、図示にあたって目立った破片を選んだせいかもしれない。細い描線はすっきりと美しい。沈線内に光沢があるが、その沈線にかぶさるように縄文が施文され、縄文はミガキで潰されないようだ。充填縄文手法と呼ぶのだろうが、器面整形の手順は加曽利Ｂ１式以降とは異なっている。器面の乾燥を視野に入れて考えれば、縄文と沈線の施文順序の相違だけでは済まない問題をはらむ。Ｑ３－15は石神類型。

⑤　縄文後期中頃の土器［Ｄ６－７～11、Ｄ７－１･13～25、Ｑ３－17～20、Ｐ88－１、Ｍ１－９～13、Ｍ２－２、Ｍ６－８･９、60～105］

Ｄ６－７～10、Ｑ３－17、Ｍ１－９･10、Ｍ２－２、60～72は加曽利Ｂ１式で、いずれも磨消縄文と内面文が卓越する標準的な深鉢・浅鉢。それらの外面が「充填縄文手法」なのか「磨消縄文手法」なのかは、にわ

かには識別できない。それは、沈線や縄文施文後に、無文部分や沈線内に卓越したミガキが施されるからで、先行する施文の順序はミガキ消されてしまうからだ。この点は堀之内式の磨消縄文とは決定的に異なっており、器面全体に対して行われるミガキ手法が確立したのが、加曽利B１式の段階なのかもしれない。D７－13は石神類型の鉢で、細い沈線を引きっぱなしにする手法は、堀之内式と共通する。

D７－14～16、M６－９、73～80は加曽利B２式の磨消縄文系土器。73は３単位の把手付深鉢で、加曽利B１式61・62の後継者。60→61、62→73の順に変遷する。口縁部の内面側への屈曲が幅広くなるが、体部にも屈曲が発生しているはずだ。D６－11は屈曲のないタイプの鉢。無文精製土器のQ３－18・19、78は、胎土が近似するので加曽利B１～B２式だと判断した。79・80は隆帯を巡らせた粗製深鉢で、堀之内式23・24の後継者。隆帯貼付位置は時とともに上昇するので、23・24→79→80の順に変遷する。

81は付加条縄文を全面に施した粗製深鉢。駿河方面に類例があり、加曽利B１～B２式に併存するらしい。

D７－17～20、M１－11・12、82～90は加曽利B２式の羽状沈線文系土器。器外面の卓越したケズリと第３種羽状沈線［百瀬長秀1999b］が特徴。D７－18、M１－11、82は素文平縁深鉢。D７－17、83は波状縁深鉢で、83の口縁内面は肥厚されない。87～90はソロバン玉鉢。

D７－１・21・22・24・25、Q３－20、P88－１、M６－８、91～98は加曽利B３式～曽谷式並行期の中部高地独自型式で、加曽利B２式の一部と併せて、羽状沈線文土器群と総称する。かつて、上ノ段式なる名称が与えられたことがある［向坂鋼二1961］が、内容未確定なままなので、型式設定は慎重に考えたい。M６－８、91～98はいずれも、つ、の字文鉢で、独自型式の主体をなす。横帯文・単位文の在り方から見て、92→95の順に変遷する。96の単位文は異系譜。97はそれらの体部で、ケズリは省略気味、第５種羽状沈線が描かれるが、M６－８だけは第３種なので、この器種の中では古相だろう。P88－１は第１段階磨消縄文系突起を貼付した磨消縄文系深鉢B［百瀬2002予］。

D７－23、99・100はケズリを省略し、第６種羽状沈線を描く。91～98に後続するのは確実で、108など後期後半の隆帯文土器の体部の可能性もある。

101・102は口縁内面に１条沈線巡らせ、口縁との間には縄文が施されるので、元住吉山１式に関わりそうだ。平縁のM１－13、103や波状縁の104・105もその類例か。105は鷲嘴状の波頂把手。

⑥縄文後期後半の土器［D７－26、Q３－21、M６－10・11、106～111・113・114］

M６－11、106～111はおおむね安行１～２式並行期の中部高地独自型式。かつて設定された中ノ沢式［向坂1961］の一部に該当するが、その全体像は未確定のままである［百瀬長秀1999a］。羽状沈線文土器群の後継者だが、体部の羽状沈線は脱落し、代わって口縁屈曲部に貼付される圧痕付隆帯を特徴とするので、隆帯文系土器と総称する。106・111は平縁、それ以外は発達した波状縁の深鉢である。口縁部文様帯と把手の相違から変遷が追跡でき、波状縁深鉢では個体番号順に変遷すると推測する。M６－11はそれらとは別系譜の波頂モチーフをもつ。

113・114は隆帯を省略した平縁深鉢で、隆帯文土器群の一角を構成する。Q３－21、M６－10もその仲間か。D７－26はいわゆる瘤付土器の仲間。大きめの瘤が製付機能をもつので古相だろう、

⑦縄文晩期前半の土器［D７－27～35・39、Q３－22・23・25、P53－１～３、P92－１、Tあ６－１、Tえ５－１、M２－３・２～５・119～179・181～184・186～190］

隆帯文土器は口縁部文様帯が１条の隆帯に退化した段階から概ね晩期と考えているが、対比はまだ厳密ではない。平縁の２はヘラ先圧痕付弧状隆帯、119～123は縦圧痕付で、中ノ沢中相［百瀬1999a］に該当する。横ユビ圧痕のD７－28、圧痕を省略したQ３－22は中ノ沢新相。D７－31、124・125は波状縁で隆帯上に圧痕

はなく、中ノ沢中相。隆帯が痕跡化し、瘤だけを残したD7－29・30、126～129は末期的で、中ノ沢新相。

磨消縄文を併用した三叉文・入組文をもつ土器は、晩期初頭から佐野1a式に位置付く。これまでのところ、晩期初頭の様相は、保地段階や大花段階、などと称されてきたが、安行3A式そのものに近い例をもって該当させたに過ぎず、当地域の主体的な土器はまだ位置付けが与えられたことはない。しかも、宮崎遺跡2号住居一括資料の発見によって、佐野1a式自体の見直しが必要になってしまい、この間の様相は余く未確定である。今回の資料も断片的に過ぎ、個体の全体像すら不明なので課題の解決には役立たない。

本報告では、細めの描線の仲間と、太いミガキ沈線を使用した仲間に区分して配列した。宮崎遺跡2号住居一括資料の描線の手法が後者であったからで、今後の着目点の一つであろう。細めの描線の仲間はD7－39、Q3－25、P53－1、M2－3、130～143。137・138はT字繰込文に関わるか。太いミガキ沈線の仲間は、Tあ6－1、3・4・149～161。3は入組文と三叉文が一体化した小形壷。151・152は宮崎2号住居に近似する。Q3－25は縄文もしくは撚糸文をもつ。

5は無文で口縁に刺突をもつ浅鉢。144は波状モチーフで正体不明。D7－27、145～148は口唇装飾浅鉢で、御経塚式との共通要素。Q3－23の描線は清水天王山式にそっくりだが、モチーフは不明。同一個体らしいP92－1とTえ5－1も同様の描線で、弧線を多用し、その交点は三叉文となる。隆帯上にはやたらと深い横ユビ圧痕。

162～167・170・171は2条沈線間の点列を特徴とし、点列はないが168も様相は近い。169は鍵ノ手文。172は佐野式の粗製土器。これらは晩期中頃に近づくだろう。

D7－32～35、P53－3、173～179・181～184・186～188は大洞BC式～C1式の影響下にある土器で、羊歯状文や雲形文、口唇部B突起などを模す。多くは晩期中頃に近づくだろう。全面縄文の189・190もこの仲間。

⑧　縄文晩期中頃の土器［D7－2・36～38・40～45、Q3－24、P88－3、P92－2、P106－1、P106－2、Tあ6－2、Tえ5－2、試掘2号トレンチ1号埋甕址（以下、U2）－1～5、6～8・180・185・191～197・219～260］

U2－1は口縁が屈曲する深鉢で、安行3C式後半。口端に太い斜圧痕、描線はやたらと太く、点列も同一工具で、光沢は全くない。191・192も同類。

D7－2・36、Q3－24、P106－1、U2－2、8・180・185・193・194などは大洞C1式～C2式の影響下にある。U2－2は彫りが深いが内面は無文の大形浅鉢。8は注口土器らしいが彫刻的な直線ばかりが描かれる。197・198は口縁下を沈線で画し、口端との間に条痕を加える。複合口縁の模倣かと思われる構成だが、条痕は下野式と関わりそうだ。

本遺跡からは佐野2式がまとまって出土した。D7－41～43、P92－2、Tあ6－2、Tえ5－2、6・195・219～250・259が該当する。破片ばかりだが、ある程度様相を窺うことができる。それらは既述のとおりの特徴的な胎土をもち、器壁の厚い大形の深鉢ばかりからなる。口縁部は内湾気味で、口端からやや下がった肩部に上下を沈線で画した文様帯が設定され、いわゆる粗大工字文などが描かれる。描線やたらと太く、アタリは深く、沈線内は光沢をもつ。文様帯の上下は縄文帯や無文帯となる。口縁内面にも同様の描線で1～2条の沈線が描かれる。口端には小さな突起が付加される。以上のような特徴は、神奈川県～山梨県に分布する「雷文土器」［重久淳一1985］に極めて近い。

佐野2式と胎土を共有する無文土器は、同様に器壁が厚く、砲弾形の大形深鉢である。器面整形などもそっくりで、同時性は疑いないだろう。D7－40・44・45、P88－3、P106－2、U2－3・4、251～255、が該当し、器形を異にするが7も同様だろう。重要なのはD7－40、251・253など内面を中心に条痕が残さ

れる例が含まれることで、下野式との関係を問うべきだろう。

256～258・260も佐野２式の範疇だろうが、浮線文に近づくかもしれない。

⑨ 縄文晩期後半～弥生中期初頭の土器［D６－15、D７－３・46～60・67、Q３－28・33～35、P82－１、P88－２、P92－３、Tあ６－３、Tあ６－４、Tえ５－３、Tえ７－１～４、９～20・261～421］

浮線文系土器は最も出土量が多い。浅鉢が豊富で、甕も多いが、深鉢は少なく、壺はほとんどない。浅鉢の大半には細隆線手法で網状文が描かれ、ミガキが卓越する。甕又は深鉢のTえ５－３も同様。無文でミガキの卓越した丸い浅鉢は全くない。甕の大半には口縁部は隆線手法の直線が描かれる。口縁無文の甕はわずかしかない。甕体部の細密条痕はやや少ないようだ。

浅鉢261～265はレンズ状付帯文の系譜を引く肩部文様帯が確認できる。体部は網状文、口端内面にも隆線が巡る。Tえ５－３も同様。甕317～328は内面に隆線手法の直線を巡らす。五貫森式の影響だとされる［設楽博巳1982］が、佐野２式の内面施文とも関わるのではないか。これらは女鳥羽川段階に対応するか。13もこのあたりに位置づくだろう。

浅鉢D７－49、Tあ６－４、９・266～279はレンズ状のモチーフが失われ、口外帯も未確立で、体部網状文が発達する。口端内面施文も普遍的だ。甕329～333やP92－３、Tあ６－３は体部に撚糸文を施文する。壷334～341は口縁部や肩部隆線帯に貼付文が加わる。甕342～351は甕318などの系譜を継承した１～２条の内面沈線をもつ。これらは離山段階に対応するだろう。口縁部に隆線帯、沈線帯だけをもつ浅鉢11・14・15は離山段階以前か。

浅鉢D７－46・47、10・280～301の口端内面は、286など痕跡的な沈線が残る例があるものの、大半は無文に変化し、口外帯が現れ始める。氷１式の古相に該当するかどうか。Tえ７－１もこの辺りか。

浅鉢D７－48・50、304～314は口縁無文帯と口外帯が確立し、肩が張って稜をなし、肩部に網状文が描かれる。隆線をさらに２分割する手法が加わるのも特徴だ。肩に稜をもつ無文浅鉢16・315・316、口外帯をもつ体部の丸い浅鉢17も同時期だ。氷１式の新相だろう。P82－１は変わったモチーフだが、氷１式以前だろう。

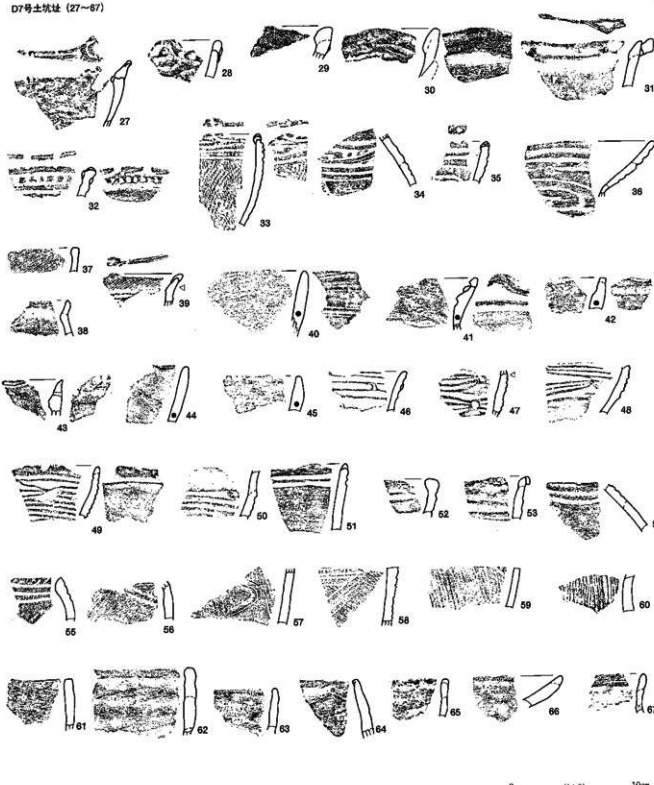
甕D７－３・51～53、Q３－33、18・352～383は隆線帯をもち、内面施文はない。口外帯はほぼ確立しているが、確認できない個体も少なくない。甕Tえ７－１は肩部に文様帯を残す。壷D７－54は隆線手法が共通する。384～386は隆線帯の直下から細密条痕が加えられるが、体部が張り出す可能性も否定できず、甕とも深鉢とも確定できない。387～397は細密条痕をもつ砲弾形の深鉢。これらの甕・深鉢は氷１式に属するだろう。繊細な細密条痕のD６－15、D７－56～58、Tえ７－３、405～409も同様だろう。Tえ７－２は繊細な細密条痕を内外面に施し、胎土は佐野２式そっくりだ。

甕Q３－34、19・413～416、壷419は沈線手法の直線を描き、甕417と418は肩部の稜が痕跡的となる。甕19の細密条痕は粗く、D７－59、D７－60、P88－２も同様。20の壷は北信に点々と類例がある。在地で発生した大形の壷という評価［中沢道彦1991］である。いずれも氷２式に属するだろう。口縁部無文の甕398～404は、402以外は口外帯がほとんど見られないので、大半が氷２式だろう。浅鉢410・411は沈線手法の変形工字文を、壷412は沈線手法の三角連携文を描き、氷２式と共存するだろう。

以下は条痕文系土器。Q３－28は五貫森式。D７－67は胎土が近いので、条痕文土器の仲間か。Tえ７－４は荒々しい条痕で水神平式以前か。421は縦羽状条痕で水神平式か岩滑式。420は横条痕の下位に縦方向の条痕を配し、多段の構成をとる。Q３－35は２条１単位の工具で鋸歯状モチーフを描く壷。420以下は岩滑式か。

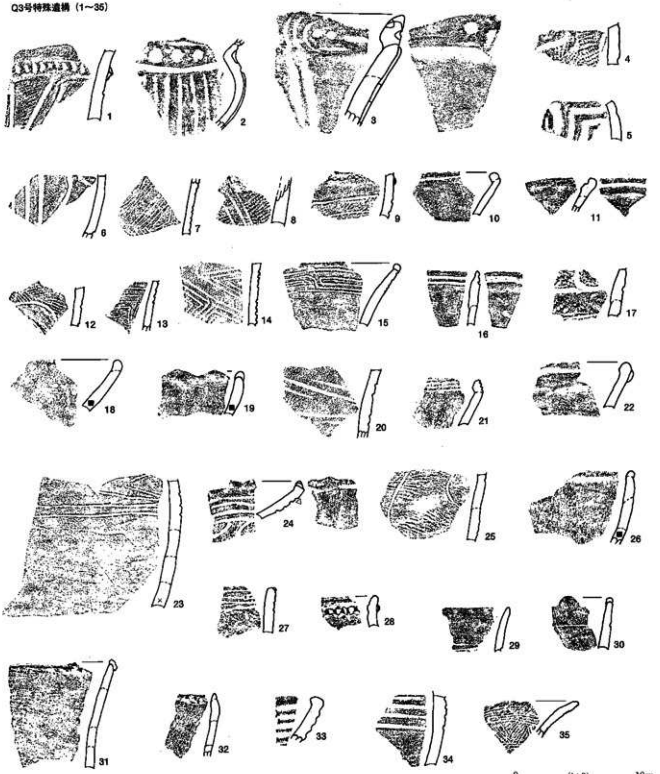
第16図　縄文～弥生土器、土製品実測図（1）

D7号土坑址（27～67）

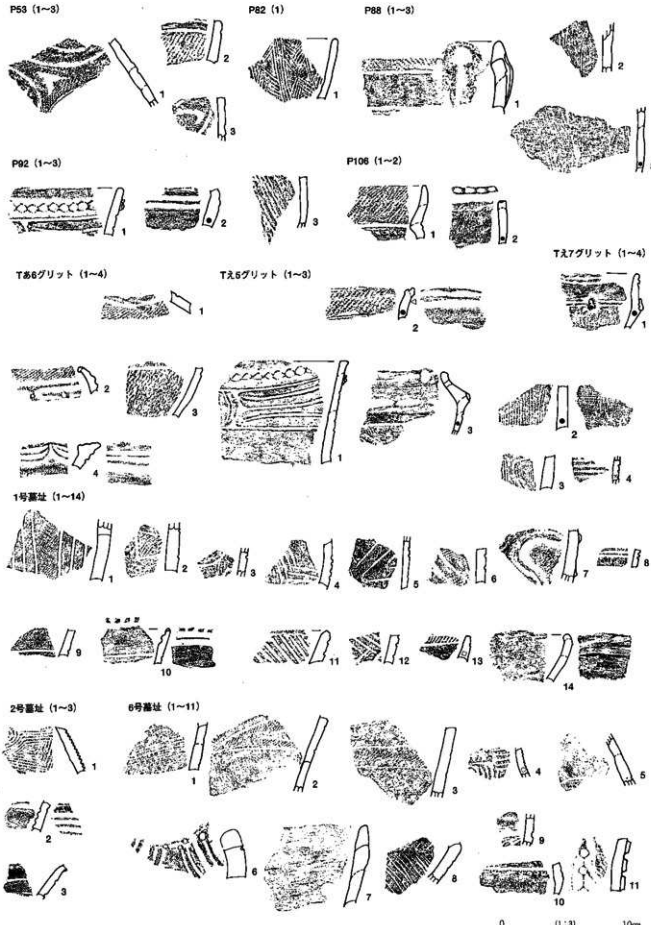


第17図　縄文～弥生土器、土製品実測図（2）

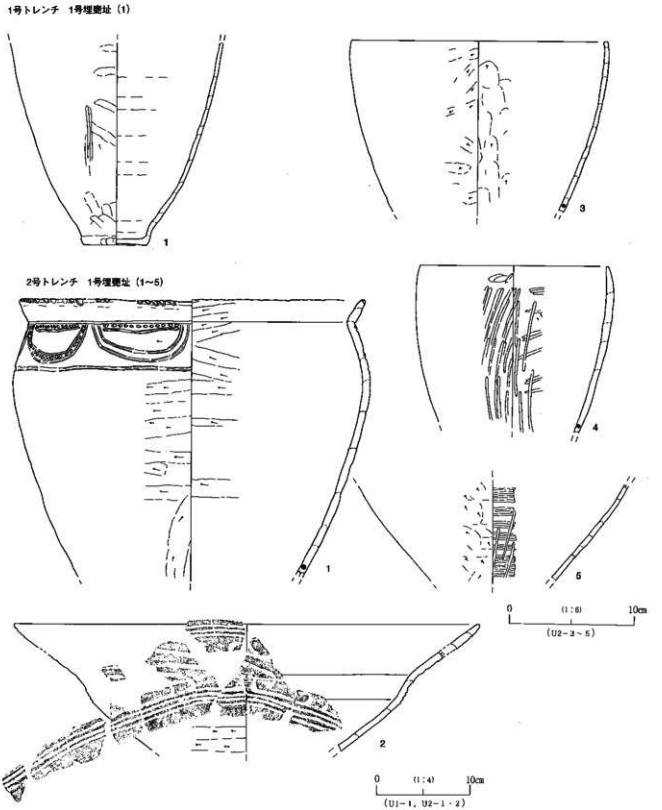
Q3号特殊遺構（1～35）



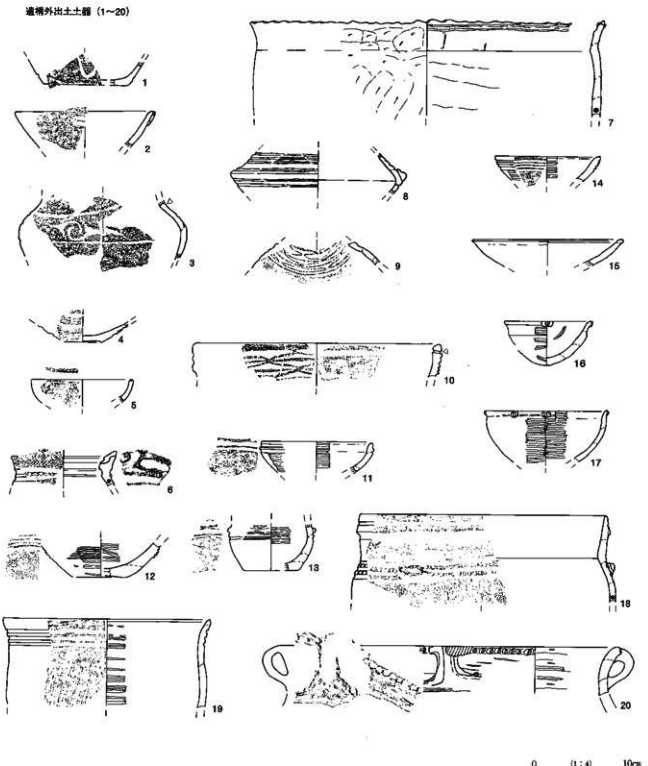
第18図　縄文～弥生土器、土製品実測図（3）



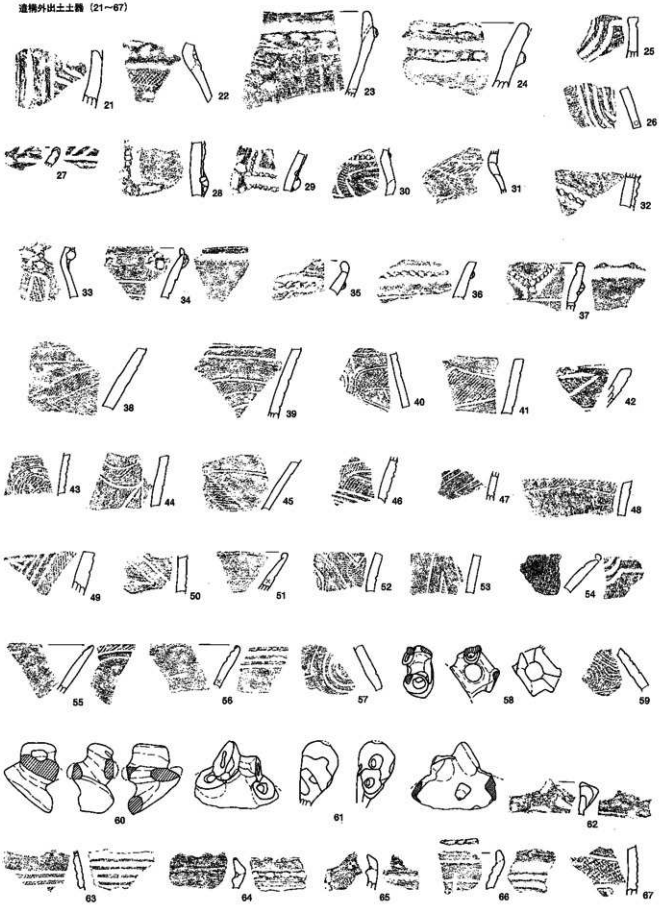
第19図　縄文～弥生土器、土製品実測図（4）



第20図　縄文～弥生土器、土製品実測図（5）



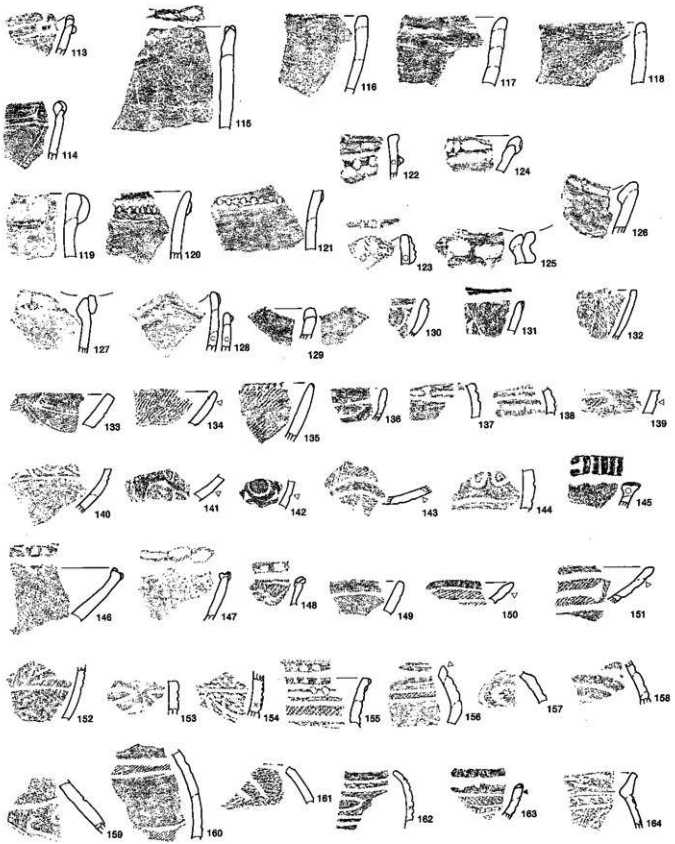
第21図　縄文～弥生土器、土製品実測図（6）



第22図　縄文～弥生土器、土製品実測図（7）

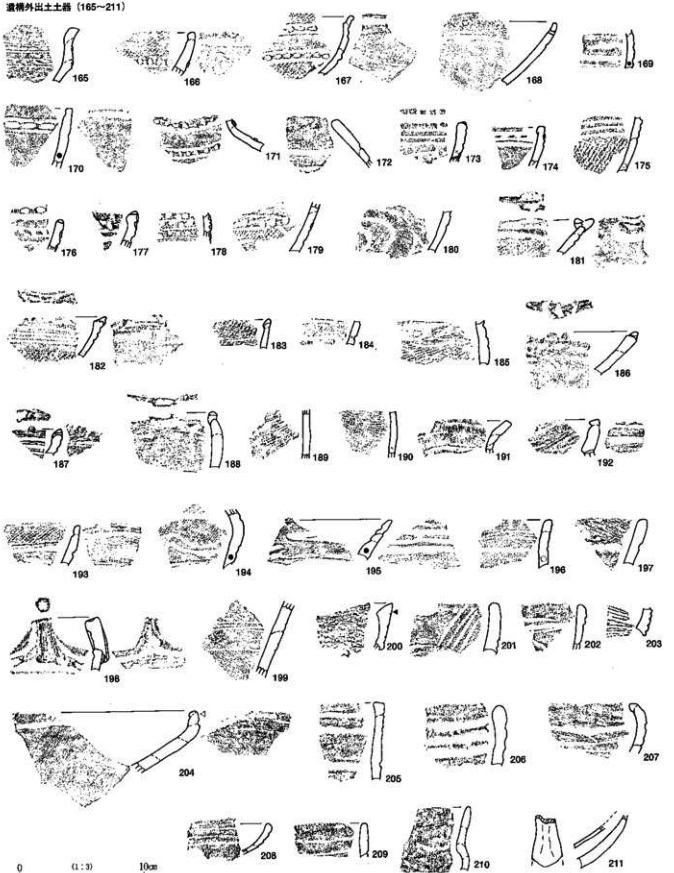
第23図　縄文～弥生土器、土製品実測図（8）

遺構外出土土器（113～164）



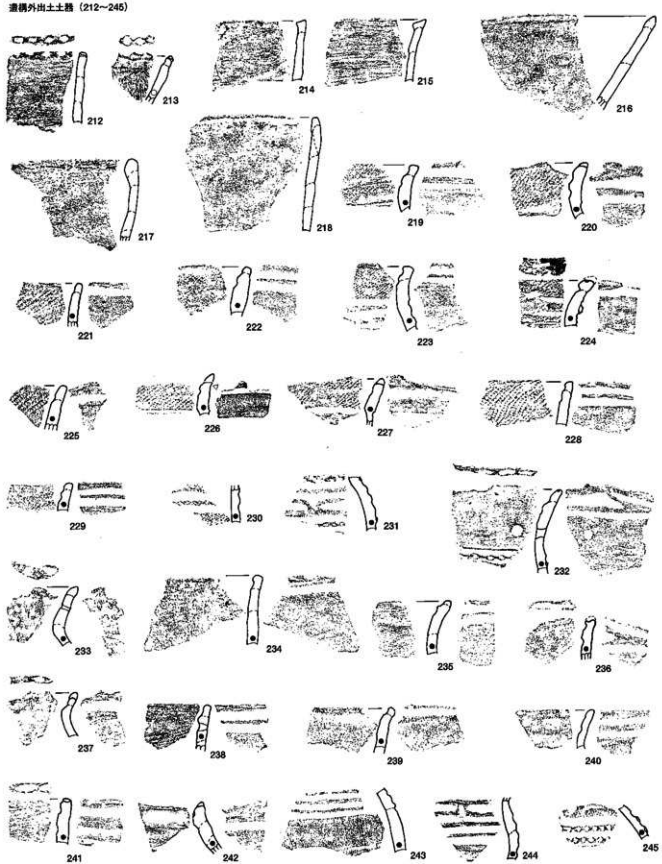
第24図　縄文～弥生土器、土製品実測図（9）

遺構外出土土器（165～211）



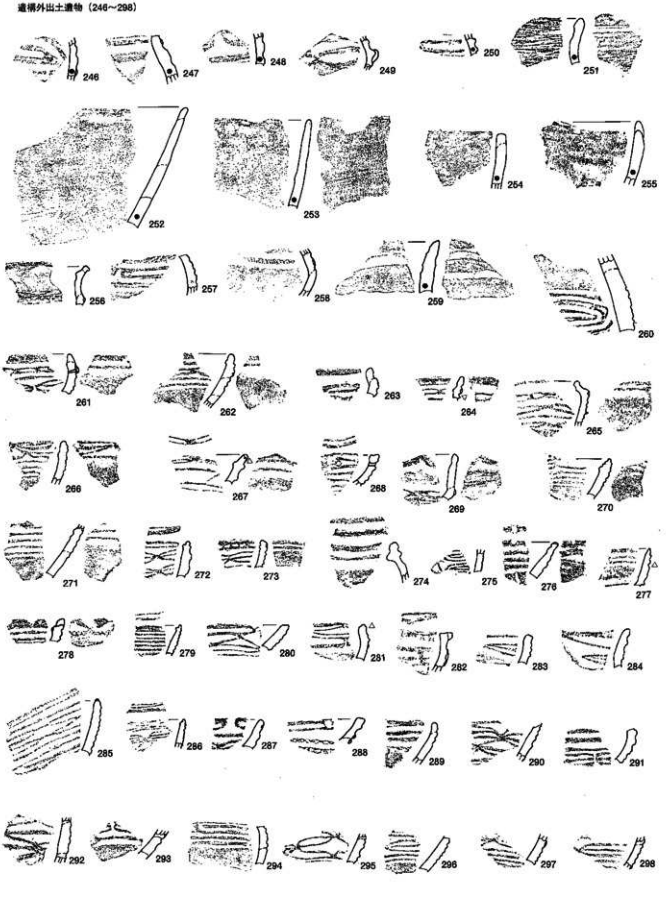
第25図　縄文～弥生土器、土製品実測図（10）

遺構外出土土器（212～245）

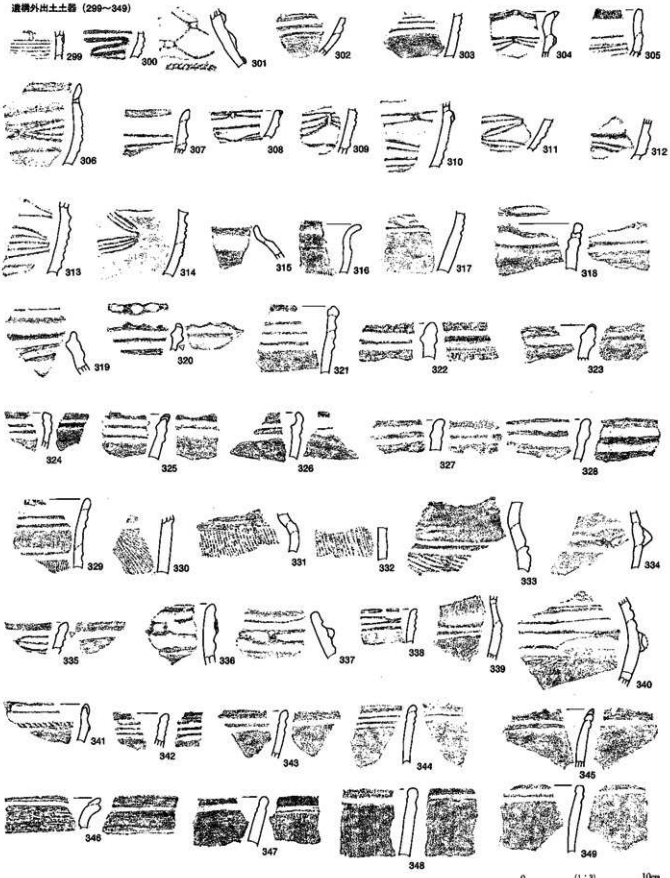


第26図　縄文～弥生土器、土製品実測図（11）

遺構外出土遺物（246～298）

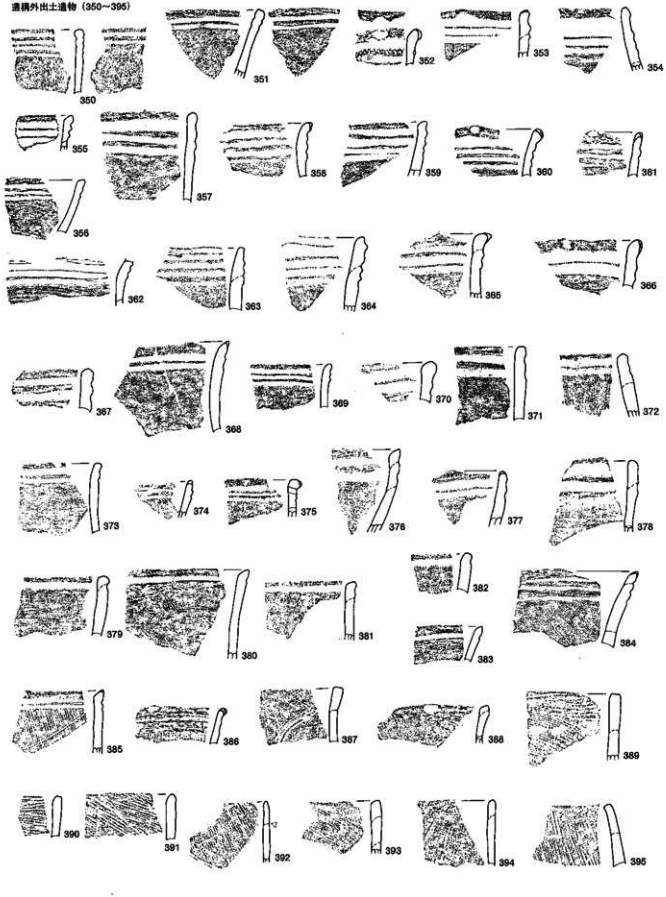


第27図　縄文～弥生土器、土製品実測図（12）

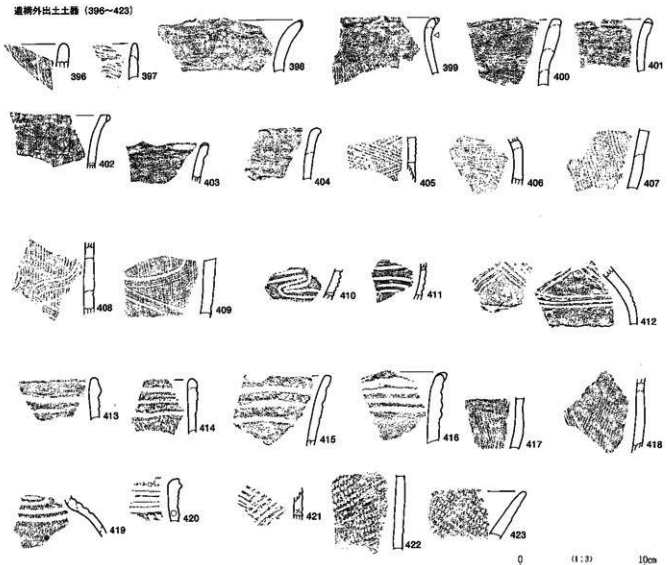


第28図　縄文～弥生土器、土製品実測図 (13)

遺構外出土遺物（350～395）



第29図　縄文～弥生土器、土製品実測図（14）



第30図　縄文～弥生土器、土製品実測図（15）

⑩　無文粗製土器［D6－12・13、D7－4・61～65、Q3－26・31・32、M1－14、M6－7、試掘1号トレンチ1号堀竪址1（以下、U1）、115～118・212～218］

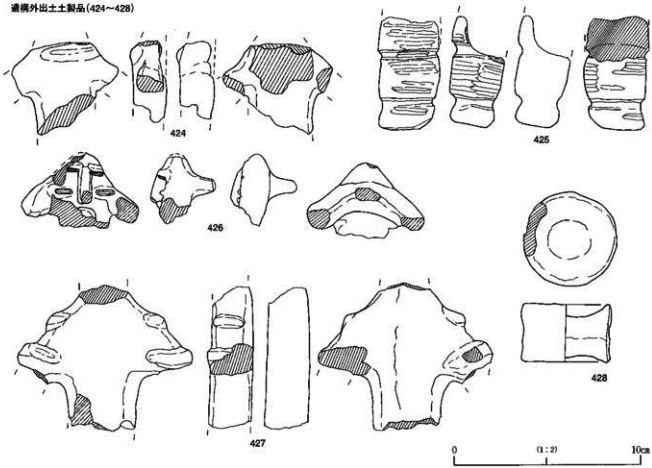
D6－12、D6－13、Q3－26、M6－7、115～118は後期中頃～後半の無文粗製土器。器壁が厚く、砲弾形で屈曲がなく、内湾気味に立ち上がる。M1－14も同類だが、内面にかすかに条痕が残る。

D7－4・61～65、Q3－31・32、U1－1、212～218は115～118などより器壁が薄く、器面にオサエ痕跡が顕著に残る。晩期前半に属する可能性があり、口唇部に圧痕が加えられる例もある。

⑪時期不明の土器［D6－14、D7－66、Q3－16・27・29・30、198～211］

D6－14は小波状で全面縄文。浮線文甕に似るQ3－16は内面が異常だ。Q3－27は竹管状工具で沈線を描く。198～203は正体不明。Q3－29・30、204～209は口縁部に沈線帯をもつが、帰属時期は不明。210は無文の鉢、211は注口部で、やはり帰属時期不明。これらはいずれも、加曽利B1式以前ではなさそうで、浮線文期にも下らないだろう。

D7－66は皿もしくは蓋。蓋なら三十稲場式、御経塚式、初期弥生土器あたりか。



第31図　縄文～弥生土器、土製品実測図（16）

（3）土製品の概要（第16、31図）

① 土偶［D7－5、424～427］

5点出土。D7－5は中空の体部～脚部。首部直下～肩部にかけて爪形がつく。体部下位側には孔が開いていた可能性がある。後期中頃の仮面土偶の可能性がある。424は中実で板状の肩部～体部。首部直下に粘土紐を貼付する。425は接合痕跡が明瞭に残る脚部。太い凹線2条を巡らせ、ミガキが明瞭だ。426は頭髪が左右に垂れ下がり、後頭部が突出する頭部。眉と鼻は一体化したT字状の貼付で表現する。後期中頃の山形土偶の仲間か。427は中実で板状の肩部～体部。肩部と上腕に粘土紐を貼付し、肩を怒らせたような表現とする。浮線文期に属するか。

② 土製耳飾り［428］

1点出土。無文白形の428はやたらと厚く、側面のくぼみが弱く、表裏の区別が曖昧だ。粘土塊2つを上下に重ねて成形し、側面に薄い粘土帯を巻き付け、端部は指でつまみ出すので不整形である。後期前半の所産と見たがどうか。

③ 土製円盤［D7－6～10］

45点あり、D7出土の5点だけ図示した。素材の土器片はほとんど無文だが、D7－8など佐野2式と共通の胎土をもつ7点と、D7－9・10など素材が浮線文土器だと判断できる3点は、時期を決めることができそうだ。中心に孔を穿つ例が2点、穿ちかけて中止した例が1点含まれる。円盤周辺を研磨する例と打ち欠いただけの例は半々程度である。

※引用文献は第Ⅷ章にまとめて示した。

第３節　保地遺跡Ⅱ出土の石器について

今回の調査では、整理箱約15箱分の石器が出土した。これらの石器のほとんどは、遺構に伴わない調査区一括の遺物である。よって、本節で一括して概略を触れることとする。(註１)

(１) 原石・石核・剥片・砕片

黒耀石が、原石・石核・剥片・砕片合わせて、約9.3kg、約5000点出土している点が注目される。黒耀石が、石鏃や刃器といった小形剥片石器の素材であり、かつ調査面積が約960㎡と決して広大ではないことを考慮すれば、その出土量は非常に多いといえる。このことは、この地で黒耀石製の石器が製作されていたことを示唆するものであろう。黒耀石は和田峠周辺などが原産地と思われるが、どのような経緯でこれらの黒耀石がこの地に持ち込まれ、石器が製作されたのかは今後の課題としたい。

(２) 石鏃 (32－１～７、写真図版13－１～20)

石鏃は今回出土した石器の中でもっとも多く、320点が出土している。石材では、黒耀石製が204点(63.8%)と、全体の６割以上を占め、黒耀石以外の石材では、頁岩、チャートなどが見られる。

形態別に見ると、基部が確認できるもの263点のうち、無茎の石鏃は31点（11.8%)、有茎の石鏃は232点(88.2%)で、９割近くが有茎石鏃であり、晩期的な様相を示しているものが多い。

有茎石鏃は、抉りの入る凹基は153点（65.9%）と、入らない平基・凸基は79点（34.1%）があり、石鏃全体で見ても、半数以上の石鏃は有茎凹基であることが分かる。さらに、石材については、平基・凸基の場合、黒耀石製は77点中、26点（33.8%）であるのに対し、有茎凹基の石鏃は、黒耀石製が153点中、123点（80.3%）と大半を占めており、特徴的な傾向を示している。すなわち、同じ有茎石鏃でも、凹基の石鏃と凸基・平基の石鏃では、使用されている石材が大きく異なっているということである。

側辺部の形状は直線的なもの、内弯するもの、外弯するもの、段を持ち飛行機鏃の形状を呈するものなどが見られ、このうち飛行機鏃は30点出土している。また、鋸歯状の側辺部をもつ石鏃は無茎石鏃で１点、有茎石鏃で36点あり、有茎石鏃では一定の割合を占めているといえる。この他に、中心部の片面が調整されず、瘤状に突起して残っているものが12点確認できた。この瘤状の突起は黒耀石以外の石材に見られるが、数が少ないため詳細は不明である。

(３) 石錐 (32－８・９、写真図版14－１～17)

石錐は22点出土した。形態的には大別して、両端が尖った棒状のもの（４点）と、先端機能部と基部が明瞭に区別できるもの（９点)、欠損等のため分類できないもの（９点）に分けられる。石材は頁岩が18点と多く、黒耀石は３点、チャートは１点である。

(４) 刃器・横刃形石器・石匙 (33－１・２、写真図版14－18～30、15－１～２)

剥片縁辺部に刃部が作出され、切る、削く作業が想定できる石器は104点出土した。これらは掻器・削器・横刃形石器・石匙などに分類されるものであるが、石匙（つまみ部が作出されたもの)、横刃形石器（剥片の長辺部に刃部を作出したもの）以外のもの（削器・掻器など）は刃器と総称した。この他に、剥離した素材を加工せずに用い、刃器と同様の作業を行った形跡のある剥片が７点出土している。さらに、刃器以外の分

類にも入りうる石器であるが、素材の両側縁の表裏を中軸線付近まで深く調整して刃部を作出しているものが7点出土している。

刃器は97点出土した。刃部は直刃あるいは外刃を呈し、内刃を呈するものは出土していない。長さ概ね4cm未満の小形刃器と4cm以上の大形刃器に分類できる。形状は小形・大形共、多岐にわたっており、ここでは特に細分はしない。小形刃器は75点出土し、黒耀石が主体である。刃部は素材の縁辺を調整して作出されるものと、中軸線付近まで深く調整しているものがある。大形刃器は22点出土し、頁岩・安山岩が主体である。刃部は素材の縁辺に作出されるものが多い。

石匙は4点出土した。石材は黒耀石1点、頁岩2点、安山岩1点である。黒耀石製のものはつまみが丁寧に作り出されているが、他の3点のつまみは、抉りが浅く入るのみで粗雑なつくりである。

横刃形石器は3点確認できた。いずれも頁岩製である。

(5) 打製石斧 (33－3、写真図版15－3～5)

打製石斧は19点出土している。石材は頁岩12点、粘板岩2点、安山岩5点で堆積岩主体である。全体形を把握できるものは7点のみで、いずれも全体は長方形・台形を呈する。刃部については直線的なもの（4点）と、曲線的な外刃形を呈するもの（3点）が見られ、胴部については両側縁を調整するもの（6点）と片側面のみ調整するもの（1点）が確認できる。

(6) 磨製石斧 (33－4、写真図版15－6～10)

磨製石斧は11点出土した。石材は蛇紋岩4点、砂岩3点、透緑岩3点、頁岩1点である。いずれも定角式で、大形のもの（7点）と小形のもの（3点）とがある。

(7) 石棒・石刀 (33－9、写真図版15－11・12)

石棒1点・石刀4点が出土したが、いずれも欠損している。石棒は頭部の表裏両面に「×」形の線刻が刻まれている。石材は結晶片岩2点、頁岩3点である。

(8) 磨石・敲石・凹石・石皿・台石・砥石 (33－5～8、写真図版16－1～12)

磨石・敲石・凹石は円形や楕円形を呈するものが多く、長楕円形・長方形を呈するものが少量加わる。大きさについては大小様々で規則性は確認できない。いずれも川原石が素材として用いられているが、素材を加工した痕跡の見られるものは合わせて3点のみであり、ほとんどが川原石を無加工で使用している。

磨耗面をもち、「する」作業が想定できる磨石は54点出土した。磨耗面は1面のみに見られるものが21点、表裏両面や側面まで磨耗面が見られるものは33点である。磨耗面以外に敲打痕が見られるものや、凹み部が見られるものは30点あり、多くの磨石が「する」作業のほかに、敲石や凹石として併用あるいは転用されていたことを示している。

この他に敲打痕のみをもち「たたく」作業が想定できる敲石は52点出土している。このうち、重量60gの小形のものは海岸礫のような素材で、表面は研磨されてはいないが光沢があり、その一部に敲打痕が見られるもので、ほかの敲石とは異質である。小形の剥片石器製作に用いたのであろうか。凹部のみをもつ凹石は1点出土している。

置かれて使用され、「する」・「たたく」作業が想定される石皿・台石は11点出土した。いずれも安山岩製で

ある。石皿は5点出土し、いずれも全体が整形されている。このうち、板状の素材に浅い皿部が形成されたものが4点、肉厚の素材に深い皿部が形成されたものが1点出土した。台石は板状の素材を整形して使用され、敲打痕が片面全面で確認できるものが1点出土した。この他に板状の素材で磨耗面が確認できるものが5点出土しているが、欠損が著しく詳細は不明である。

砥石は1点出土した。板状の砂岩で、砥面は幅0.5～1.0cmの筋状を呈し、それが表裏2面共に複数形成されている。

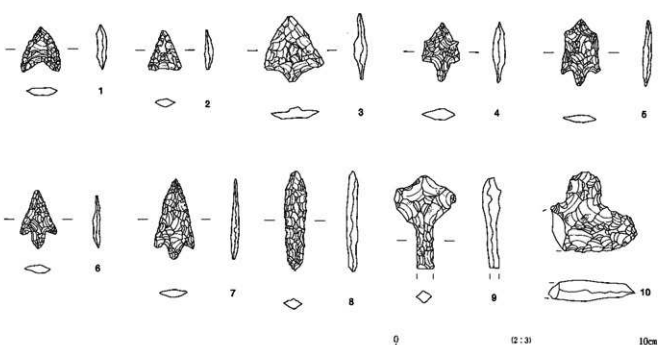
（9）その他の石器（33－10　写真図版15－13・14）

用途不明で今までの分類に該当しない石器4点をここで一括する。このうち2点は球状を呈し、全面研磨された丸石である。大きさは径3.3cm、3.5cmとほぼ同じで、丁寧に全面が研磨され光沢が著しい。また、いずれの個体も径1.0cm前後の平坦面が形成されている。このほかに、表面研磨されたヒスイ、透緑岩がそれぞれ1点出土しているが、いずれも敲打痕や磨耗面をもたず、用途は不明である。

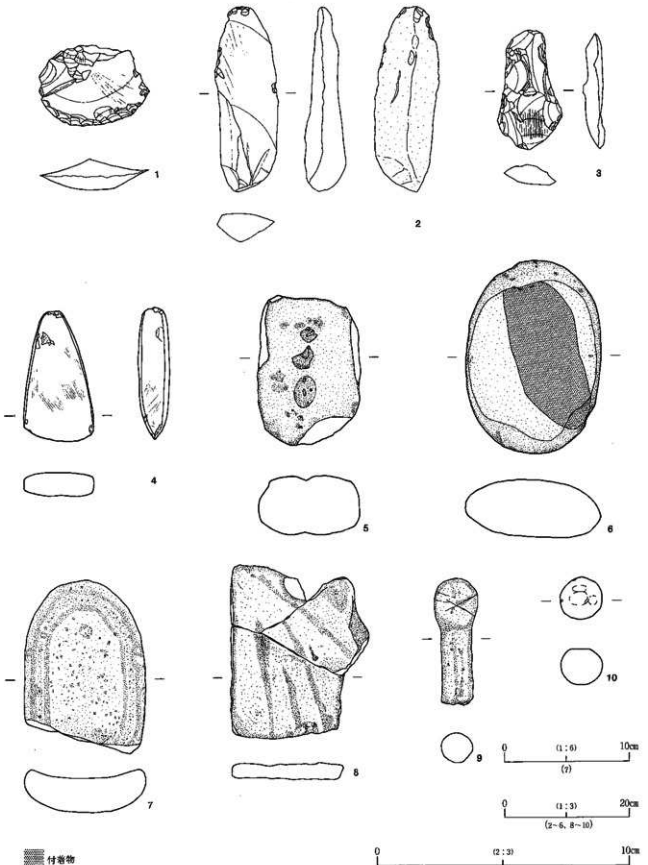
註

1　石器の分類、分析法は、以下の報告書を参考にした。

(財)長野県埋蔵文化財センター　1993『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11－明科町内－　北村遺跡』



第32図　出土石器実測図（1）



第33図　出土石器実測図（2）

第4節　本調査の結果

1　竪穴住居址

(1)　H1号住居址

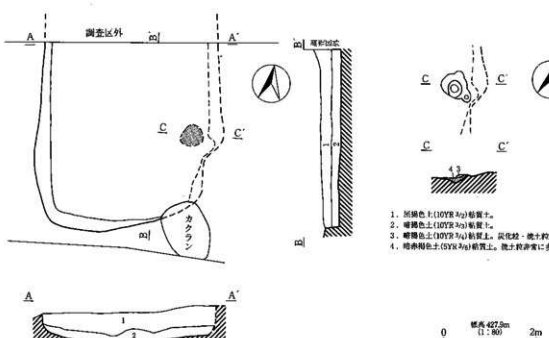
遺構（第34図）

検出位置　Oこ5・6、Tあ5・6グリッド。**重複関係**　D10号土坑址、Q1号特殊遺構に切られる。H2・3・7号住居址、D7・9号土坑址を切る。**平面形態**　北側が調査区外に延びているため、明確ではないが、南北に長い隅丸長方形を呈すると思われる。東西は3.9mを測り、軸方位はN－81°－Eを指す。**壁残高**は50～70cmを測る。**覆土**　黒褐色粘質土に覆われていた。**床面の状況**　概ね平坦だが、軟弱であった。**ピット**　検出されなかった。**カマド**　東壁のやや南寄りで検出されたが、遺存状態は悪く、カマド構築に用いられたと思われる粘土塊と礫が、焼土の周囲に散在しているのみであった。主軸方位は、N－86°－Eを指す。**遺物の出土状況**　覆土中より土師器・須恵器と、縄文土器・石器などの縄文時代の遺物が出土している。

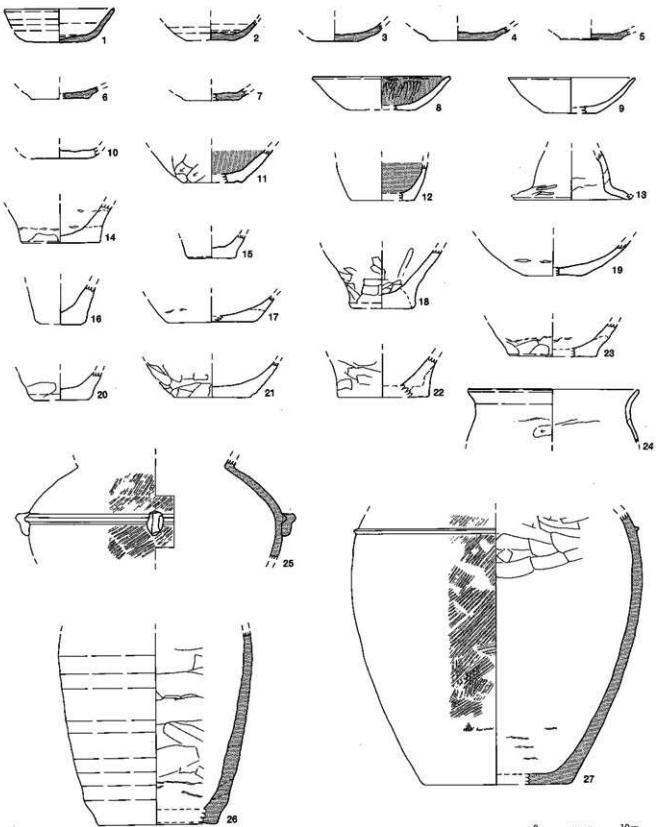
遺物（第35・36図）

土師器では黒色土器や武蔵甕、いわゆる砲弾甕と称される甕が出土し、須恵器では、坏や突帯付四耳壺などが出土している。

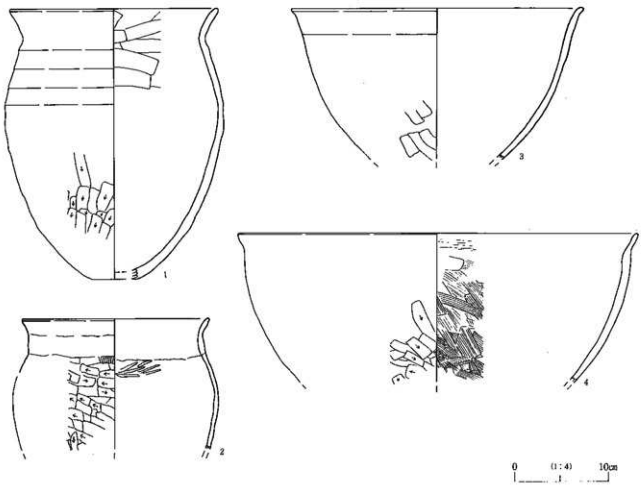
時期　出土遺物から奈良時代から平安時代（8世紀末～9世紀前半）に位置付けられる。



第34図　H1号住居址・カマド実測図



第35図　H１号住居址出土土器実測図①

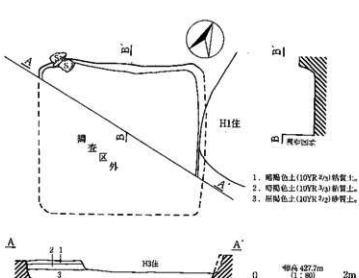


第36図　H1号住居址出土土器実測図②

（2）H2号住居址

遺構（第37図）

検出位置　Oこ6、Tあ6グリッド。**重複関係**　H1・3号住居址に切られる。H10号住居址を切る。**平面形態**　南側が調査区外に延びているが、1辺3.5mの隅丸方形を呈すると思われる。東西の軸方位はN－54°－Eを指す。**覆土**　3層に分かれる。**床面の状態**　概ね平坦で比較的堅固であった。**ピット**　検出されなかった。**カマド**　検出されなかった。**遺物の出土状況**　覆土中より土師器・須恵器が出土しているが、図化できるものはない。他に、縄文土器・石器も出土している。**時期**　判断材料が乏しいが、住居址の重複関係から、奈良時代（8世紀）ころに位置付けられよう。

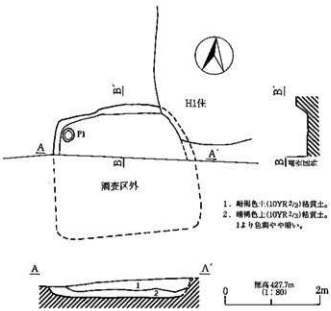


第37図　H2号住居址実測図

（3）H３号住居址

遺構（第38図）

検出位置　Oこ６、Tあ６グリッド。**重複関係**　Ｈ１号住居址に切られる。Ｈ２号住居址を切る。**平面形態**　南側が調査区外に延びているが、１辺約3.0mの隅丸方形を呈すると思われる。東西の軸方位はＮ－81°－Ｅを指す。**覆土**　２層に分層できる。**床面の状態**　概ね平坦だが、堅固ではなかった。ピット　北西隅に１基検出された。円形を呈し、直径約25cm、深さ３～５cmを測る浅いピットである。これが住居址の柱穴となるかは不明である。**カマド**　検出されなかった。**遺物の出土状況**　覆土中より土師器・須恵器片が出土しているが、図化できるものは出土しなかった。



第38図　Ｈ３号住居址実測図

時期　Ｈ２号住居址同様、時期を判断できる遺物がないため、住居址の重複関係から、奈良時代に位置付けておきたい。

（4）H４号住居址

遺構（第39図）

検出位置　Tう･え６グリッド。**重複関係**　Ｆ１～３号掘立柱建物址に切られる。Ｐ121～126を切る。**平面形態**　南側が調査区外に延びているが、南北に長い隅丸長方形を呈すると思われる。東西は3.3mで、軸方位はＮ－91°－Ｗを指す。壁残高は、9.5～22cmを測る。**覆土**　４層に分層できる。**床面の状態**　概ね平坦で堅固であった。**ピット**　４基確認され、このうち、Ｐ１・３・４が主柱穴にあたると思われる。Ｐ１は円形を呈し、深さは16～21cmを測る。Ｐ２は円形を呈すると思われ、11～16cmを測る。Ｐ３は円形を呈し、深さは19～23cmを測る。Ｐ４は楕円形を呈すると思われ、深さは19～29cmを測る。**カマド**　西壁にて検出された。遺存状態は良好で、両袖と天井石が遺存している。長軸の方位はＮ－94°－Ｗを指す。両袖は、川原石を粘土で覆って構築されていた。天井部の構築には石と円筒形土製品（41－13）が芯材として用いられていたようである。また、円筒形土製品と並んで横転した状態で出土した小型甕（41－10）も出土状況から天井構築材として用いられた可能性はある。３つの長胴甕（41－10～12）が南北に並んで立てられた状態で出土しているので３連式のカマドであると思われるが、支脚は中央の個体（41－12）の下からのみ出土している。**遺物の出土状態**　カマド周辺から土師器が多量に出土している。ほかに住居址北西隅より耳環が２点出土している。また他の住居址同様、縄文土器・石器、土師器・須恵器も覆土中から出土している。

遺物（第40・41図）

40－１・２は鍍銀製の耳環である。両者の出土位置が近く、いずれも楕円形を呈し、長径は3.0cm、重量は、若干の損傷は見られるものの、それぞれ15.0ｇ、16.0ｇを測るので、対になっていたものと考えられる。

41－1～4は土師器の坏である。いずれも内面は黒色処理が施され、外面はヘラ状工具によるナデ及びケズリにより調整されている。

41－5・6は土師器の高坏でそれぞれ脚部・坏部を欠損している。

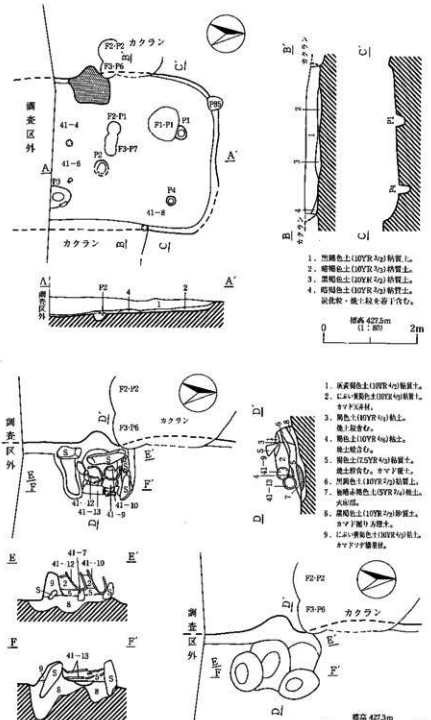
41－7は土製の支脚である。カマドの火床部に現位置のまま出土した。胎土に砂礫を多く含み、調整は粗いナデが施されているのみである。上面は、ススが付着し、被熱を受けてやや変色している。

41－9は小型甕である。41－7同様、胎土に砂礫を多く含み、調整も粗い。横転した状態で41－13に隣接して出土したことから、カマドの構築材として使用された可能性も考えられる。

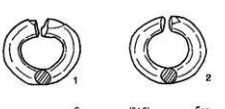
41－8・10～12は土師器の甕である。41－8は底部のみで、ややつぶれた丸底を呈する。41－10～12は長胴甕である。カマドに据えられた状態で出土した。いずれも外面には縦位のハケ調整が施されている。

41－13は円筒形土製品である。器高は55cmを測り、外面は長胴甕と同様、縦位のハケ調整が施されている。内面はほとんど施されておらず、輪積み痕が明瞭に残っている。

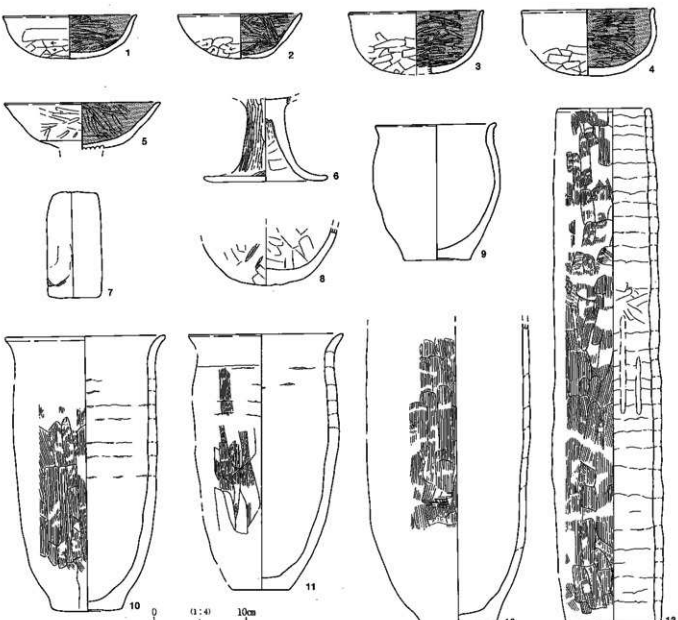
時期　出土遺物から古墳時代後期（6世紀末～7世紀初）に位置付けられる。



第39図　H4号住居址・カマド実測図



第40図　H4号住居址出土耳環実測図



第41図　H４号住居址出土土器実測図

（５）Ｈ５号住居址

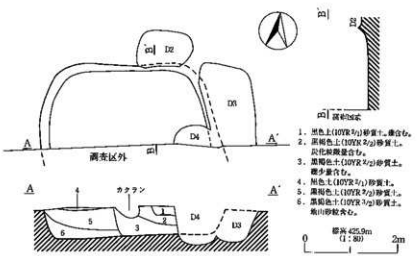
遺構（第42図）

検出位置　Tお６・７、Tか６・７グリッド。**重複関係**　Ｄ２～４に切られる。**平面形態**　Ｄ３・４号土坑址に東側が切られている上、南側が調査区外に延びているため詳細は不明であるが、東西約3.8mの隅丸方形あるいは長方形を呈するものと思われる。壁残高は41~60cmを測る。東西の軸方位は、Ｎ－80°－Ｅを指す。**覆土**　６層からなる。１～３層と４～６層の２つに大別でき、前者が後者を切るように堆積している。そのため、１～３層は別遺構に伴う覆土とも考えられるが、両者の底面の深さが同一で平坦面を形成していることから、１～６層は同一遺構に伴う覆土と判断した。**床面の状態**　前述のように概ね平坦であり、堅固であった。**ピット**　検出されなかった。**カマド**　検出されなかった。**遺物の出土状況**　覆土中から土師器・

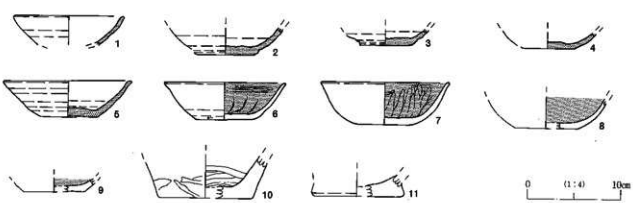
須恵器が出土している。縄文土器・石器の混入も見られる。

遺物（第43図）

図化できたものは11点である。5は須恵器の坏であるが、灰白色を呈する焼成の悪いもので、胎土には砂粒などが多く混入している。6・7は黒色土器で内面は丁寧にヘラミガキが施されている。特に、6の内面は底部から放射



第42図　H5号住居址実測図



第43図　H5号住居址出土土器実測図

状に広がる細いヘラミガキが施されているのが特徴的で、腰部は回転ヘラケズリが施される。

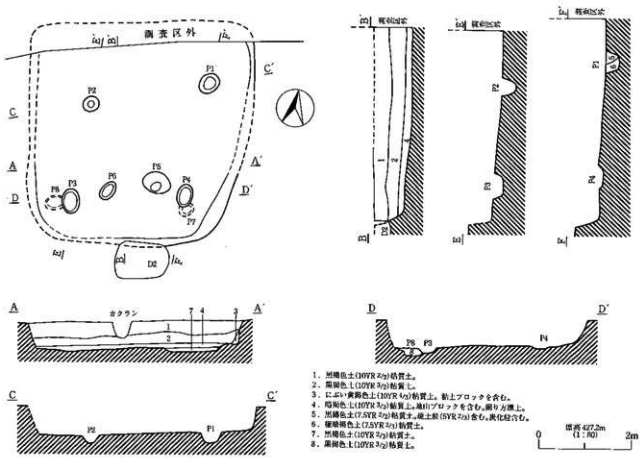
時期　43－5～7などの遺物から判断すると、平安時代（9世紀前半～中葉）に位置付けられる。

（6）H6号住居址

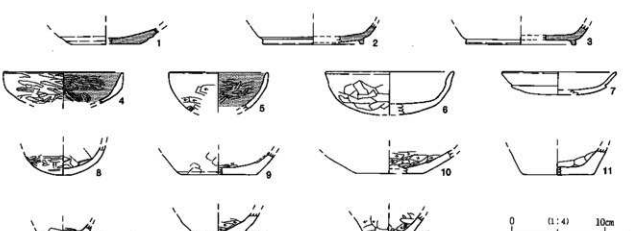
遺構（第44図）

検出位置　T-お5・6、T-か5・6グリッド。**重複関係**　D2号土坑址、S2・3号集石址に切られる。H11～13号住居址を切る。**平面形態**　北側は調査区外に延びているため不明であるが、やや歪んだ隅丸方形を呈すると思われる。東西約4.6mを測る。**覆土**　黒褐色・暗褐色を呈する3層に被覆されていた。**床面の状態**　概ね平坦で堅固であった。**ピット**　床面上で6基、掘り方で2基検出された。このうちP1～4が主柱穴と思われる。これらのピットはやや歪んだ正方形に配列しており、1辺の長さは約2.5mである。**カマド**　検出されなかった。**遺物の出土状況**（第45図）　覆土中より土師器・須恵器が出土し、縄文土器・石器が混入している。図化できたものは14点であるが、いずれも残存度は低く、詳細を知ることはできない。土師器の坏・甕、須恵器の坏・高台付坏などがある。

時期　判断材料が乏しいが、奈良時代（7世紀後半～8世紀前半）ころに位置付けられよう。



第44図　H６号住居址実測図



第45図　H６号住居址出土土器実測図

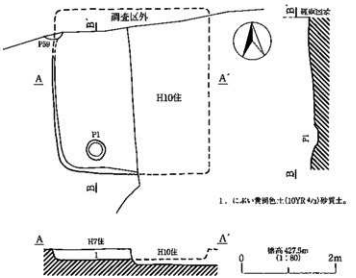
（7）H７号住居址

遺構（第46図）

検出位置　Tあ５・６、Tい５・６グリッド。**重複関係**　H２・10号住居址、P８・13・19・24・59・60に切られる。**平面形態**　遺存している部分が少ないため詳細は不明であるが、東西3.4mの隅丸方形を呈するも

のと推定される。**覆土**　にぶい黄褐色砂質土に覆われていた。**床面の状態**　概ね平坦であるが堅固ではなかった。**ピット**　1基検出されたが、性格は不明である。**カマド**　検出されなかった。**遺物の出土状況**　覆土中より土師器・須恵器、縄文土器・石器などが出土しているが、いずれも少量である。

時期　不明であるが、重複関係から奈良時代以前に位置付けられようか。

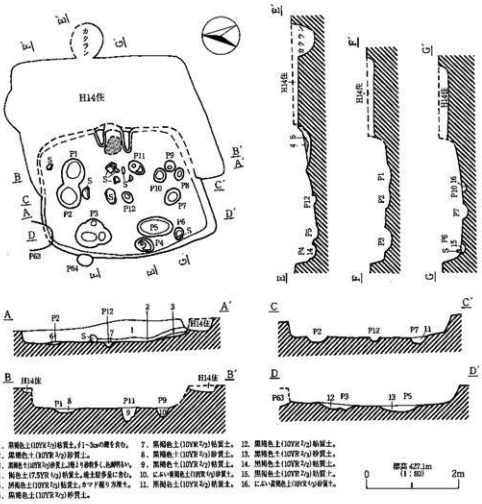


第46図　H7号住居址実測図

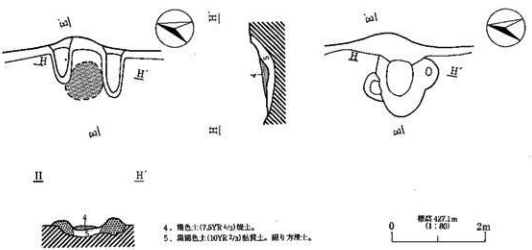
(8) H8号住居址

遺構（第47・48図）

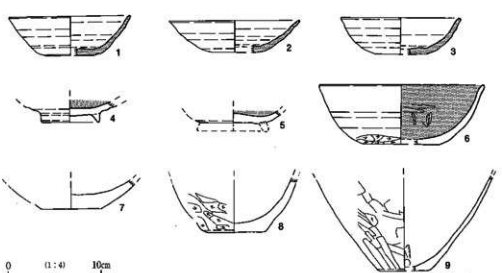
検出位置　Tき6・7グリッド。**重複関係**　H14号住居址、P58・63・64に切られる。H



第47図　H8号住居址実測図



第48図　H８号住居址カマド実測図



第49図　H８号住居址出土土器実測図

12号住居址を切る。**平面形態**　やや歪んだ隅丸長方形を呈し、長軸は3.4m、短軸は2.9mを測る。長軸の方位はN－14°－Wを指す。壁残高は５～30cmを測る。**覆土**　黒褐色土に覆われていた。**床面の状態**　概ね平坦であるが、軟弱であった。**ピット**　12基検出された。これらのうち、Ｐ１・３・６・10が主柱穴と考えられる。**カマド**　東壁中央部で検出されたが、火床部は遺存していたものの、両袖は殆ど破壊されていた。主軸方位は、N－90°－Eを指す。**遺物の出土状況**　土師器・須恵器、縄文土器・石器が出土している。

遺物（第49図）

１～３は須恵器の坏で、底部はいずれも回転糸切り未調整である。６は黒色土器の坏で、腰部と底部は手持ちヘラケズリが施されている。９はいわゆる武蔵型甕の底部で、外面はヘラケズリ調整で器壁は薄く仕上げられている。

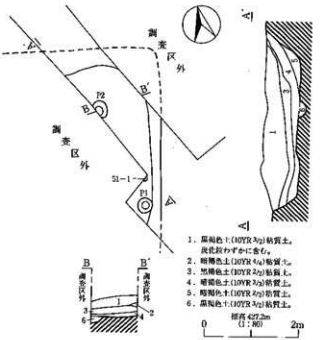
時期　出土遺物から、平安時代前半（９世紀）に位置付けられる。

（9）H９号住居址

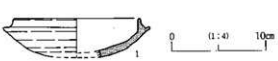
遺構（第50図）

検出位置　Tけ５・６グリッド。**重複関係**　Q３号特殊遺構を切る。**平面形態**　東壁と北壁の一部が検出されたのみであるため、詳細は不明であるが、方形ないし長方形の住居址と思われる。壁残高は39～55cmを測る。**覆土**　６層に分層されるが、いずれも黒褐色・暗褐色を呈する粘質土である。**床面の状態**　概ね平坦であるが、堅固ではなかった。**ピット**　２基検出されたが、これらの性格は不明である。いずれも円形で、Ｐ１の深さは23～30cm、Ｐ２は11～13cmである。**カマド**　検出されなかった。**遺物の出土状況**　覆土中から土師器・須恵器、縄文土器・石器が出土しているが、図化できたものは須恵器の坏１点(51－１)のみである。

時期　不明であるが、51－１は古墳時代後期の須恵器であるので、その時期前後に位置付けられようか。



第50図　H９号住居址実測図

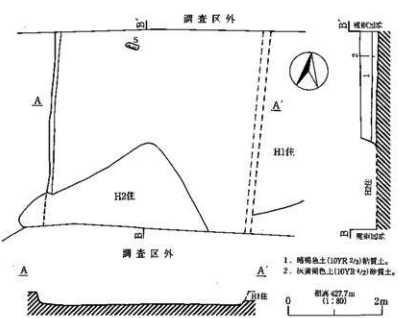


第51図　H９号住居址出土土器実測図

（10）H10号住居址

遺構（第52図）

検出位置　Tあ５・６グリッド。**重複関係**　H１～３号住居址、Ｐ４・25・40・72に切られる。Ｈ７号住居址を切る。**平面形態**　西壁の一部が残っているのみのため、詳細は不明である。**覆土**　暗褐色、および灰黄褐色土に被覆されていた。**床面の状態**　概ね平坦で堅固であった。**ピット**　検出されなかった。**カマド**　検出されなかった。**遺物の出土状況**　土師器・須恵器・縄文土器・石器などが出土しているが、出土量は少なく、図化



第52図　H10号住居址実測図

できるものは出土していない。

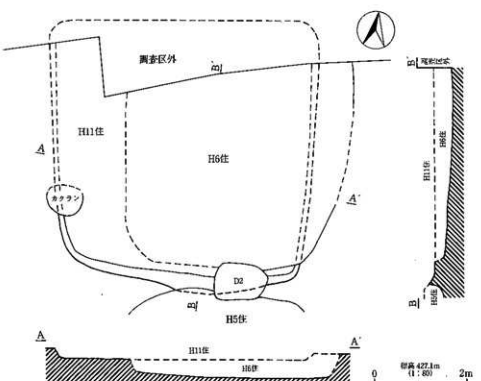
時期　不明であるが、Ｈ１号住居址（８世紀末～９世紀前半）に壊されているので、それ以前に属する。

(11) Ｈ11号住居址

遺構（第53図）

検出位置　Ｔお５・６、Ｔか５・６グリッド。**重複関係**　Ｈ５・６号住居址、Ｄ２号土坑址に切られる。Ｈ12・13号住居址を切る。**平面形態**　東西の壁面のごく一部と、南壁が残っているのみであるため詳細は不明であるが、１辺5.0m前後の方形ないし長方形を呈すると思われる。壁残高は19～27cmを測る。**覆土**　黒褐色土に覆われていた。**床面の状態**　概ね平坦であった。**ピット**　検出されなかった。**カマド**　検出されなかった。**遺物の出土状況**　土師器・須恵器、縄文土器・石器が出土しているが、少量である。図化できるものは出土していない。

時期　重複関係からＨ６号住居址からＨ12号住居址の間の所産であり、奈良時代に属するが、詳細は不明である。



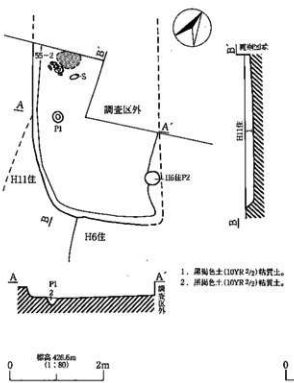
第53図　Ｈ11号住居址実測図

(12) Ｈ12号住居址

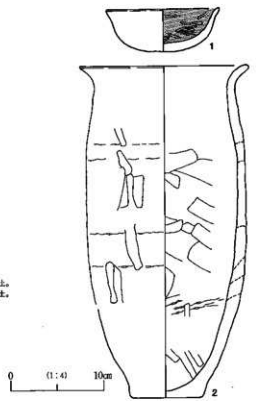
遺構（第54図）

検出位置　Ｔか５・６、Ｔき５・６グリッド。**重複関係**　Ｈ６・11号住居址に切られる。Ｈ13号住居址を切る。**平面形態**　西壁の一部と南壁が遺存しているのみであるが、短軸2.5m前後のやや歪んだ隅丸長方形を呈すると思われる。**覆土**　黒褐色土に被覆されていた。**床面の状態**　概ね平坦であった。**ピット**　１基検出された。円形を呈し、深さは13～16cmを測る。**カマド**　検出されなかった。しかし、Ｐ１の北側で粘土塊が検

出され、その周囲から礫と長胴甕が出土していることから、その周辺に設置されていた可能性はある。**遺物の出土状況**　土師器・須恵器・縄文土器・石器が覆土中から出土している。また、前述のように粘土塊の南側床面上から長胴甕が出土している。



第54図　H12号住居址実測図



第55図　H12号住居址出土土器実測図

遺物（第55図）

図化できたものは2点である。55－1は土師器の坏で、内面は黒色処理されヘラミガキが施されている。55－2は長胴甕で、内外面ともナデ調整である。

時期　出土遺物と重複関係から、奈良時代（7世紀前半）に位置付けられる。

(13) H13号住居址

遺構（第56図）

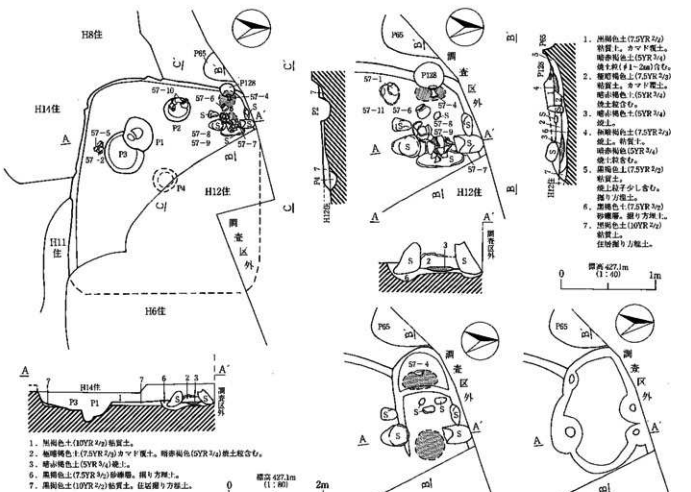
検出位置　Tか6・7、Tき6・7グリッド。**重複関係**　H6・8・11・12・14号住居址、P128に切られる。D6号土坑址を切る。**平面形態**　北壁の大部分と東壁は他の遺構に破壊されているが、長軸約4.5m、短軸3.8mの隅丸長方形を呈すると思われる。**覆土**　黒褐色土に被覆されていた。**床面の状態**　概ね平坦で堅固な床面であった。**ピット**　4基検出された。このうちP4は床下ピットである。P1はP3に切られているので正確な形状は不明である。深さは28～40cmを測る。P2は径約55cmの円形を呈し、深さは約35cmである。P3は径約90cmの円形を呈し、深さは約15cmである。P4は一部H12号住居址に切られているが、径約55cmの円形を呈すると思われる。深さは14cmを測る。**カマド**　北西隅で1基検出され、袖石と火床部が遺存していた。長軸方位はN－96°－Wを指す。火床面は袖石付近であるが、その西側の煙道部分にあた

る西壁際からも焼土が検出されている。この焼土の性格は不明であるが、火床部を移動させた可能性も考えられる。**遺物の出土状況**　土師器が多量に出土している。これらは主にＰ２・３の周辺とカマドより出土している。須恵器の出土量は少なく、図化できるものは出土していない。縄文土器・石器といった縄文時代の遺物も見られるが、いずれも覆土中からの出土である。

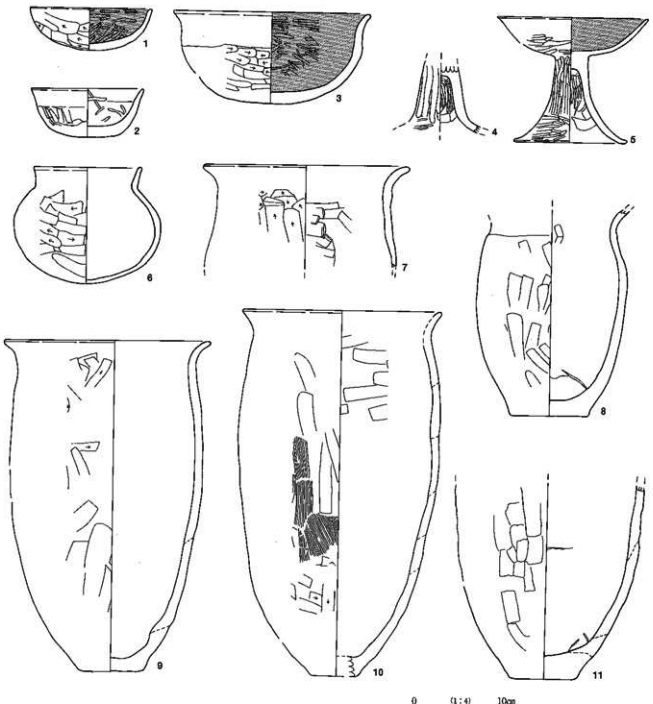
遺物（第57図）

図化できたものは11点あり、いずれも土師器である。１・２は坏で、いずれも内面にはヘラミガキが施されている。１はカマド周辺より出土し、２はＰ３南側より出土した。3は鉢で、口縁端部が外反している。また、内面は黒色処理され、坏と同様にヘラミガキが施されている。30－４はカマドの煙道付近から出土した高坏である。坏部の内面は黒色処理され、外面は坏部・脚部共ヘラミガキ調整である。５は坏で、２に隣接してＰ３の南側より出土した。６は小型の甕で、カマドから出土している。胴部の外面は横方向のヘラケズリ調整で、口縁部は内外面ともヨコナデされている。７～11は長胴甕である。10のみＰ２周辺の出土で、他はカマドより出土した。

時期　本址の所属時期は出土遺物と重複関係から古墳時代後期から奈良時代（６世紀後半～７世紀前半）に位置付けられる。



第56図　H13号住居址・カマド実測図



第57図　H13号住居址出土土器実測図

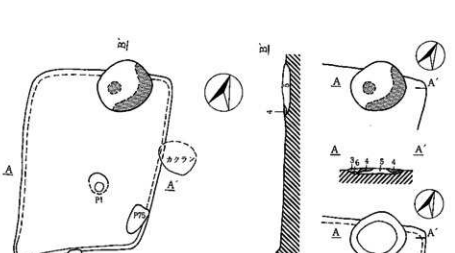
(14) H14号住居址

遺構（第58図）

検出位置　Tか6・7、Tき6・7グリッド。**重複関係**　P75、79に切られる。H8・13号住居址を切る。**平面形態**　長軸3.9m、短軸3.1mのやや歪んだ隅丸長方形を呈する。長軸方位はN－18°－Wを指す。**覆土**　黒褐色土に被覆されていた。**床面の状態**　概ね平坦であった。**ピット**　1基検出された。楕円形を呈し、深さは30～34cmを測る。**カマド**　北壁のやや東よりで焼土と粘土が検出されたのでこの部分にカマドが

あったものと思われる。**遺物の出土状況**　覆土中より土師器・須恵器、縄文土器・石器が出土しているが、図化できるものは出土していない。

時期　時期判断できる遺物がないため不明であるが、重複関係から平安時代以降の住居址といえる。



第58図　H14号住居址・カマド実測図

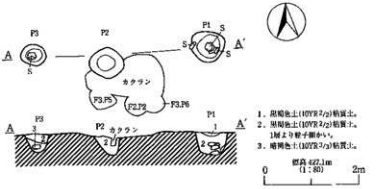
2　掘立柱建物址

(1) F1号掘立柱建物址

遺構（第59図）

検出位置　Tえ・お6グリッド。

重複関係　H4号住居址、P27・28・44を切る。F3号掘立柱建物址と重複関係にあるが、新旧は不明である。**平面形態**　本址は規模や深さの類似する3つのピットをもって掘立柱建物址と認定した。柱間は1.6～2.2mである。その他のピットは、南側の調査区外に存在するものと思われる。そのため、北側が2間であること以外は不明である。ピット　いずれも歪んだ円形を呈する。深さは、P1で約40cm、P2で約36cm、P3で約48cmを測る。P1・3は覆土中に径20cm前後の石を数点含んでいた。**覆土**　黒褐色土、暗褐色土に被覆されていた。**遺物の出土状況**　図化できるものは出土していない。



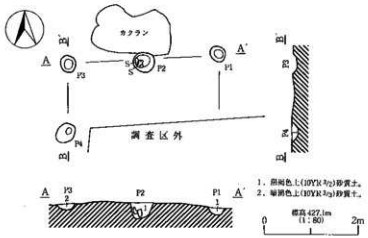
第59図　F1号掘立柱建物址実測図

時期　時期を判定できる遺物がないため不明であるが、H4号住居址を切っていることから、古墳時代後期以降に位置付けられる。

（2）Ｆ２号掘立柱建物址

遺構（第60図）

検出位置　Tえ６・７、Tお６・７グリッド。**重複関係**　Ｈ４号住居址、Ｆ３号掘立柱建物址を切る。**平面形態**　２間×１間以上の柱配置になるものと思われる。柱間は西列で約1.4m、北列で約1.6mを測る。東西の軸方位はＮ－87°－Ｅを指す。**ピット**　Ｐ１～３は円形、Ｐ４は楕円形を呈す。深さは、Ｐ１で約15cm、Ｐ２で約35cm、Ｐ３で約15cm、Ｐ４で約12cmを測る。**覆土**　Ｐ１・２・４は黒褐色土、Ｐ３は暗褐色土に覆われた。**遺物の出土状況**　図化できる遺物は出土していない。**時期**　明確な時期は不明であるが、Ｆ１号掘立柱建物址と同様、Ｈ４号住居址との重複関係から古墳時代後期以降の所産といえる。

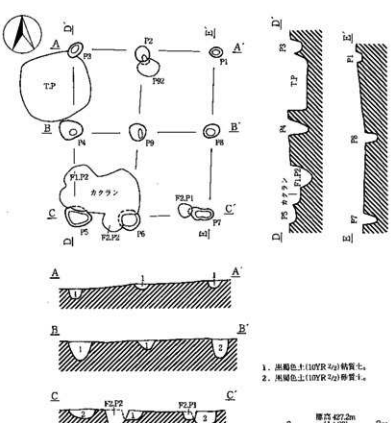


第60図　Ｆ２号掘立柱建物址実測図

（3）Ｆ３号掘立柱建物址

遺構（第61図）

検出位置　Tえ５・６、Tお５・６グリッド。**重複関係**　Ｆ２号掘立柱建物址、P92に切られる。Ｈ４号住居址を切る。Ｆ１号掘立柱建物址と重複関係にあるが新旧関係は不明である。**平面形態**　２間×２間の総柱式で方形を呈する。長軸約3.1m、短軸約3.0mを測り、長軸の方位はＮ－２°－Ｅを指す。**ピット**　形状は円形・楕円形など様々あり、深さも15~40cmと不規則である。**遺物の出土状況**　遺構の時期を判定できるものは出土していない。**時期**　遺構の重複関係から古墳時代後期以降でＦ２号掘立柱建物址築造以前に位置付けられるが、明確な所属時期は不明である。



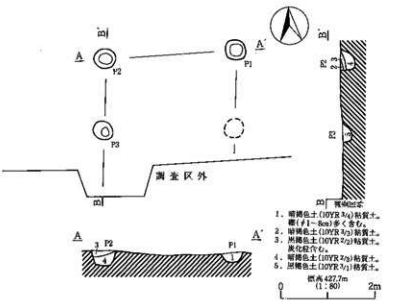
第61図　Ｆ３号掘立柱建物址実測図

（4）Ｆ４号掘立柱建物址

遺構（第62図）

検出位置　Ｔあ・い６グリッド。**重複関係**　Ｄ８号土坑址と重複関係にあると思われるが、新旧関係は不明である。**平面形態**　南側が調査区外に延びていると思われるため不明であるが、１間×２間以上の柱配置をとるものと考えられる。Ｐ１の南にもピットがあると思われたが検出されなかった。柱間は北列で約2.8m、西列で約1.6mを測る。長軸の方位はＮ－1°－Ｅを指す。**ピット**　いずれも円形を呈し、深さは20～62cmを測る。**遺物の出土状況**　少量出土しているが、図化できるものや、時期を判断できる遺物は出土していない。

時期　本址の所属時期は不明である。



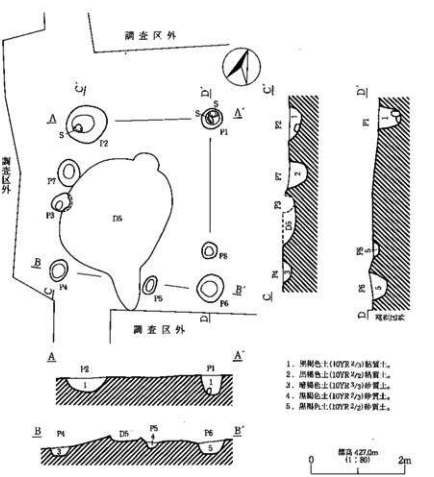
第62図　Ｆ４号掘立柱建物址実測図

（5）Ｆ５号掘立柱建物址

遺構（第63図）

検出位置　Ｔく６・７グリッド。**重複関係**　Ｄ５号土坑址に切られる。Ｑ３号特殊遺構を切る。**平面形態**　北列・東列１間、南列・西列２間の柱配置をとるが、Ｐ７・８の性格は不明である。**ピット**　いずれも円形・楕円形を呈し、径30～80cm、深さ15～40cmを測る。Ｐ２のみ径約80cmとやや大きい。**遺物の出土状況**　図化できるものは出土していない。

時期　重複関係からＤ５号土坑址構築以前に位置付けられよう。



第63図　Ｆ５号掘立柱建物址実測図

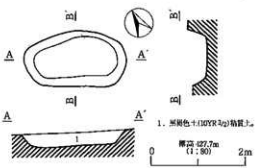
3　土坑址

（1）Ｄ１号土坑址

遺構（第64図）

検出位置　Tけ・こ６グリッド。**重複関係**　Ｈ１号住居址、Ｑ１号特殊遺構を切る。**平面形態**　長軸2.2m、短軸1.2mの楕円形を呈し、長軸の方位は、Ｎ－63°－Ｗを指す。深さは25～30cmを測る。**遺物の出土状況**（第65図）　覆土中より、脚部が欠損した円面硯が出土している。

時期　出土遺物から平安時代に位置付けられる。



第64図　Ｄ１号土坑址実測図

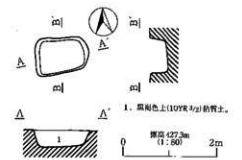
第65図　Ｄ１号土坑址出土土器実測図

（2）Ｄ２号土坑址

遺構（第66図）

検出位置　Tお６グリッド。**重複関係**　Ｈ５・６・11号住居址を切る。**平面形態**　長軸1.2m、短軸0.75mの楕円形を呈し、深さは約40cmを測る。長軸の方位は、Ｎ－78°－Ｅを指す。

時期　不明である。しかし、重複関係から平安時代以降に位置付けられよう。



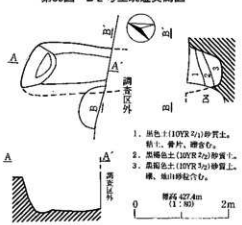
第66図　Ｄ２号土坑址実測図

（3）Ｄ３号土坑址

遺構（第67図）

検出位置　Tお６・７グリッド。**重複関係**　Ｄ４号土坑址に切られる。Ｈ５号住居址を切る。**平面形態**　南側は調査区外に延びているので不明であるが、短軸約1.2mの歪んだ長楕円形を呈すると思われる。長軸の方位はＮ－15°－Ｗを指す。深さは約35cmを測る。**遺物の出土状況**　土師器・須恵器の坏片がやや多く出土している。

時期　具体的な所属時期は不明であるが、重複関係と出土遺物より、平安時代に属する。



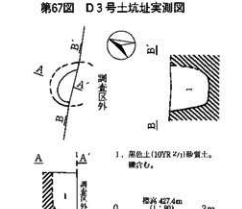
第67図　Ｄ３号土坑址実測図

（4）Ｄ４号土坑址

遺構（第68図）

検出位置　Tお７グリッド。**重複関係**　Ｈ５号住居址、Ｄ３号土坑址を切る。**平面形態**　南側が調査区外に延びているため、詳細は不明である。深さは約40cmを測る。**遺物の出土状況**　縄文土器や石器も出土しているが、Ｄ３号土坑址同様、土師器・須恵器の坏片の量がやや多い。

時期　Ｈ５号住居址とＤ３号土坑址との重複関係から平安



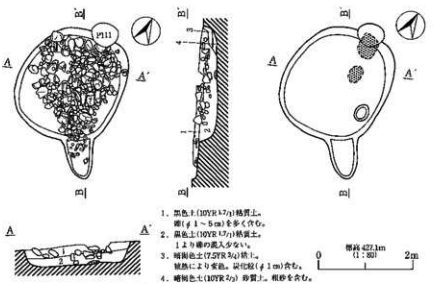
第68図　Ｄ４号土坑址実測図

時代以降の所産と思われるが、具体的な所属時期は不明である。

（5）D５号土坑址

遺構（第69図）

検出位置　Tく7グリッド。**重複関係**　F５号掘立柱建物址、P111に切られる。Q３号特殊遺構を切る。**平面形態**　掘り方の形状は、南側が長く延びる柄鏡形を呈する。長軸3.2mを測り、軸方位はN－26°－Wを指す。その上に、礫が集中している状況が見られた。礫は長軸約2.6m、短軸約2.0mにわたって集中している。この礫群の性格は不明である。**遺物の出土状況**　縄文土器・石器、及び土師器、須恵器の出土が見られる。



第69図　D５号土坑址実測図

第70図　D５号土坑址出土土器実測図

遺物（第70図）

須恵器の坏１点である。胎土には砂粒を含んでいてやや粗く、褐灰色を呈す。底部はナデ調整されている。

時期　出土遺物から奈良時代から平安時代に属する遺構といえるが、詳細な時期は不明である。

（6）D６号土坑址

遺構（第71図）

検出位置　Tき6グリッド。**重複関係**　H13・14号住居址に切られる。**平面形態**　径1.2～1.3mの歪んだ円形を呈する。深さは60cmを測る。**遺物の出土状況**　縄文土器・石器、獣骨が出土している。

第71図　D６号土坑址実測図

遺物（第16図）

大形破片を含み、堀之内２式～加曽利Ｂ１式期の土器が最も多い。詳細は本章第２節を参照されたい。

時期　土器の出土状況から縄文時代後期、堀之内２式～加曽利Ｂ１式期に位置付けられよう。

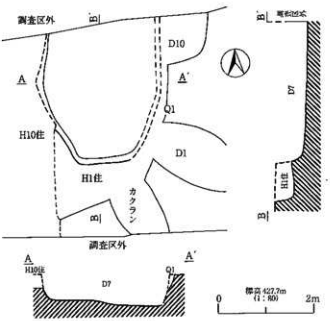
（7）D７号土坑址

遺構（第72図）

検出位置　Tあ５・６グリッド。**重複関係**　H１・10号住居址、Q１号特殊遺構に切られる。D９号土坑址を切る。**平面形態**　北側は調査区外に延びているため詳細は不明であるが、東西約2.6mを測り、これを短軸とする歪んだ楕円形を呈すると思われる。深さは約60cmを測る。**遺物の出土状況**　縄文土器・土偶・石器が覆土中より出土している。

遺物（第16・17図）堀之内式～浮線文期後半まで、後期末を除いて途切れずに見られる。量が多いのは晩期中頃と浮線文期であるが、後～晩期が混在した包含層の印象も拭えない。縄文土器と土偶については第２節で詳細が述べられている。

時期　土器の出土量から縄文時代晩期～浮線文期に属する可能性はあるが、縄文時代後期～晩期の幅の中に位置付けておきたい。



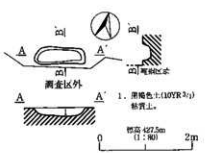
第72図　D７号土坑址実測図

（8）D８号土坑址

遺構（第73図）

検出位置　Tあ・い６グリッド。**重複関係**　なし。**平面形態**　長軸1.0m、短軸30cmのやや歪んだ楕円形を呈する。深さは20cmを測る。長軸の方位はN－74°－Eを指す。**遺物の出土状況**　縄文土器・石器、土師器・須恵器が出土しているが、細片のみである。図化できるものは出土していない。

時期　本址の所属時期は不明である。

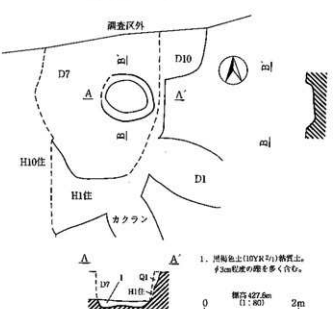


第73図　D８号土坑址実測図

（9）D９号土坑址

遺構（第74図）

検出位置　Tあ５グリッド。**重複関係**　H１号住居址、D７号土坑址、Q１号特殊遺構に切られる。**平面形態**　上面はD７に切られているため、詳細は不明である。残存部では径約50cm



第74図　D９号土坑址実測図

の円形を呈し、深さは3～10cmを測る。**遺物の出土状況**　縄文土器・石器が出土しているが、いずれも細片であり、図化できるものは出土していない。

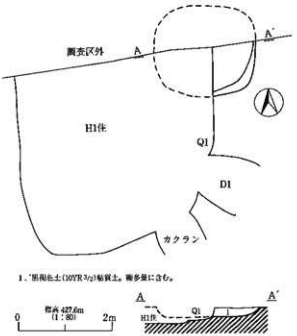
時期　重複関係から、D7号土坑址（縄文時代後～晩期）以前であるが、縄文時代中期以前の遺物が出土していないことから、本址の所属時期もD7号土坑址構築以前の縄文時代後期～晩期に属すると思われる。

(10) D10号土坑址

遺構（第75図）

検出位置　Oこ6グリッド。Tあ6グリッド。**重複関係**　H1号住居址、Q1号特殊遺構に切られる。**平面形態**　遺構の北側半分以上が調査区外にあり、西隅がH1号住居址などによって破壊されているため、東南隅が残存するのみである。そのため、規模など詳細は不明であるが、東西に長い楕円形を呈すると思われる。深さは10cmを測る。**遺物の出土状況**　出土量は少なく、図化できるものは出土していない。

時期　本址の所属時期は不明である。



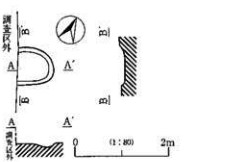
第75図　D10号土坑址実測図

(11) D11号土坑址

遺構（第76図）

検出位置　Tけ5グリッド。**重複関係**　なし。**平面形態**　西隅が調査区外に延びているため、平面形態は不明である。南北に40cmを測る。南北の軸方位はN－27°－Wを指す。深さは3～6cmと浅い。**遺物の出土状況**　図化できるものは出土していない。

時期　本址の所属時期は不明である。



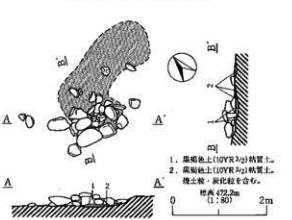
第76図　D11号土坑址実測図

4　集石址

(1) S1号集石址

遺構（第77図）

検出位置　Tか・き6グリッド。**重複関係**　H8・13・14号住居址、D6号土坑址、P61を切る。**平面形態**　最大で径30cm程度の礫が、東西約1.7m、南北約90cmの楕円形の範囲に集中している。その北側には焼土が確認できるが、この礫群との関



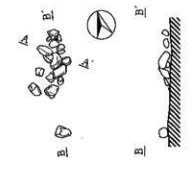
第77図　S1号集石址実測図

係は不明である。掘り方は確認できなかった。遺物の出土状況　図化できるものは出土していない。
時期　重複関係から奈良時代以降の所産と考えられる。この集石の性格は不明である。

（2）S２号集石址

遺構（第78図）

検出位置　Tお５・６グリッド。重複関係　H６号住居址を切る。平面形態　長軸約1.5m、短軸約80cmの楕円形の範囲に10～30cmの礫が不規則に集中している。掘り方は検出されなかった。遺構の性格は不明である。遺物の出土状況　図化できるものは出土していない。
時期　H６号住居址（７世紀後半～８世紀前半）を切っていることから、奈良時代以降の所産であるが、詳細な所属時期は不明である。

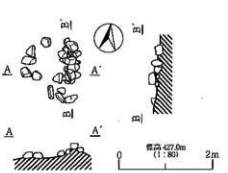


第78図　S２号集石址実測図

（3）S３号集石址

遺構（第79図）

検出位置　Tお６グリッド。重複関係　H６号住居址を切る。平面形態　直径約1.3mの円形の範囲に礫が不規則に集中している。掘り方は検出されなかった。本址はS２号集石址と隣接して構築されているため、S２号集石址と何らかの関連があるものとも思われるが、遺構の性格は不明である。遺物の出土状況　図化できるものは出土していない。
時期　S２号集石址同様、H６号住居址を切っているため奈良時代以降の所産である。



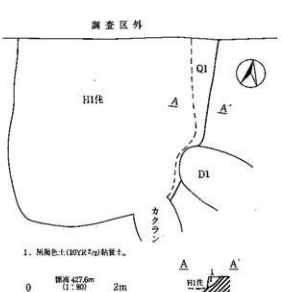
第79図　S３号集石址実測図

5　特殊遺構

（1）Q１号特殊遺構

遺構（第80図）

検出位置　Oこ５・６グリッド。重複関係　H１号住居址、D１号土坑址に切られる。D10号土坑址を切る。平面形態　本址は、H１号住居址に大半が破壊され、東壁が一部残存しているのみである。そのため、遺構の形態・性格などほとんどが不明であるため、特殊遺構とした。遺物の出土状況　図化できるものは出土していない。
時期　出土遺物が細片のみであるため、遺物からは所属時期を決定できない。重複関係からはH１号住居址（８世紀末～９世紀前半）に切られているため、奈良時代以前の所産と思われるが、詳細は不明である。



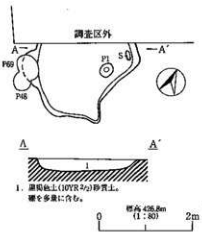
第80図　Q１号特殊遺構実測図

（2）Q２号特殊遺構

遺構（第81図）

検出位置　Tく６グリッド。**重複関係**　P48・69に切られる。 **平面形態**　北側が調査区外に延びているため詳細は不明である。検出された部分についても不整形で、遺構の性格が不明であるため特殊遺構とした。深さは約25cmを測る。ピット　西壁寄りで１基確認された。径約30cmの円形を呈し、深さ15cmを測る。**遺物の出土状況**　図化できるものは出土していない。

時期　本址の所属時期は不明である。

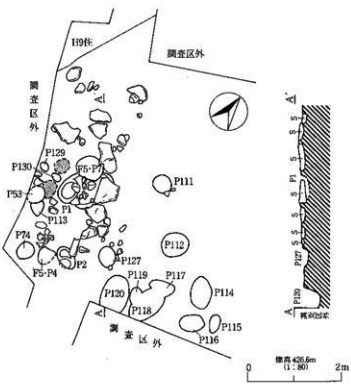


第81図　Q２号特殊遺構実測図

（3）Q３号特殊遺構

遺構（第82図）

検出位置　Tく６・７、Tけ６・７グリッド。**重複関係**　F５号掘立柱建物址、D５号土坑址、P53・73・74に切られる。**平面形態**　本址は、最大で長辺約70cm程の平石と礫が、敷石状に配石されている状態で検出された。敷石は長軸約3.0m、短軸約2.0mの楕円形の範囲で検出されたが、別遺構に激しく切られているため、実際には敷石はより広範囲に広がっていたようであり、縄文時代の敷石住居址とも考えられる状況である。明確な掘り方は検出されなかった。**遺物の出土状況**　縄文土器・石器が多く出土している。



第82図　Q３号特殊遺構実測図

遺物（第18図）

堀之内１式～弥生中期初頭まで時間幅が広い。破片が大きく、出土量が多いのは堀之内１式～２式である。詳細は第２節を参照されたい。

時期　出土遺物では、縄文時代後期の堀之内式期の土器が多いが、それ以外の時期の土器も出土しており、帰属時期の決め手にはなりきれない。しかし、遺構は敷石住居址に近い状況を示しているので、本址は縄文時代後期のなかに位置付けておきたい。

6　ピット及び遺構外出土遺物（第19・83図）

ピット出土の縄文土器や、グリッド一括遺物などの遺構外出土遺物をここで一括して触れることとする。

ピット53－１～３は、破片はやや小さいが一応は晩期前半～中頃のまとまりである。

ピット82－１は浮線文期の浅鉢である。この１点のみの出土は変わった構図だが、遺構の帰属時期も浮線文期に位置付けてよいと思われる。

ピット88－１～３は、加曽利Ｂ３式並行期、晩期中頃、浮線文期の土器が混在しているため、遺構の帰属時期は決められない。

ピット92－１～３は、晩期前半～浮線文期が混在しており、帰属時期は決められない。１は、Ｔえ５グリッド－１と同一個体か。

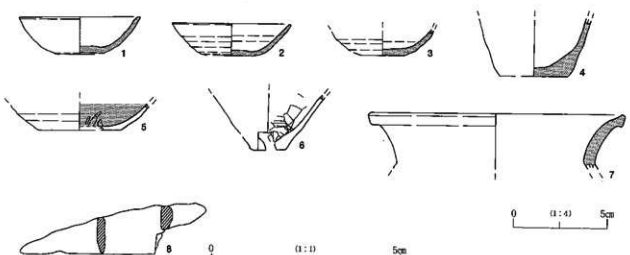
ピット106－１・２は、２片とも破片が小さすぎ、混入の可能性を排除しきれない。

Ｔあ６グリッド－１～４は、晩期中頃～浮線文期の幅の中に収まるが一括性はない。

Ｔえ５グリッド－１～３は、晩期前半～浮線文期の幅の中に収まるが一括性はない。

Ｔえ７グリッド－１～４は、破片は小さいが浮線文期ばかりで、見かけ上のまとまりはない。

83－１～７は遺構外出土遺物である。１～４・７は須恵器で、１～３は坏、４は底部のみのため不明であるが、甕、あるいは壷といった器種が考えられる。７は甕の口縁部である。５は底部が回転糸切り調整の黒色土器、６は甑である。７は試掘１号トレンチ壁面より出土した鉄製の刀子である。長さ4.9cm、幅1.3cmで重さは3.9ｇを測る。



第83図　ピット及び遺構外出土遺物

註

1　試掘調査では、獣骨が集中して検出された地点が１号トレンチで３ヶ所、２号トレンチで４ヶ所確認されている。それら獣骨集中地点の調査も行っており、第６図に位置を示した。

2　発掘調査の段階で設定された人骨はＡ～Ｍ人骨で、Ｎ人骨は本節を述べるにあたり筆者が便宜的に命名したものである。そのため、第Ⅴ章における茂原氏の分析のなかでは、Ｎ人骨は存在しない。また、第Ⅴ章で述べられているように、６号墓址出土人骨のなかにはＡ～Ｎ人骨以外にも、整理作業中に下顎骨が多く確認されている。これらについてはＧ～Ｍ人骨と組み合わされる可能性があるため命名していない。下顎骨のみのＤ・Ｅ・Ｆ人骨については、出土位置がＧ～Ｍ人骨とやや離れていることから、別個体として扱った。

3　５号墓址を切る別遺構は、盛土保存される部分にあたるため調査は行われていない。

第Ⅴ章　保地遺跡(長野県坂城町)から出土した縄文時代人骨

京都大学霊長類研究所　茂原信生

Ⅰ）はじめに

保地遺跡は長野県坂城町南条にある遺跡で、縄文時代から平安時代にかけての遺跡である。遺跡の一部の調査であり、墓域などは不明である。今回報告するのは平成11年度に宅地造成工事で発掘調査された際に出土した人骨である(表1)。今回の発掘では人骨の出土遺構が確認されている。人骨の所属する年代は縄文時代後期から晩期にかけてであると考えられている。

なお、この遺跡は昭和40年に発掘調査が行われており、縄文時代晩期前半の土器を含むことで注目された(関：1966、1982)。その際に1体分の人骨が出土しているが、抜歯などの様子（西沢：1982）以外の形態的な特徴については報告されていない。

Ⅱ）出土状況

墓址名がつくのは全部で5基で1～6号墓址である（3号墓址は欠番)。人骨と確認できたものは、全部で17体である。多くの個体は再葬によって頭蓋骨と四肢骨とがバラバラに出土しており、個体識別ができるものは限られている。したがって、今回の報告は、個体がはっきりしている6号墓の2体（A, B人骨）を中心とし、ついで再葬されていた頭蓋骨について記述し、最後に個体の明確でない四肢骨の特徴的な形質についての概略を報告する。なお、詳細な出土状況に関しては、考古学編を参照していただきたい。

1）1号墓址人骨

頭蓋骨と若干の四肢骨片である（写真1－A, B)。

頭蓋骨

後頭骨の同じ外後頭隆起部が3点出土している。したがって、少なくとも3体分であることになる。頭蓋骨のうち1点は骨質が厚く、外後頭隆起がよく発達しておりブロカのⅣ型である。左側の3本の大臼歯が植立している上顎骨（No.51）では、咬耗が比較的進んでおり、咬合面は平坦になっている。第3大臼歯は3咬頭性である。この上顎骨は正中近くが破損しているが、残っている部分で見ると第2小臼歯の歯槽より近心の歯槽が少なくとも2本分閉鎖している。犬歯と第1小臼歯の抜歯が行われていた可能性を示唆している。

下顎骨の正中部を持つものが2点、右側の正中部から大臼歯部までのもの、および左側の大臼歯部の4点が残っている。正中部分が残っているものには、頑丈なものときゃしゃなものがある。左・右の下顎骨体がある個体（No.11）はかなり高齢の個体と思われ、残っている第2小臼歯と第1大臼歯は歯冠は咬耗で失われており、咬耗度はモルナー（1971）の7である。この個体では左・右とも切歯は2本あるがその遠心の歯槽は第2小臼歯の前までが閉鎖している。したがって、この個体でも犬歯と第1小臼歯が抜歯されたものであろう。下顎体の内側に下顎隆起が見られる。

一方、きゃしゃな下顎骨正中部の残る個体（No.75）では、下顎体はむしろ薄い。この個体でも切歯は残っている。それの遠心の2本分、すなわち犬歯と第1小臼歯の歯槽が閉鎖しているので抜歯が行われたものと

思われる。右側の下顎体（No.82）は、第３大臼歯が欠如しており、遠心面に隣接面摩耗がないことを考えると第３大臼歯は先天的に欠如したか萌出早期に脱落したものと思われる。この下顎骨では歯槽が閉鎖しているのは犬歯部だけである。左大臼歯部（No.26）は下顎体の高さも前のものとは明らかに異なり別個体である。咬耗は顕著であるが近心の歯の歯槽に関しては不明である。

大幹骨・四肢骨

寛骨片（No.80）の耳状面に近接して、妊娠経験のあることを示す形質、すなわち妊娠痕である顕著な耳状面傍溝がみられるので、女性であろう。

２）２号墓址人骨（写真１－C）

頭蓋骨片が主で、他に少数の四肢骨が出土している。この人骨は他のものと重複しているので個体識別は難しい。前頭骨の右頬骨突起部が３つ出土しているので、少なくとも３個体は埋葬されていた。

別個体と思われる左上顎骨片と右上顎骨片が出土している。右側の上顎骨では２本の切歯の歯槽が認められ、左側の上顎骨では中切歯部はやや破損して確認できないが、第２切歯の歯槽がわずかに認められる。どちらもその遠心に退縮した歯槽部があり、その遠心に第２小臼歯と第１大臼歯の歯槽が続いてる。したがって、この個体はともに犬歯・第１小臼歯の抜歯をしていると考えられる。

標本番号が120番代の破片から成る頭蓋骨は、前頭骨から頭頂骨の前半部までがある。前頭縫合遺残（メトピズム）が認められる。眉弓はあまり発達していない。非常に厚い頭蓋冠の骨である。縫合は癒合していないが鋸歯状は明瞭ではなく単純化している。この頭蓋骨は十圧で変形している。他の２個体の前頭骨でも眉弓は発達していない。前頭縫合遺残はこの他に１例で観察された。３体の頭蓋骨のどの前頭骨眼窩上面にもクリブラ・オルビタリアはみられない。

四肢骨は、頑丈で太い左上腕骨（近位部欠）と左脛骨骨幹の近位半が出土している。上腕骨は頑丈で三角筋粗面は非常に強く発達している。脛骨は頑丈であり、栄養孔位最大径は38.3ミリ、横径は26.0ミリで、扁平示数は67.9でやや扁平の中脛脛である。

３）３号墓址人骨

欠番

４）４号墓址人骨

４点ほどの頭蓋骨片が出土している。後頭骨鱗部が２つ（No.48, No.60）あり、少なくとも２個体埋葬されていたことがわかる。どちらもやや厚めであるが、外後頭隆起はあまり発達しておらずブロカのⅡ型程度である。

下顎骨も少なくとも２体分が確認できる。

下顎骨１（No.18）

下顎骨の保存状態は悪い。左の下顎体が残っている。しかし、歯槽では大臼歯部が残っているが、それより近心は破損していて抜歯状況は不明である。

歯は、右の第１小臼歯から遠心が残っている。咬耗は非常に進んでおり、第１大臼歯では咬合面にエナメル質はほとんど残っておらず、歯列の咬合平面は平坦になっている。また、上顎の中切歯は歯冠がなくなるほど咬耗している。下顎体はさほど高くなく、下顎隆起も発達していない。咬耗から考えると比較的高齢で

あろう。

下顎骨2（No.53）

上顎骨と咬合したかたちで出土している。オトガイ隆起はよく発達しているが、オトガイ結節はあまり発達していない。下顎体は頑丈で内外的にも厚く、下顎隆起が非常によく発達している。上顎では左右の切歯は2本ずつあるが、犬歯の歯槽は閉鎖しているようである。下顎では、右側は破損して不明だが、左側の犬歯から第1小臼歯は歯槽が閉鎖しており、大臼歯は3本ある。咬耗は進んでおり、下顎の大臼歯がモルナー（1971）の6、第3大臼歯が4である。

四肢骨

大腿骨が数本あるが、復元は難しい。しかし、うち1本（31－a）では著しい病変が見られる。骨幹の中央付近に病変がみられ、断面は本来骨髄があるべきところまで海綿質がふさいでいる。骨折による骨の増殖に伴うものであると考えられる。X線像では骨折した直後に見られる表面像が見られないので骨折してからかなりの年月が経過しているものであろう。大腿骨の骨折に関してはいくつかの報告例があるが、鈴木（1998）によれば、大腿骨の骨折は骨幹部で起こるものがほとんどであるという。今回の例もその例外ではない。

この遺構からは大腿骨片が7本ほど出土しているが、ほとんどは骨質は非常に厚く、後面の粗線が残っているものでは粗線は非常に発達していて、ピラスターを形成し、いわゆる柱状大腿骨である。脛骨はかなり扁平である。

5）5号墓址人骨

頭蓋骨（写真1－D～G）

顔面を左に向けた状態で、下肢骨をかなり強く曲げている屈葬のようである。前頭部から後頭部までのおもに左側が残っているが顔面はない。歯は残っていない。前頭骨の眼窩上部も破損している。乳様突起は大きくて厚い。耳道上穹も発達している。非常に厚い頭蓋冠で、頭頂結節付近で11ミリ、頭頂骨の人字縫合に近い部分の一番厚い部分では14.2ミリ、冠状縫合の正中近くの前頭骨では10.9ミリ、後頭骨の外後頭隆起部は18.3ミリである。冠状縫合は単純化した形態である。下顎骨は左の下顎体が残っており、高さは低いが頑丈である。下顎体内側の小臼歯部と思われる場所に下顎隆起が見られる。歯槽は一部閉鎖しているが、第2小臼歯と第1大臼歯部である可能性が高い。抜歯との関連は不明である。

四肢骨

左大腿骨骨幹近位部（No.3）はさほど太くはないが、後面の粗線はよく発達しており、狭い稜状になっていていわゆる柱状大腿骨である。上部外側の殿筋隆起はやや発達している。これと反対側と思われる大腿骨の骨幹の一部（No.7）も残っている。

6）6号墓址人骨

全身骨格が出土したものが2体と、頭蓋骨が単独で出土したものが11体（C～M人骨）で、このうちD,E,Fは下顎骨だけである。A人骨、B人骨は並んで埋葬されており、ともに仰臥伸展葬である。B人骨の右上腕骨はA人骨の左の上腕骨の上にある。他は頭蓋骨と四肢骨が散乱して出土しており、それぞれの個体の識別は行っていないがかなり難しい。全身の個体以外の頭蓋骨は、埋葬後集められた二次埋葬と思われる。

焼かれた骨片が4点（No.1251,1253,1257,1263）ほど出土している。所属は不明であるが、四肢骨片であり、人骨ではなかろう。

① A人骨

保存の良い一体分の骨である。顔面を左に向け、上・下肢をのばした仰臥伸展葬である。左・右の前腕は内転して手のひらを下に向けている。

頭蓋骨（写真2）

眉弓は発達しており、左・右の眉弓が中央でほぼ合している。外後頭隆起はさほど発達しておらず、ブロカのⅢ型である。乳様突起は比較的大きく、内外的にも厚い。耳道上稜も発達している。矢状縫合は後半部が癒合・消失している。冠状縫合は単純化している。人字縫合のラムダ部も一部癒合しているのでさほど若い個体ではない。内板では主要3縫合はほとんど癒合している。

下顎骨は頑丈で、内側の小臼歯から大臼歯にかけての部分にやや発達した下顎隆起が見られる。オトガイ隆起はやや発達している。筋突起は内外的にさほど厚くない。下顎体の高さは前方から後方までほとんど変化していない。角前切痕はなく、ロッカージョウというほどではないが下顎底はわずかに下方に凸型である。下顎角部はやや外側に張り出している。

歯

上顎骨の保存状態はあまりよくないので一部の歯では確認できないが、上顎右の第3大臼歯、下顎右の第3大臼歯は消失している。下顎の第3大臼歯は生前に脱落しているが、上顎の第3臼歯の消失が先天的なものかどうかは不明である。右は犬歯と第1小臼歯部の歯槽が閉鎖している。左は第1小臼歯より遠心部が失われているが、少なくとも犬歯の歯槽が閉鎖していることは確認できる。下顎骨では左・右とも犬歯と第1小臼歯の歯槽が閉鎖している。これらを考えると、犬歯と第1小臼歯をともに抜歯した可能性がある。下顎の左第2小臼歯は捻転して本来の舌側面が近心を向いている。残っている歯の咬耗はどれも顕著で、大臼歯では咬合面のエナメル質がほとんど磨耗してなくなっている。とくに上顎の切歯では歯冠がほとんど失われる程の咬耗である。歯は計測できないが、B人骨のものよりも大きい。

四肢骨（写真3）（表2、表3）

上腕骨はやや太く、三角筋粗面もよく発達している。橈骨、尺骨の太さは普通で、骨間縁もそれほど発達していない。

寛骨の大坐骨切痕は鋭角で男性的である。ごく浅い耳状面傍溝のような構造が見られるが、妊娠痕というほどではない。耳状面自体は高くなく、男性的である。

大腿骨は太くて頑丈で、後面の粗線も幅をもった稜状に張り出している。殿筋隆起は発達していない。遠位の脛骨との関節面の辺縁に小さな骨の張り出しがある。加齢変化であろう。左大腿骨は扁平である（右；中脛骨、左;扁平脛）。後面の鉛直線は中央付近に達している。したがって、中央付近の断面はヘリチカのⅣ型を扁平にした形である。脛骨の最大長は推定で360ミリ程度である。腓骨は幅が非常に広く、中央断面示数は52～57である。距骨では、内顆面が前方に伸展しているが、内側踵脛面はさほど発達していない。

藤井（1960）の式（男性）を用いて身長を推定してみると、橈骨からは161.8センチ、尺骨からは161.7センチ、大腿骨からは、164.3センチ、脛骨からは162.9センチであり、これらを平均すると162.7センチである。下肢からの推定身長の方がやや高めに計算される。この値は平本（1977）が報告している縄文時代人男性の平均身長159.11センチより3センチほど大きい。

この個体は、男性で年齢は熟年と推測される。身長は163センチほどで縄文時代人の平均的な身長よりや

や大きめである。

② B人骨

保存状態はよく、指骨や肋骨も出土している。顔面を左に向けて、上・下肢ともに伸ばした仰臥伸展葬である。左・右の前腕を回内し、手のひらを下に向けている点はA人骨と同様である。

頭蓋骨（写真4）

比較的保存状態はよいが、顔面はかなり破損している。眉弓の発達はさほどではない。したがって眼窩上隆起は見られない。外後頭隆起はあまり発達しておらず、プロカのⅢ型程度である。乳様突起は内外的にやや厚みはあるが形は小さい。眼窩の傾きは水平に近い。冠状縫合、矢状縫合、人字縫合ともに外板では縫合している部分があり、内板はほぼ癒合を完了しているので比較的高齢である。上顎骨は部分的にしか残っていない。

下顎骨は頑丈で、下顎体の内側には小臼歯から第2臼歯部にかけて軽度の下顎隆起が見られる。下顎体は前方から大臼歯にかけてほぼ高さの違いはない。オトガイ隆起はよく発達している。また筋突起の斜線から続く外側結節も比較的発達している。筋突起は内外的に厚く、ほぼ垂直である。下顎角は外側に張り出している。頭蓋最大長は177ミリ、最大幅は142ミリで、長幅示数は80.2となり縄文時代に一般的な短頭である。

歯

上顎の大臼歯などが残っているが保存状態は悪い。下顎の右は第2切歯と犬歯の歯槽が、左は犬歯の歯槽が閉鎖している。小臼歯の脱落は見られない。咬耗は顕著で歯冠の咬合面は水平に磨耗している。下顎の第1大臼歯と思われるものでは咬合面エナメル質が残っていない。このことからも比較的高齢であることが推測される。隣接面摩耗などが顕著なため計測はできないが、小さな歯である。

四肢骨（写真5）（表2、表3）

上腕骨の太さは中等度であり、三角筋粗面の発達も普通である。上腕骨最大長は長くても270ミリは越えていない。橈骨や尺骨は細く、それらの骨間縁も発達していない。

右寛骨の大坐骨切痕は直角に近く女性的で、耳状面傍溝も観察されている。大腿骨の太さも普通である。骨幹上部外側の殿筋隆起はやや発達しているが、後面の粗線はさほど発達しておらず、狭い稜状である。脛骨は扁平（中脛脛）である。後面の鉛直線は中央付近まで達しており、森本（1981）のA型である。下端には蹲踞面である頚結節が見られる。腓骨は頑丈だが、樋状というほどではない。右距骨では内顆面が前方に進展しており、内側蹲踞面も前方に進展しているので、森本のC型であろう。

藤井（1960）の式（女性）を用いて計算した推定身長は脛骨では151.6センチ、橈骨では150.2センチ、尺骨では150.5センチで、これらの平均値は150.8センチである。この値は、平本の報告している縄文時代人女性の平均値148.05センチより2センチほど大きい。

この個体は、四肢骨の太さ・頑丈さや頭蓋骨の特徴を考えると女性と思われる。身長は151センチほどである。

③ G頭蓋骨（写真6－G,H）

保存状態はよい。眉弓はやや発達しているが眼窩上隆起を形成するほどではない。乳様突起は小さい。外後頭隆起はほとんど発達しておらず、プロカのⅡ型である。頭蓋冠の骨質は薄い。矢状縫合は外板の後半部分が癒合しているので、少なくとも20歳代にはなっている。冠状縫合は外板では単純になっているがまだ確認できる程度だが、人字縫合はまだ鋸歯状が明瞭である。

眼窩の傾きは縄文時代によく見られる形態で、水平に近い。頭蓋最大長は183ミリ、最大幅は143ミリで、長幅示数は78.1となり中頭に属している。

この個体は、女性である。年齢は青年から壮年と推測される。

④ H頭蓋骨（写真７－A,B）

保存状態はよいが、顔面は破損が著しく復元は難しい。眉弓はわずかに凸であるが眼窩上隆起は形成していない。外後頭隆起はごくわずかでプロカのⅡ型程度である。乳様突起は普通の大きさである。冠状縫合、矢状縫合、人字縫合はどれも外板では鋸歯状が明瞭である。内板は縫合が単純化しているが癒合はしておらず、比較的若い個体であることを示している。頭蓋冠の骨質は薄い。上顎骨では口蓋の半分程度が残っている。左右どちらもすくなくとも犬歯の歯槽は閉鎖している。閉鎖している部分が比較的長いので第１小臼歯の歯槽も閉鎖していた可能性がある。頭蓋の内側のS状洞溝が折り曲がる場所では、S状洞溝が左・右ともに著しく頭蓋骨をえぐっているという特徴を持っている。

頭蓋最大長は188ミリ、最大幅は135ミリで長幅示数は71.8でかなりの長頭である。

この頭蓋骨はきゃしゃな印象で、女性の可能性が高い。年齢は壮年～熟年程度と推測される。

⑤ Ⅰ頭蓋骨（写真７－C,D）

保存状態はよいが、顔面部は失われている。頭蓋冠の骨質は厚い。眉弓は発達しており、中央で左右が合している。外後頭隆起はプロカのⅢ型程度である。乳様突起はやや大きめで、耳道上稜も発達している。左の眼窩上壁は前方の一部しか残っていないが、そこにはいくつかの孔状のものが見られる。クリブラ・オルビタリアである可能性があり、そうだとすると鉄欠乏性貧血であったと思われる。クリブラ・オルビタリアは眼窩の内面上壁に見られる孔で、鉄欠乏性貧血によるものと考えられており、この貧血を招くような栄養不良、伝染性疾患、拘虫症、慢性消化管出血などによって引き起こされるという（Hirata,1988）。また頭蓋冠の頭頂骨前方部には内腔から外部に大きな導出孔があり、内面では深くえぐれた溝状をなしており、外面でも１センチほどの溝となっている。他に数ミリの同様の穴も見られる。これらは頭頂骨の後方正中に近く位置する頭頂孔とは別の構造である。頭蓋最大長は177ミリ、最大幅は約144ミリほどで、長幅示数は81.4と短頭である。

矢状縫合は後方のごく一部で縫合している。冠状縫合、人字縫合は外板でも内板でも癒合していない。さほど高齢ではないと思われる。成人ではあるが、歯がないので正確な年齢区分をするのは難しい。

⑥ J頭蓋骨（写真７－E,F）

部分的にしか出土していないが、下顎骨は下顎頭を除いてほぼ残っている。頭蓋冠の破片は左・右の頭頂骨片である。内面、外面ともに軽度の侵食を受けている。骨質は薄い。矢状縫合、ならびに人字縫合の上部は鋸歯状が明瞭である。さほど高齢ではない。下顎骨は頑丈である。オトガイ結節がよく発達しており、さらに外側結節もよく発達しているのでオトガイ三角が目立つ。

歯は、左右とも切歯２本と第２小臼歯から第３大臼歯までが残っている。この個体でも犬歯と第１小臼歯の歯槽が閉鎖している。大臼歯は第１大臼歯と第２大臼歯の近心頬側咬頭にわずかに象牙質の露出が見られるが、第３大臼歯には象牙質の露出は見られない。したがって、青年程度の年齢段階であろう。第２小臼歯の内側にごく軽度の下顎隆起が見られる。筋突起はさほど厚くない。

性別は不明である。

⑦ K頭蓋骨（写真８－A,B）

顔面、ならびに頭蓋底部分は失われており、頭蓋冠の後半部分（左・右頭頂骨の一部と後頭骨鱗部）が残っている。側頭骨の一部が残っており、乳様突起の基部はやや大きめである。矢状縫合と人字縫合は外板の鋸歯状が明瞭で、内板は単純化しているが癒合を完了していないのでさほど高齢ではなかろう。外後頭隆起部はやや厚いだけで、外後頭隆起はブロカのⅡ型程度である。頭蓋の幅径は150ミリを下回ることはない大きさであり、男性の頭蓋骨であることを思わせる。骨質の厚さは普通である。

⑧　L頭蓋骨（写真８－C,D）

顔面と頭蓋底部は破損している。頭蓋冠は比較的残りがよい。左・右の眉弓はあまり発達しておらず、したがって眼窩上隆起はほとんど形成されていない。外後頭隆起はよく発達しており、ブロカのⅣ型である。側頭骨の乳様突起は基部しか残っていないが、比較的大きかったことを思わせる。アステリオン部は発達して外側に張り出している。土圧のためわずかにひしゃげているが、計測値には大きな影響はない程度である。冠状縫合、矢状縫合、人字縫合は外板では鋸歯状が明瞭であり、内板でも癒合を完了していない。人字縫合部にいくつかの小さな縫合骨が見られる。さほど高齢ではない。前頭縫合遺残（メトピズム）が見られる。頭蓋最大長は190ミリ、頭蓋幅は139ミリで、頭蓋長幅示数は、短頭が一般的な縄文時代人としてはめずらしく73.2と長頭である。

この個体は、青年程度の年齢段階で、男性の可能性が高い。縄文時代人としてはめずらしい長頭である。

⑨　M頭蓋骨（写真８－E,F）

頭蓋骨

頭蓋冠と左・右側頭骨、左・右の上顎骨の一部と歯が残っている。前頭骨は薄い。また頭頂骨も骨質は非常に薄く、矢状縫合、冠状縫合は鋸歯状が明瞭である。土圧のためかどうかは不明であるが、左の頭頂結節部がややはり出し気味である。右の眉弓の発達はごくわずかである。これは後述のように年齢が若いこと、ならびに女性であることによるものであろう。左上顎骨には第２小臼歯、第１大臼歯、ならびに第２大臼歯が植立しており、第３大臼歯は歯槽の中にあり未萌出である。

歯

上顎第３大臼歯は萌出していないが、歯根は８割がた完成している。第１大臼歯近心頬側咬頭では小さな象牙質の露出が見られ、第２大臼歯にはわずかな咬耗が認められる。第１大臼歯は頬舌的に圧平された形である。第３大臼歯は、左は遠心の二つの咬頭は非常に小さく、右は近心舌側咬頭が非常に大きくどちらも通常の形態ではない。小臼歯の大きさは現代人（権田1959）よりかなり小さく、ほぼ縄文時代の女性の計測値に相当している。左は第２切歯と思われる歯槽はあるが、犬歯と第１小臼歯の歯槽は閉鎖している。右は歯槽骨から判断して、切歯は２本あるがそれより遠心（臼歯側）は２本程度が脱落していて歯槽が閉鎖している。左・右とも同じ位置の歯槽が閉鎖しているわけである。これらは抜歯の可能性が高い。第３大臼歯の歯根の完成程度から判断して、15歳程度と推測される。したがって、犬歯などの抜歯は15歳より以前に行われていたと考えられる。

この個体は15歳程度と考えられる。性別は不明である。若い時期に抜歯が行われていたことを示す個体である。

⑩　６号墓址から出土した下顎骨

D人骨、E人骨、F人骨は下顎骨につけられた名称である。６号墓からはこの３体分の下顎骨だけではな

く、もっと多くの下顎骨が出土している。それらは上記の頭蓋骨と組み合わされるべきものであろうが、頭蓋骨の方に上顎骨や歯がないので個体の特定はできていない。

これらの下顎骨を、別個体と思われるもの別に記載した。

1）下顎骨（No.342）

左の正中から大臼歯にかけての下顎体部である。2本の切歯の歯槽が確認され、さらに第1小臼歯から第2大臼歯までが植立している。第3大臼歯部は破損して不明である。犬歯の歯槽だけが閉鎖している。第2大臼歯の咬耗はモルナー（1971）の3～4度と進んでおり、成人であることは疑いない。したがって、他の多くの個体に見られるような第1小臼歯の抜歯を伴わない個体である。下顎隆起はごく軽微である。性別は不明である。

2）下顎骨（No.509）（写真6－A,B）

ほぼ完形の下顎骨である。下顎体は頑丈で、底面は水平で、角前切痕は見られない。下顎枝角は118度である。筋突起は内外的に厚い。左右の切歯2本と第2小臼歯から第3大臼歯までの歯槽が確認でき、歯は左・右とも第2大臼歯と第3大臼歯が残っている。左・右の第2小臼歯は歯根のみが残っている。この個体も犬歯と第1小臼歯の抜歯が行われていたと考えられる。大臼歯は第2・第3大臼歯とも咬合面は平坦化している。第3大臼歯の咬耗度は右がモルナー（1971）の3で左が4である。さほど高齢ではなく、壮年程度と推測される。

3）下顎骨（No.558）

正中部を中心とした下顎体の一部である。比較的きゃしゃな下顎骨である。かなり高齢と推測される。歯槽部は切歯部しか残っていないが、すべての切歯は生前に脱落していたと考えられる。抜歯かどうかは不明である。それ以外の部分は破損して不明である。性別は不明である。

4）下顎骨（No.577）（写真6－C,D）

左の下顎枝以外はほとんど残っている。下顎枝角は124度である。歯槽は左·右の切歯と第2小臼歯から遠心が残っており、やはり犬歯と第1小臼歯が抜歯されていたと考えられる。大臼歯の咬合面はほとんど平坦化している。第2小臼歯から大臼歯部に下顎隆起が見られる。オトガイ隆起はよく発達しており、やや外側のオトガイ結節も発達している。下顎底はやや丸みを帯びている。残っている左の第2切歯（側切歯）に数本の線状のエナメル質減形成が認められる。2～3歳頃に形成されたものであろう。エナメル質減形成は、歯の形成時期に何らかの原因によって石灰化不全が起こり、線状あるいは窩状のくぼみができるものである（山本；1988）。

全体として男性的な下顎骨である。

5）下顎骨左（No.741）（写真6－F）

右の切歯部から左の下顎枝までが残っている。歯は左の第2小臼歯から第2大臼歯までの3本が植立している。第3大臼歯は消失している。切歯は左・右ともに2本の切歯の歯槽が確認できるが、残っている左側では、犬歯と第1小臼歯の歯槽が閉鎖している。抜歯されたものであろう。下顎底はほとんど平らである。

小臼歯から大臼歯にかけての下顎の内側に軽度の下顎隆起がある。

6）下顎骨左右（No.966）（写真６－E）

歯槽の退縮が著しく、高齢の個体の下顎骨と思われる。切歯部はすべて歯槽が閉鎖しており、歯は大臼歯部にしか植立していなかったであろう。位置から判断してやはり犬歯と第１小臼歯部の歯槽は閉鎖している。抜歯によるものと推測される。下顎体の大臼歯部の内側に下顎隆起が見られる。

7）下顎骨（No.996）

左・右の下顎体が残っている。さほど頑丈ではない。歯は、左が第１小臼歯から第２大臼歯まで、右は大臼歯３本が残っている。内面にはごく軽度の下顎隆起が見られる。切歯部の歯槽が破損しているので歯槽の閉鎖が確認できるが、それらがどの歯の歯槽に当たるか断定できない。左側の第１大臼歯では、咬耗によりエナメル質はなく、右は生前にエナメル質が脱落していた可能性も考えられるほど著しく咬耗している。歯根嚢胞状に歯槽が解放している。女性的な下顎骨である。

⑪　６号墓址から出土した四肢骨の特徴

G人骨とともに出土した脛骨はあまり扁平ではなく（栄養孔位最大径29.4ミリ、横径22.4ミリ；扁平示数76.2）広脛である。中央付近の断面はヘリチカのI型に近いIV型である。幼児のものと思われる上・下の骨端が癒合していない右大腿骨（No.636）がある。この大腿骨の骨体の最大長は163ミリで、骨体中央周は44ミリである。分部（1985）の報告に基づいて年齢を推定すると３～４歳児である。長さに比してやや骨体の周径が大きい。

Ⅲ）保地遺跡出土の人骨の特徴

一般に縄文時代人は短頭である。保地遺跡の人骨に関しては、短頭のものが多いが、長頭のもの、中頭のものも見られ、多様性に富んでいる。身長は、平本1977の報告している縄文時代人の推定平均身長をやや上回っている。

大腿骨の上部の扁平性は弱いものが多い。しかし、大腿骨そのものは後面の粗線がよく発達した柱状大腿骨が多く見られる。四肢骨は頑丈なものが多く、骨質は非常に厚い。

頭蓋骨では、１例で眼窩の上面にクリブラ・オルビタリアと思われる構造が観察された。この出現頻度は現代人の13%よりも低い。しかし、逆にこの貧血をもたらすような疾患によって縄文時代人は死亡した可能性もあるので、単純に頻度が高いからこれをもたらす疾患が多かったと結論づけることはできないだろう。

抜歯は、ほとんどの個体で観察された。とくに、上顎・下顎ともに犬歯と第１小臼歯が抜歯されている例が多く、他に犬歯だけの例もあった。犬歯と第１小臼歯の抜歯は渡辺（1974）の分類のV型に相当するものである。抜歯はかなり若い個体（15歳以下、M頭蓋骨）で確認できる。

抜歯がどのような理由で何歳頃に行われたかに関しては種々の議論がある。（池田、1981）。池田によれば、一般には第３大臼歯が歯槽上縁からようやく見える17～18歳頃と推定されており、同時に何本も抜歯することはしておらず、一年に２本程度と考えられている。鹿児島県の広田遺跡の例では15歳頃との判断もある（永井、1961）。今回の保地遺跡の人骨ではこれよりさらに若い時期に抜歯されていることになる。成人というのが何歳頃なのか、特に縄文時代にはそのような通過儀礼があったかどうかに関しても推測の域はでないが、この様な事実を風習的抜歯と確認するためには、例えば抜歯後の年数のチェックなどまだ研究されな

ければならないことは多い。

顔面はほとんどが失われているが、全体としては縄文時代の後晩期人の特徴である、顔が横に広く緩に短い広顔低顔的な特徴を示している。

Ⅳ）長野県内の縄文時代遺跡から出土した人骨との比較

西沢（1982）は長野県内の遺跡にみられる抜歯についての報告をしている。それによれば、保地遺跡の第1回目の発掘で出土した人骨では下顎の両側犬歯が抜歯されていたという。また、野口墳墓遺跡（伊那市；縄文晩期中葉）では犬歯の抜歯のみであり、大明神遺跡（大桑村；縄文後晩期）では犬歯の抜歯がほとんどで、下顎では犬歯と切歯が抜歯されたものもあったという。また、生仁遺跡（更埴市;弥生時代後期）では、上顎が犬歯の抜歯で、下顎は犬歯と切歯すべてが抜かれており、宮遺跡（中条村；縄文後期）では上下顎の犬歯途上学右の側切歯の抜歯である。さらに、梁町遺跡（丸子町；縄文後晩期）では犬歯の抜歯である。したがって、今回の保地遺跡の人骨に見られた、「犬歯と小臼歯の抜歯」は長野県内でははじめての報告である。この犬歯と小臼歯の抜歯は、西日本領域に見られるものであり、渡辺（1973）抜歯形式では第Ⅳ群に属するものである。

ほぼ同じ時期に属する北村遺跡（明科町）は、抜歯が見られていない（茂原;1993)。このことは、保地遺跡に住んでいた人々の文化的な交流圏に関して大きな示唆を与えるものである。保地遺跡とは距離がさほど離れていないにもかかわらず北村遺跡との交流は少なかった可能性があり、同じ時代の東海地方での抜歯風習の多さを考えるとむしろ北村遺跡に抜歯が見られないことが特殊な現象と考えられる。ただし、他とは抜歯パターンが異なる保地遺跡の特異性も指摘するべきであろう。これらの理由に関しては今後の検討課題であろう。

保地遺跡では、齲蝕歯はごく少ないが、資料が少数であり、遊離歯として収集される例が多いので検討は今後に残される。

Ⅴ）まとめ

保地遺跡の昭和40年の発掘で頭蓋骨が発掘されているが、計測結果などはまだ報告されていない。今回の人骨では、頭蓋骨の保存状態は良好であるが、顔面の復元は難しく、計測値は限られている。保地遺跡人骨は全体的な形質としては一般的な縄文時代人としての広顔低顔の特徴を備えていると言うことができる。しかし、抜歯は「犬歯と第1小臼歯」を抜く渡辺のⅣ型という長野県内ではみられない型式であり、本遺跡とあまり変わらない時代の北村遺跡（明科町）で抜歯が見られないことと比べるとむしろ北村遺跡の特殊性が明らかになったと言える。ただし、保地遺跡の特異性も指摘するべきであろう。頭型は縄文時代に一般的な短頭が多いが、中頭、長頭もみられ変異に富んでいる。

謝　辞

本人骨の研究の機会を与えてくださった坂城町の教育委員会の方々に心から感謝いたします。なかでも、この報告をまとめるに当たって、人骨のクリーニング、整理をはじめとしていろいろな情報を整理して教えてくださった坂城町の助川朋広さんに厚く感謝いたします。また、この研究のきっかけを与えてくださった長野県庁の平林彰氏にも心から感謝いたします。最後に、骨のレントゲン観察、ならびに病理所見についてご教示くさだった京都大学霊長類研究所の中井将嗣氏、西村剛氏、ならびに写真撮影をしてくださった当分

野の木下実氏に厚く御礼申し上げます。

参考文献

馬場悠男（1991）：人骨計測法．人類学講座別巻1，「人体計測法」，江藤盛治集，159－358

鳰名忠次郎（1951）：日本人前腕骨の人類学的研究　其一　橈骨．東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集5；1－28

鳰名忠次郎（1951）：日本人前腕骨の人類学的研究　其二　尺骨．東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集5；1－30

藤井　明（1960）：四肢長骨の長さと身長との関係に就て．順天堂体育学部紀要，3;49－61

藤田恒太郎（1960）：歯の計測規準について．人類学雑誌，61;1－6

福田　佐（1961）：関東地方人肺骨の人類学的研究（計測編）．東京慈恵会医科大学雑誌76;1－21

権田和良（1959）：歯の大きさの性差について．人類学雑誌，43（1）;151－163

春成秀爾（1973）：抜歯の意義（1）．縄文時代の集団関係とその解体過程をめぐって．考古学研究20;25－48

春成秀爾（1974）：抜歯の意義（2）．縄文時代の集団関係とその解体過程をめぐって．考古学研究20;41－58

Hirata,K.（1988）：A Contribution to the Palaeopathology of Cribra Orbitalia in Japanese：
1. Cribra Orbitalia in Edo Japanese. The St. Maraiana Medical Journal,16（1）：6－24.

Hirata,K.（1988）：A Contribution to the Palaeopathology of Cribra Orbitalia in Japanese：2.
Secular Trends in the Prevalence of Cribra Orbitaoia.　The St. Marianna Medical Journal,16(2);215－229.

平本嘉助（1977）：日本人身長の時代的変化．自然科学と博物館，44（4）;169－172

池田次郎（1981）：日本人の抜歯風習．人類学講座第5巻「日本人Ⅰ」，雄山閣;243－260

加藤守男・原田達二（1959）：関東地方人膝蓋骨の人類学的研究．東京慈恵会医科大学雑誌74;883－889

清野謙次・宮本博人（1925）：津雲貝塚人人骨の人類学的研究．第二部，頭蓋骨の研究;人類学雑誌41）3，4）1－104

清野謙次・平井隆（1928）：津雲貝塚人人骨の人類学的研究．第3部，上肢骨の研究;人類学雑誌43（3附）;177－301

清野謙次・平井隆（1928）：津雲貝塚人人骨の人類学的研究．第4部，下肢骨の研究．其1．大腿骨・膝蓋骨・脛骨及腓骨に就て;人類学雑誌43（4附）;303－390

永井昌文（1961）：古代九州人の風俗的抜歯．福岡医学会雑誌52；554－558

西原四良（1953）：関東地方人上腕骨の人類学的研究．東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集9；1－63

西沢寿晃（1952）：中部高地諸遺跡出土の抜歯人骨．「中部高地の考古学Ⅱ」，長野県考古学編33－46．

大場信次（1950）：関東地方人大腿骨の人類学的研究（計測編）．東京慈恵会医科大学解剖学　教室業績集3；1－44

茂原信生（1993）：北村遺跡出土の人骨の形質．長野県埋蔵文化センター発掘調査報告書，14，「北村遺跡」，259－402．

鈴木信夫（1961）：関東地方脛骨の人類学的研究（計測編）．東京慈恵会医科大学雑誌75;2638－2678

鈴木隆雄（1998）：骨からみた日本人－古病理学が語る歴史．講談社，49－59．

関　孝一（1966）：長野県埴科郡保地遺跡発掘調査概報．　考古学雑誌，51（3）;25－43．

関　孝一（1982）：保地遺跡．長野県史，考古資料編1巻180－186．

高野元昭（1958）：関東地方人鎖骨の人類学的研究．東京慈恵会医科大学カイボウ学教室業績集，18;1－24＋写真．

分部哲秋（1985）：福島県小郡市横隈狐遺跡出土の弥生時代幼小児骨．小郡市文化財調査報告書，第27集;47－57，図版46

渡辺　誠（1966）：沖縄文化における抜歯風習の研究．古代学12;173－201

山本美代子（1988）：日本古代人永久歯のエナメル質減形成．人類学誌，96（4）;417－433

写真の説明

写真１：保地遺跡１・２・５号墓址から出土した人骨。

Ａ：１号墓址出土の頭蓋骨の上面観（上方が前）。Ｂ：同下顎骨前方部の咬合面観。左右の犬歯と第１小臼歯が抜歯されている（矢印）。Ｃ：２号墓址出土の頭蓋骨上面観。土圧による変形だけとは思われないような幅の広い頭蓋冠である。Ｄ：５号墓址出土の頭蓋骨の左側面観（左が前方）。Ｅ：同，上面観。Ｆ：同，下顎骨体の上面観（左が前方）。やはり犬歯と第１小臼歯が抜歯されている（矢印）。Ｇ：同，外側面。

写真２：保地遺跡６号墓址から出土したＡ人骨。

Ａ：頭蓋骨前面観。Ｂ：同，上面観（左が前方）。Ｃ：同，左側面観。Ｄ：同，下顎骨左側面観。Ｅ：同，下顎骨下面観。切歯は破損して歯根しか残っていないが，犬歯と第１小臼歯の抜歯が左右に見られる（矢印）。

写真３：保地遺跡６号墓址から出土したＡ人骨の四肢骨。

Ａ：右橈骨。Ｂ：右尺骨。Ｃ：右上腕骨。Ｄ：左上腕骨。Ｅ：左尺骨。Ｆ：左橈骨。Ｇ：右寛骨（矢印は大坐骨切痕部）。Ｈ：右大腿骨。Ｉ：右腓骨。Ｊ：右脛骨。Ｋ：左脛骨。Ｌ：左腓骨。Ｍ：左大腿骨。

写真４：保地遺跡６号墓址から出土したＢ人骨の頭蓋骨。

Ａ：頭蓋骨前面観。Ｂ：同，上面観（左が前方）。Ｃ：同，左側面観。Ｄ：同，下顎骨左側面観。Ｅ：同，下顎骨上面観。この個体は，他の多くの個体と異なり，犬歯の抜歯（矢印）だけで，第１小臼歯の抜歯はない。

写真５：保地遺跡６号墓址から出土したＢ人骨の四肢骨。

Ａ：右橈骨。Ｂ：右尺骨。Ｃ：右上腕骨。Ｄ：左上腕骨。Ｅ：左寛骨（腸骨部，矢印は大坐骨切痕部）。Ｆ：右膝蓋骨。Ｇ：右大腿骨。Ｈ：右腓骨。Ｉ：右脛骨。Ｊ：左脛骨。Ｋ：左大腿骨。Ｌ：右距骨（足根骨）。Ｍ：右踵骨（足根骨）。

写真６：保地遺跡６号墓址から出土した頭蓋骨。

Ａ：No.509の下顎骨左側面観（左が前方）。Ｂ：同，咬合面観。この個体でも犬歯と第１小臼歯が抜歯されている（矢印）。Ｃ：No.577の下顎骨右側面観（右が前方）。Ｄ：同，この個体にも犬歯と第１小臼歯の抜歯がある（矢印）。Ｅ：No.966の下顎骨上面観。老齢で切り歯も脱落しており，抜歯の詳細は不明。Ｆ：No.741の下顎骨上面観。同様の抜歯が見られる（矢印）。Ｇ：６号墓Ｇ人骨の頭蓋骨上面観（左が前方）。Ｈ：同，左側面観。

写真７：保地遺跡６号墓址から出土した頭蓋骨。

Ａ：Ｈ人頭蓋骨左側面観（左が前方）。Ｂ：同，上面観。Ｃ：Ｉ人骨の頭蓋骨左側面観（左が前方）。Ｄ：同，上面観。Ｅ：Ｊ人骨の下顎骨の左側面観。Ｆ：同，上面観。左右とも犬歯と第１小臼歯の抜歯がある。

写真８：保地遺跡６号墓址から出土した頭蓋骨。

Ａ：Ｋ人骨の頭蓋骨左側面観（後半部だけが残っている。左が前方）。Ｂ：同，後頭部。Ｃ：Ｌ人骨の頭蓋骨左側面観（左が前方）。Ｄ：同，上面観。Ｅ：Ｍ人骨の頭蓋骨左側面観（左が前方）。Ｆ：同，上面観。

表1　保地遺跡（縄文時代後期～晩期）出土人骨の概要

			標本番号	性　別	年　齢	特　徴	残存部位
1号墓址	No.1	1号人骨	No.51	女性	妊娠痕あり	妊娠痕あり	一部のみ残存（頭蓋骨、大腿骨）
	No.2		No.11		高齢（熟年）	下顎抜歯（C,P1）	下顎骨体
	No.3			男性	成人	外後頭隆起発達	
2号墓址	No.1	2号人骨		不明	成人	少なくとも3体分	おもに頭蓋骨、一部四肢骨
	No.2	2号人骨		不明	不明		
	No.3	2号人骨		不明	不明		
4号墓址	No.1	4号人骨		不明	成人（熟年）	超扁平大腿骨	後頭骨、下顎骨は2体分
	No.2			不明	成人（熟年）	柱状大腿骨	1体は下顎隆起発達
5号墓址		5号人骨		男性	成人	厚い頭蓋骨、側臥屈葬	頭蓋骨の一部、大腿骨
6号墓址	1号墓址下層	A人骨		男性	熟年	身長163cm	全身（仰臥伸展葬）
		B人骨		女性？	熟年以上	身長151cm	全身（仰臥伸展葬）、抜歯
		C人骨					集積した頭蓋骨片
		G人骨		女性	成人		頭蓋
		H人骨		女性	壮年～熟年		頭蓋
		I人骨		男性？			頭蓋
		J人骨		不明	青年	抜歯（C,P1）	頭蓋
		K人骨		男性？	青年～壮年		頭蓋
		L人骨		男性？	青年		頭蓋
		M人骨		女性	少年（15歳）	抜歯あり（C）	頭蓋
	No.342	下顎骨		不明	成人	抜歯（C）	左の下顎体
	No.509	下顎骨		男性？	成人（壮年）	抜歯（C,P1）	ほぼ完形
	No.558	下顎骨		不明	成人（高齢）	不明	左右の下顎体
	No.577	下顎骨		男性	成人（壮年）	抜歯（C,P1）	左の下顎枝のみ欠
	No.741	下顎骨		不明	成人（青年？）	抜歯（C,P1）	おもに左下顎骨、下顎隆起
	No.966	下顎骨		不明	成人（熟年？）	抜歯？	正中から左右大臼歯部まで
	No.996	下顎骨		女性？	成人（壮年？）	抜歯あり（歯種不明）	左右の下顎体

表2　保地遺跡出人骨の上肢骨の計測値と比較資料

単位はmm、*は推定値

		縄文時代		縄文（津雲）		現代関東地方人	
		保地遺跡		（清野・平井：1928）			
		A人骨（男性）	B人骨（女性）	男性	女性	男性	女性
鎖骨		右　左	右　左			（高野：1958）	
	6 中央周	43	—	33.8	33.5	38.20	33.20
	5 中央矢状径	16.9	—	13.2	11.3	12.20	10.80
	4 中央垂直径	9.4	—	10.1	8.5	10.00	8.40
	4.5 中央横断示数	55.6	—	76.6	75.1	83.40	79.30
上腕骨						（西原：1953）	
	4 下端幅	57.1	53.3	58.2	50.7	58.97	49.91
	5 中央最大径	22.5	19.7	23.9	20.4	22.41	19.71
	6 中央最小径	17.3	15.8	17.5	14.1	17.74	14.70
	7 骨幹最小周	62	56	65.2	55.3	62.27	54.11
7a	中央周径	65	59				
6/5	中央横断示数	76.9	80.2	72.7	69.0	79.55	75.10
橈骨						（鮭名：1951）	
	1 最大長	240	215	235.2	209.0	225.09	202.11
	2 生理長	222	205	220.2	197.2	208.19	188.13
	3 最小周	43	41	44.5	38.5	40.45	34.69
3/2	長厚示数	19.4		20.5	19.2	19.55	18.49
4	骨体横径	15.6	14.9				
4a	骨体中央横径	15.2		17.2	14.8	16.45	14.56
5	骨体矢状径	11.4	9.8				
5/4	体断面示数	73.1					
5(4)	頸周径	46					
5(5)	中央周	45		—	—	43.34	37.56
5(6)	下端幅	30.3		32.5	27.3	33.89	28.88
5a	骨体中央矢状径	12.3		11.8	10.3	11.81	9.84
5a/4a	骨幹横断示数	80.9		69.2	70.3	71.75	67.44
尺骨						（鮭名：1951）	
	1 最大長	256	233*	252.5	226.0	241.52	218.69
	2 生理長	227	208	222.3	201.4	210.67	191.11
	3 骨幹最小周	41	37	39.3	33.9	36.55	32.16
3/2	長厚示数	18.1		17.8	16.7	17.48	16.82
	6 肘頭幅	23.6					
	11 骨幹背掌径	13.4	12.3	14.2	11.7	13.20	10.71
	12 骨幹横径	18.8	13.6	16.3	14.0	16.29	13.91
11/12	骨幹横断骨幹	71.3		87.3	84.5	80.94	76.94
	13 上横径	23.0	18.3	21.2	17.2	20.52	17.16
	14 上前後径	29.1	22.6	25.5	21.8	25.17	21.91
13/14	扁平骨幹	79.0		82.8	79.5	82.16	78.37
11′	中央最小径	12.9	—	12.4	10.6	12.39	10.39
12′	中央最大径	18.8	—	17.0	14.5	16.63	14.26
11′/12′	中央横断示数	68.6		73.2	73.5	74.53	73.16

表3　保地遺跡出人骨の下肢骨計測値と比較資料

単位はmm、*は推定値。中央径などだけのものでは、中央の位置を推定している。

Martin	計測項目	縄文時代 保地遺跡 A人骨（男性） 右	縄文時代 保地遺跡 A人骨（男性） 左	縄文時代 保地遺跡 B人骨（男性） 右	縄文時代 保地遺跡 B人骨（男性） 左	縄文時代 津雲貝塚 清野謙次他（1928） 男性	縄文時代 津雲貝塚 清野謙次他（1928） 女性	現代 関東地方人 男性	現代 関東地方人 女性
大腿骨								（大場：1950）	
1	最大長		443			418.2	382.9	412.05	382.10
2	自然位全長		441			414.2	377.8	408.05	378.20
6	中央矢状径	32.0	34.2	27.9	26.1	29.3	25.0	27.61	24.66
6/7 7	中央横径	27.3	27.3	27.4	27.5	25.5	24.0	26.23	23.06
	中央横断示数	117.2	125.3	101.8	94.9	114.6	103.9	105.72	107.56
8	骨幹中央周	94	96	85	83	86.8	77.4	83.60	74.40
8/2	長厚示数		21.8			21.1	20.6	20.42	19.61
9	骨体上横径	31.4	30.7	29.8	29.8	30.5	28.3	30.86	27.86
10	骨体上矢状径	26.2	26.9	24.1	23.2	24.2	21.6	25.35	22.45
10/9	上骨体横断示数	83.4	87.6	80.9	77.9	79.5	76.6	82.18	81.24
膝蓋骨								（加藤・原田：1960）	
1	最大高		44.3	34.9				41.39	37.14
2	最大幅		47.9					45.14	40.12
3	最大厚		21.0	18.8				19.88	18.16
4	関節面高		34.6					31.09	28.87
5	内側面幅		19.2	17.7				21.03	18.83
6	外側面幅		30.3	23.9				27.10	24.53
1.2	高幅示数		92.5					92.10	92.86
3.2	厚幅示数		43.8					44.08	45.48
5.6	関節面示数		63.4					78.17	76.92
脛　骨								（鈴木：1961）	
1	全長	360*			314	345.9	318.1	320.38	298.25
3	最大上端幅				65.4	73.8	67.7	74.59	65.93
6	下幅				43.3	50.2	45.3	51.3	45.84
8	中央矢状径	34.3	34.6	26.2	28.7	32.1	26.8	28.73	25.71
9	中央横径	22.3	23.2	20.9	20.7	19.6	17.7	22.79	20.31
9/8	中央横断示数	65.0	67.1		72.1	61.5	65.4	78.26	78.68
8a	栄養孔部矢状径	35.8	37.9	31.4	34.6	34.4	30.2	31.77	28.95
9a	栄養孔部横径	23.1	23.5	22.2	23.6	21.9	19.0	25.10	22.51
9a/8a	栄養孔位断面示数	64.5	62.0		68.2	62.2	62.8	78.26	77.28
10b	最小周	80	80	73	73	77.4	67.1	72.25	65.28
10b/1	長厚示数				23.2	22.4	21.0	22.68	22.06
腓　骨								（福田：1961）	
2	中央最大径	21.2	20.4			17.7	15.1	14.81	13.61
3	中央最小径	11.1	11.7			12.1	9.9	10.94	9.54
3/2	中央横断示数	52.4	57.4			69.0	66.1	73.35	70.1
4	中央周	54	54			52.0	43.6	43.38	38.95
4(2)	下端幅		18.9					19.84	17.33
距　骨									
1	距骨長		54.2	46.8		50.0	45.4		
2	距骨幅		39.6	—		41.4	37.9		
3	中央高		30.4	—		28.9	25.9		
2/1	長幅示数		73.1			82.7	83.6		
3/1	長高示数		56.1			57.8	57.1		
脛　骨									
1	最大長		80.2	67.9		76.2	69.6		
2	中　幅		38.4	—		41.8	37.9		
4	高		43.4	—		40.0	36.3		
2/1	長幅示数		47.9			55.3	54.3		
7	踵骨隆起高		47.5	42.2		45.3	40.9		

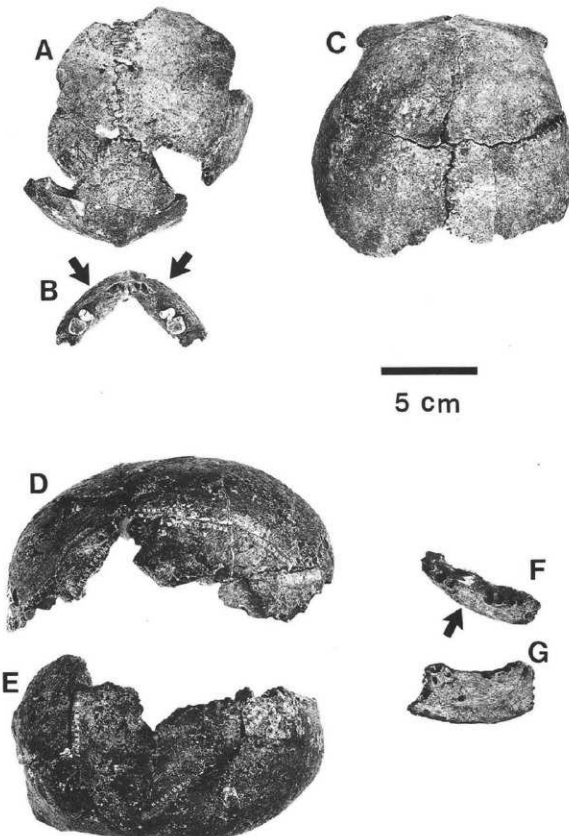


写真1　1・2・5号墓址出土人骨

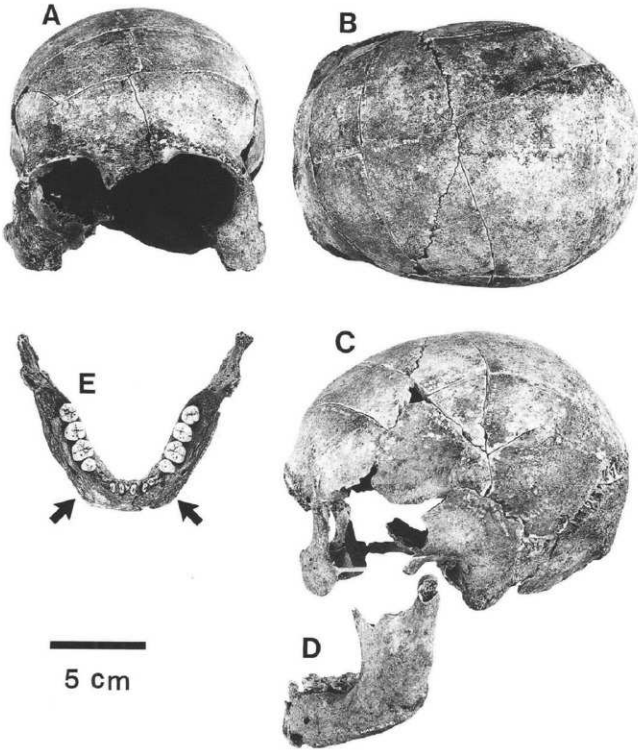


写真２　6号墓址出土Ａ人骨頭蓋骨

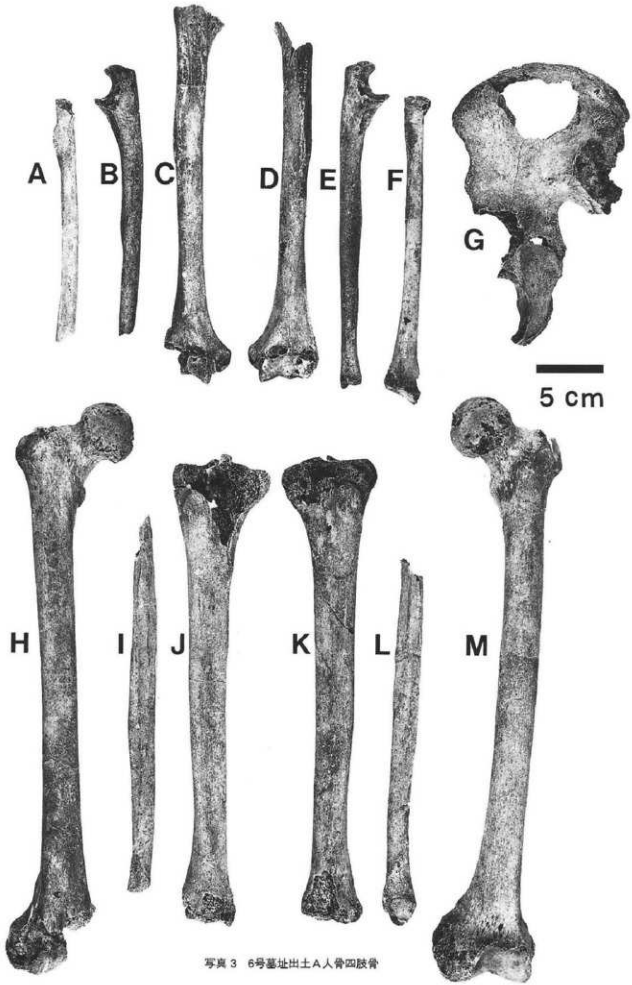


写真３　６号墓址出土Ａ人骨四肢骨

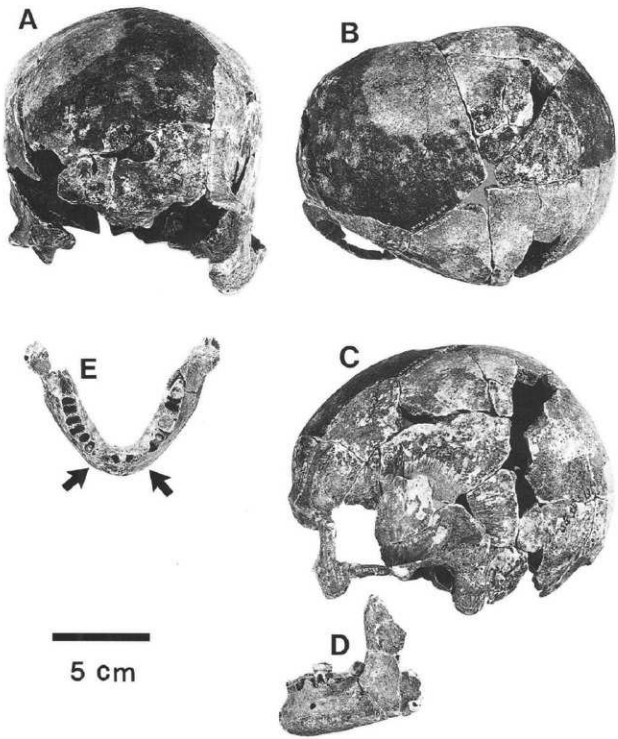


写真４　6号墓址出土Ｂ人骨頭蓋骨

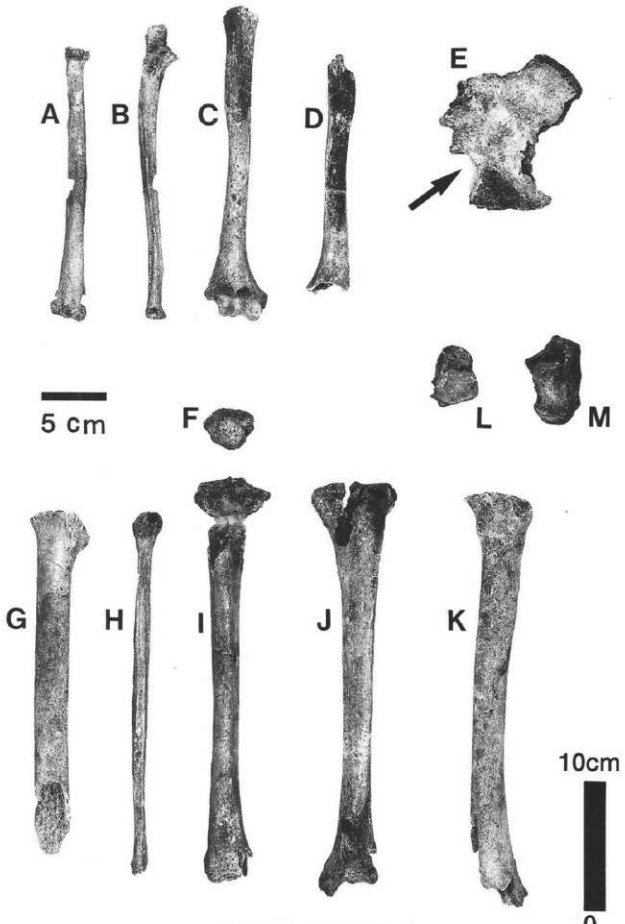


写真5　6号墓址出土B人骨四肢骨

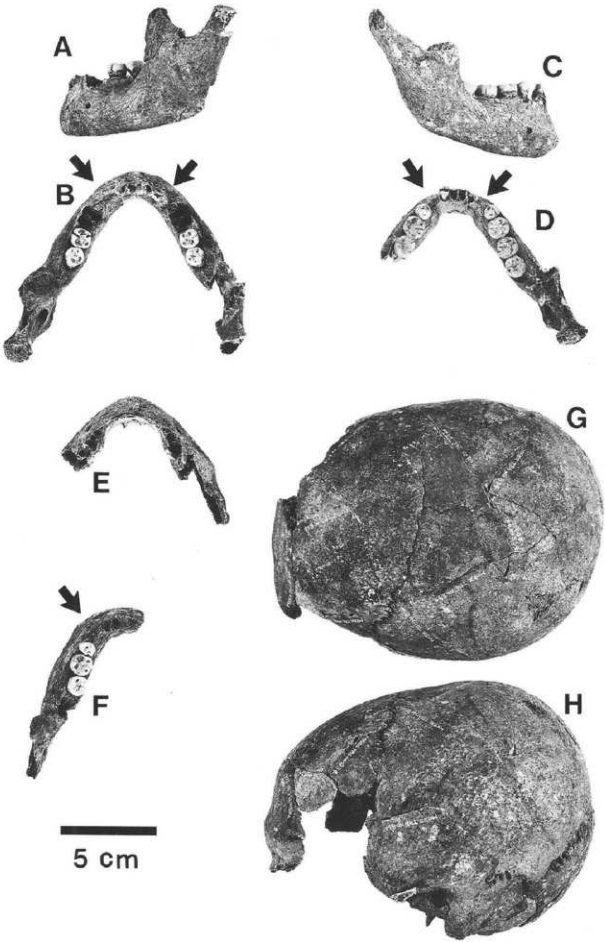


写真6　6号墓址出土頭蓋骨①

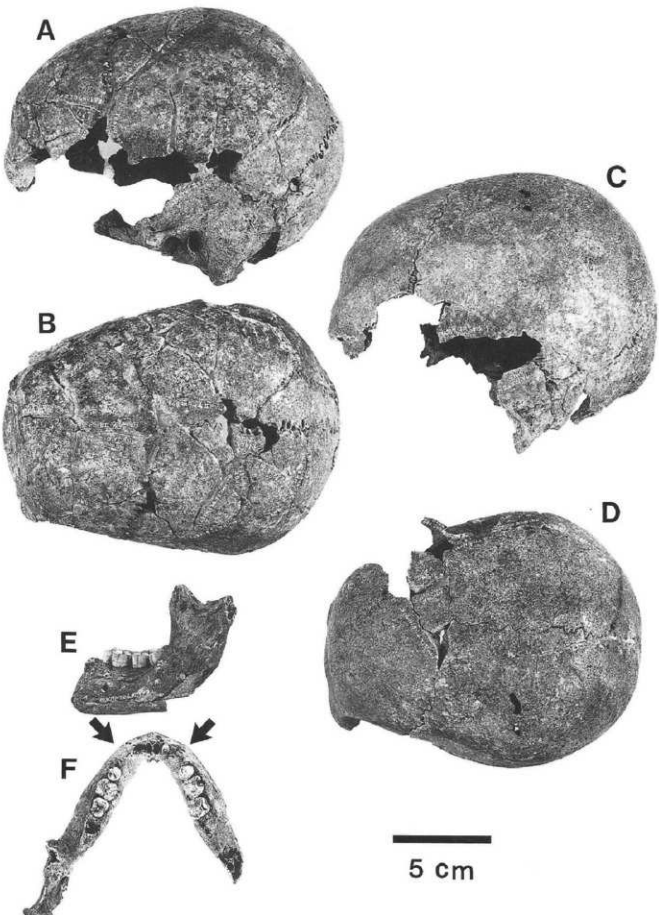


写真７　6号墓址出土頭蓋骨②

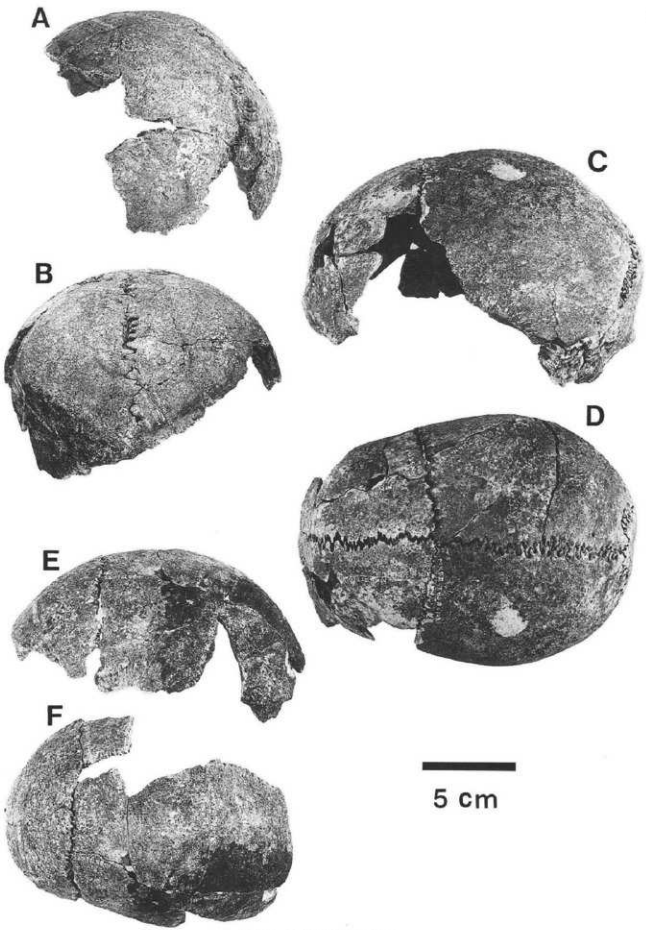


写真 8　6号墓址出土頭蓋骨③

第Ⅵ章　保地遺跡出土人骨の炭素・窒素安定同位体比にもとづく食性復元

国立環境研究所 化学環境研究領域　米田　穣

1. はじめに

本研究では長野県埴科郡坂城町南条の保地遺跡から出土した人骨資料12点について、残存するタンパク質コラーゲンを抽出し、その炭素および窒素の安定同位体比を測定した。コラーゲンの安定同位体比は、摂取したタンパク質に含まれる同位体の割合に応じて変化する。したがって、コラーゲンの同位体比を測定することで摂取されたタンパク質の同位体比を推定することができる。先史人類集団が利用したと考えられる天然の動植物では、その生息環境や代謝で同位体比が大きく異なるグループに分けることができる。したがって、コラーゲンの炭素・窒素同位体比を測定することで、その個体が摂取した食料資源をある程度、定量的に推定することが可能になる（例えばMinagawa and Akazawa, 1991）。

近年の分析技術の進展は目覚しく、非常に少量の試料で様々な化学分析が可能となり、従来では分析することが困難であった貴重な学術試料についても、分析が現実的になっている。本研究では、保地遺跡から出土した人骨試料について、肋骨などの形態人類学情報が比較的少ない部位から0.5～1gの骨片を採取し、残存するコラーゲンを抽出・精製して分析に供した。直接、人骨試料を分析することによって、従来の考古学的な手法では推定が困難であった食生活における個体差や社会性などを明らかにできる可能性がある。

2. 資料と方法

分析資料は肋骨などを中心に採取したが、コラーゲン成分には部位による違いがほとんどない。分析試料は、0.2mol/Lの水酸化ナトリウム溶液に12時間浸けて、フミン酸などの土壌有機物を除去し凍結粉砕した。この粉末試料約0.5gをセルロースチューブ内に1mol／Lの塩酸を透析することによって穏やかにハイドロキシアパタイトを溶解する。こうして残存した有機分画の大部分はコラーゲンからなるが、土壌由来のヒューミン等が残存する可能性がある。そこでコラーゲンが比較的低温で熱変性を起こし水に可溶になる性質を利用して、さらにコラーゲンと土壌有機物を分離精製する（ゼラチン化）。本試料に対しては、90℃の純水10mL中で約12時間、ゼラチン化を実施して遠心分離後に得られた上澄みを凍結乾燥することで分析に供するゼラチン・コラーゲンを得た（Longin (1971)を改変）。

上記の方法で抽出されたゼラチン・コラーゲンから約0.5mgを分取して、炭素・窒素安定同位体比分析に供した。同位体比測定には元素分析計・高精度安定同位体比質量分析システムを使用した。測定精度は、測定に再調整したSigma Chemical社製コラーゲン（COLLAGEN Insoluble Type 1）をサンプル測定中に適宜挿入することで評価した結果、1標準偏差は炭素同位体比（$\delta^{13}C$）で0.1‰、窒素同位体比（$\delta^{15}N$）では0.3‰以下である。

ここで簡単に同位体比の単位であるδ（デルタ）値について簡単に説明する。天然の物質では同位体比の変動は非常に小さいので、通常は標準物質との偏差を千分率で表記したδ値で示される。炭素では標準物質にPeeDee層出土のベレムナイトの化石（PDB）が用いられ$\delta^{13}C$値は次式で定義される。

$$\delta^{13}C = \left(\frac{(^{13}C/^{12}C)_{sample}}{(^{13}C/^{12}C)_{PDB}} - 1 \right) \times 1000$$

同様に窒素の場合は大気窒素（AIR）を標準物質として、$^{15}N/^{14}N$比の変動を表す。

コラーゲンは化学的に安定な物質であるが、土壌埋没中に変性する可能性があるため、炭素と窒素の比を確認して、変性や土壌有機物の混入の影響を評価した。現生の動物骨コラーゲンではC／N比が2.9から3.6の間になることが知られている（DeNiro, 1985）。

3. 分析結果と考察

表4に分析結果を示す。まず、C／N比の値がコラーゲンの正常値からはずれた個体が3個体あり、これらは変性が大きく生前の同位体比とは異なる可能性があるので、食性に関する議論からは除外する。しかし、それ以外の資料は現代のコラーゲンと近似した値を示し、C／N比と$\delta^{13}C$値あるいは$\delta^{15}N$値とは有意な相関は認められなかった。したがって、これら9個体の分析結果は生前に記録された同位体に関する情報を保持しているものと考えられる。

動物実験などからコラーゲンの$\delta^{13}C$値は摂取したタンパク質のそれよりも約4.5‰の幅で^{13}Cが濃縮することが知られている。同様に$\delta^{15}N$では約3.5‰の濃縮があるので、コラーゲンの測定結果からそれらの値を差し引くことで、保地遺跡に居住した縄文時代人が摂取したタンパク質における炭素・窒素安定同位体比を推定することができる（表4）。表4には日本列島および近海から採取された野生動植物における炭素・窒素同位体比の分布もあわせて示した。植物では光合成回路の違いによりC_3植物と呼ばれるグループとC_4植物と呼ばれるグループに大別される。C_3植物には、縄文時代人が利用したと考えられる堅果類を産する木本をはじめ、日本列島に分布する多くの植物が分類される。一方、乾燥地に適応したC_4植物ではアワ、ヒエ、キビなどの雑穀が食料資源として利用された可能性がある。第84図に示したように、保地遺跡から出土した縄文時代人では、陸上の草食動物あるいはC_3植物と海産の魚類の間で直線的に分布する傾向が認められた。$\delta^{13}C$と$\delta^{15}N$の間では有意な相関（$r^2=0.621$）が認められることから、保地遺跡集団では大別して2種類のタンパク源が利用されていたと想定される（Schwarcz, 1991）。前述のとおり回帰直線の一端はC_3植物と草食動物を指している。これはシカを中心とした動物遺存体とも矛盾しない。また、長野県北村遺跡から出土した人骨の微量元素分析からはクリなどの堅果類が重要な食料資源であったとの報告がなされている（米田ほか, 1996）。しかし今回の分析結果では、植物質と動物質のどちらが量的に重要であったかを議論することは困難である。しかし、いわゆる「縄文農耕論」で栽培の可能性が指摘されてきた雑穀類を含むC_4植物については、保地遺跡の縄文時代集団では重要な食料資源だった可能性は低いようである。

一方で、回帰直線のもう一端は海生の魚類が示す領域を示しており、2つのタンパク源の1つは海産の魚類であった可能性がある。内陸に立地する保地遺跡からは貝類、魚類ともに海洋生物の遺存体は検出されていないが、千曲川河岸段丘上に位置することから、サケ・マスなど遡上性の海生魚類を利用した可能性が指摘できる。同じく長野県内に立地する南佐久郡北相木村の栃原遺跡（縄文時代早期）では、サケ・マス類の遺存体が検出されており、釣針など漁労に係る骨角器も出土している（西沢, 1982）。その栃原遺跡の人骨における炭素・窒素安定同位体比でも保地遺跡と同様に海産物とC_3植物・草食動物で直線的な分布が観察された（Yoneda et al., n.d.）。保地遺跡ではサケ・マスなど海産物の利用を示唆する遺物は出土していないが、縄文時代後晩期にも内陸盆地まで遡上したサケ・マスなどを利用した可能性が考えられる。あるいは、栃原遺

跡からはクロアワビなど海生貝類が出土しており、保地遺跡集団も海岸部で採取された海産物を何らかの方法で入手して利用していたのかもしれない。栃原遺跡と比較すると、保地遺跡の分析結果は炭素、窒素とも大きな値を示しており、保地遺跡ではより多くの海産物が利用されたようである。一方で、長野県内でも犀川の河岸段丘に位置する北村遺跡（縄文時代中・後期）では、そのような海産物利用の傾向は見出されていない（赤澤ほか, 1993)。さらに、分析対象を広げることで、内陸盆地における縄文時代人の食生態の実態や時代差を明らかにできると期待される。

4. 結語

本研究では、長野県坂城町の保地遺跡から出土した縄文時代後晩期の人骨資料を対象に、炭素・窒素安定同位体比に基づく食性復元を試みた。その結果、保地遺跡に居住した縄文時代集団では、$\delta^{13}C$値と$\delta^{15}N$値に相関関係が認められ、主に2種類のタンパク源を利用していたことが明らかになった。そのひとつは、遺跡周辺でも天然に存在するC_3植物とそれを摂取している草食動物であると考えられる。もう一方のタンパク源は海生魚類であると推定され、千曲川を遡上してきたサケ・マスなどを対象とした漁労活動が彼らの生業活動の一環であった可能性が指摘できる。魚類の利用に関しては、比較的大きな個体差が認められるので、今後、形質人類学的な分析結果と統合することによって、食性の個体差が何に起因するのかを明らかにできるかもしれない。骨の化学分析に基づく古食性の研究は、個体ごとの食生活を明らかにできる点が大きな特徴であり、それを活かして従来の研究では踏み込むことが困難であった、先史時代における性別による食習慣の違いや貧富の差などの社会的な側面が明らかになると期待される。

参考文献

赤澤　威・米田　穣・吉田邦夫(1993). 北村縄文人骨の同位体食性分析.「(財) 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11　－明科町内－　北村遺跡」pp. 445-468. 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・(財) 長野県埋蔵文化財センター.

DeNiro, M. J. (1985). Postmortem preservation and alteration of in vivo bone collagen isotope ratios in relation to palaeodietary reconstruction. Nature 317, 806-809.

Longin, R. (1971). New method of collagen extraction for radiocarbon dating. Nature 230, 241-242.

Minagawa M. and T. Akazawa (1991). Dietary patterns of Japanese Jomon hunter-gatherers: Stable nitrogen and carbon isotope analyses of human bones. In (C. M. Aikens & S. N. Rhee, Eds.) Pacific Northeast Asia in Prehistory: Recent Research into the Emergence of Hunte-Fisher-Gatheres, Farmers, and Socio-Political Elites. Seattle: University Washington Press, pp. 59-67.

西沢寿晃 (1982). 栃原岩陰遺跡.「長野県史　考古資料編　全1巻(2)主要遺跡(北・東信)」pp. 559-584.（社）長野県史刊行会.

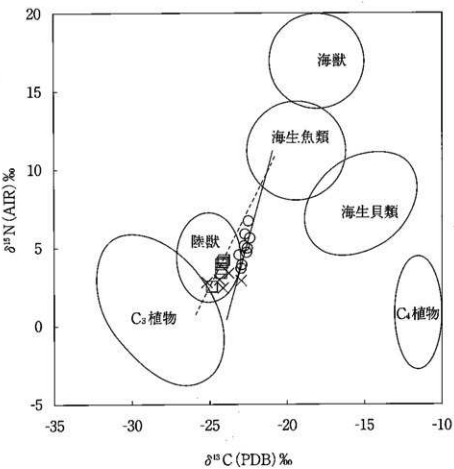
Schwarcz, H. P. (1991) Some theoretical aspects of isotope paleodiet studies. Journal of Archaeological Science 18, 262-275.

米田　穣・吉田邦夫・吉永　淳・森口昌敏・赤澤　威 (1996). 長野県出土人骨試料における炭素・窒素安定同位体比および微量元素量に基づく古食性の復元. 第四紀研究 35 (4), 293-303.

Yoneda, M., M. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, and M. Morita (n.d.). Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan. Submitted to Radiocarbon.

表4　保地遺跡出土人骨遺跡における炭素・窒素比と同位体比。＊印の資料の結果は変性を強く受けている可能性がある。

資料名	C/N	δ^{15}N (AIR)	δ^{13}C (PDB)
保地1号墓址人骨	6.01*	10.67	−21.39
保地2号墓址人骨	3.45	8.07	−18.64
保地4号墓址人骨	4.56*	10.26	−19.24
保地5号墓址人骨	6.01*	10.71	−20.65
保地6号墓址A人骨	3.17	10.21	−18.07
保地6号墓址B人骨	3.14	8.44	−18.18
保地6号墓址C人骨	3.26	8.56	−18.31
保地6号墓址I人骨	3.37	7.19	−18.54
保地6号墓址J人骨	3.50	8.21	−18.24
保地6号墓址K人骨	3.20	7.39	−18.53
保地6号墓址L人骨	3.13	9.36	−18.24
保地6号墓址M人骨	3.28	9.11	−18.02



第84図　コラーゲンから推定した保地遺跡縄文人が摂取したタンパク質における炭素・窒素安定同位体比と、北村遺跡および栃原遺跡との比較。○印は保地遺跡、×印は北村遺跡、□印は北村遺跡で利用されたタンパク質の同位体比を示す。保地遺跡と北村遺跡ではδ^{13}C値とδ^{15}N値の間に正の相関が認められたので回帰直線を示している。

第Ⅶ章　保地遺跡出土の獣骨の観察記録、特にオオカミを中心として

京都大学霊長類研究所　茂原　信生

脊椎動物遺存体の出土状況について概説する。骨の保存状態は比較的良いが、完形の骨はほとんどなく、どの骨も破損している。カットマークは散見されるが全体的には少ない印象である。これは骨が破損していることも関係しているであろう。全体の量はテンバコにして4箱ほどである。

出土獣骨リスト

哺乳綱　Mammalia
偶蹄目　Artiodactyla
シカ科　Cervidae
ニホンジカ　Cervus　nippon
イノシシ科　Suidae
イノシシ　Sus　scrofa
食肉目　Carnivora
イヌ科　Canidae
オオカミ　Canis　lupus　hodophilax
クマ科　Ursidae
ツキノワグマ　Selenarctos　thibetanus
齧歯目　Rodentia
リス科　Sciuridae
ムササビ　Petaurista　leucogenys

出土状況

ほとんどがシカとイノシシであり、他にはニホンオオカミが頭蓋の一部、ならびにツキノワグマの下顎右犬歯が1本とムササビの右上腕骨が1点出土しているだけである。ニホンオオカミは、咬耗の少ない若い個体であるが、頭蓋骨は下顎骨と上顎骨の一部以外は出土していない。住居址からは焼けた獣骨も出土している。

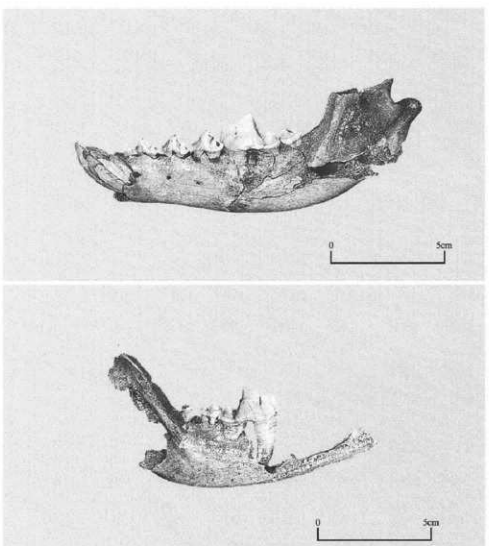
今回のように破片でも1点と数える数え方の問題もあるがシカが、それを考えに入れてもシカの出土量がイノシシの2.5倍ほどであり、圧倒的にシカが多い。それ以外の動物は前述のように少なく、縄文時代の遺跡としては貧弱な動物相である。

ニホンオオカミ

1号トレンチの3号獣骨集中区（第6図参照）から出土している。右上顎骨臼歯部、右下顎骨後部（下顎体と下顎枝の一部）、及び左下顎骨のほとんどが残っている。歯は上顎が右の第1～第3切歯、第3小臼歯～第2大臼歯の7本、下顎は右が第3切歯1本、第2小臼歯から第3大臼歯までの7本、左が第1切歯から第2大

臼歯までの10本、合計で24本が残っている。どの歯もほとんど咬耗しておらず、かなり若い個体と考えられる。上述のように四肢骨は全く出土していない。重複する部分がなく、ほぼ同じ場所から出土しているので、同一個体であろうと推測される。上顎の裂肉歯（第４小臼歯）は頬側の近遠心径が23.5ミリと非常に大きい。この値は、江戸から明治時代にかけてのニホンオオカミのこの歯の大きさ（20ミリ～22.7ミリ）よりも大きく、縄文時代の鳥浜貝塚のオオカミ（23.4ミリ）とほぼ同じ大きさである。また、下顎の裂肉歯（第１大臼歯）も、近遠心径は27.3ミリでやはり江戸から明治時代にかけてのニホンオオカミ（24.7～26.4ミリ）よりもかなり大きく、葛生や高知県の佐川オオカミのような更新世のオオカミほどではないが、ニホンオオカミの中でももっとも大きなものの一つである。性別は不明であるが、下顎の犬歯の大きさなどから判断してオスの可能性が高い。

縄文時代にはかなり大きなオオカミが、この坂城地方に生息していたことは興味深い。長野県内では、縄文時代には北相木村の栃原岩陰遺跡から、また、更埴市森将軍塚古墳付近の集落（弥生時代から古墳時代）からもオオカミが出土している。



写真上：１号トレンチ３号獣骨集中区出土オオカミ左下顎骨
下：同右下顎骨

表5　荒井猫田遺跡出土のオオカミの上顎歯と比較資料（単位は㎜）

		縄文時代	室町—戦国	更新世						縄文時代		江戸～明治時代オオカミ								現生オオカミ	
		保地遺跡	荒井猫田	竜生大叶	葛生	佐川洞窟				前期	後期	高知県	愛野市	愛野市	愛野市	清川村	岸本市	足柄	和歌山大資料	朝鮮ヌクテ	シベリア狼
										鳥浜貝塚	長野県原村		礼拝	水無川中流	三重	金畑	近傍	大野山	十津川村		
		右	茂原他	茂原, 1987	産良, 1965	茂原,1987				茂原他, 2000	安部, 2001			安部, 2001					宮本他, 1983	茂原, 1987	茂原
		不明	♂								不明		♂	♂	♂	♂	不明	不明	不明	不明	♂
1	第一切歯近遠心径	6.7	—	7.0		6.1														6.1	
2	頬舌径	6.8	6.7	7.5		6.2														6.2	
3	第二切歯近遠心径	7.7	—	7.9		7.1														6.5	
4	頬舌径	8.2	8.1	8.5		7.1														6.5	
5	第三切歯近遠心径	10.2	9.2	10.4		7.9		9.3												7.5	9.2
6	頬舌径	9.4	7.9	7.8		7.1		7.7												6.0	7.2
7	犬歯近遠心径	—	—			11.7	12.8												13.4	11.6	15.4
8	頬舌径	—	8.6			7.3	8.0												8.4	6.3	9.6
9	第一小臼歯近遠心径	—	7.0																	6.8	7.9
10	頬舌径	—	4.5																	4.4	5.1
11	第二小臼歯近遠心径	—	12.3	10.1		13.2	13.0													11.8	14.7
12	頬舌径	—	6.0	5.1		5.7	5.8													4.9	6.2
13	第三小臼歯近遠心径	14.6	13.4	15.1	16.9	15.0		15.7	15.1											13.2	16.6
14	頬舌径	7.0	7.2	6.7	7.6	6.2		7.4	6.2											5.3	6.6
15	第四小臼歯最大長	23.5	22.6		27.7	25.4	25.4	26.4		23.2										22.7	27.3
16	外側長（近遠心径）	23.2	22.7		26.2	25.0	25.1	24.8		23.4	18.1	22.66	21.2	20.2	20.4	20.0	22.2	20.6	21.0	22.2	26.9
17	頬舌径	12.0	12.0		14.9	13.6	13.5	15.0		11.8										11.2	14.0
18	第一大臼歯近遠心径	16.1	15.2		15.0	15.7	14.0	16.9		15.7	13.2	15.92	14.9	14.3	14.7	—	13.8	—	15.6	15.5	16.3
19	最大頬舌径	21.1	20.3		21.7	20.5	18.0	21.6		20.1									20.8	19.4	23.1
20	頬舌径	18.9	18.6		19.4	17.8	16.1	19.8		18.8										17.4	21.5
21	第二大臼歯近遠心径	8.9	8.6	9.0			7.7	9.1		8.7										8.0	8.6
22	頬舌径	13.1	13.0	13.3			12.0	14.3		13.4										12.7	14.3

表6　荒井猫田遺跡出土の中世オオカミ下顎歯の計測値と比較資料（単位はmm）

	縄文時代		室町―戦国	更新世						縄文時代		江戸―明治時代オオカミ				現生オオカミ	
	伊地遺跡		荒井猫田	葛生	佐川洞窟					門前貝塚	杉田貝塚	秦野市	秦野市	秦野市	和歌山大標本	朝鮮ヌクチ	シベリア狼
					No.2	No.3	No.4	No.5	遊離歯	札幌	水無川中流	光脇部落	十津川村			東大長谷部資料	国立医大標本
	右	左		直良,1965	茂原,1987					茂原,1987		安部,2001			宮本他,1983	茂原,1987	茂原
	不明		♂	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	♂	♂	♂	♀	不明	♂
1	第一切歯近遠心径	3.6		4.1			4.0									3.7	
2	頬舌径	5.03		5.5			5.5									4.4	
3	第二切歯近遠心径	6.01		5.6			5.5									5.4	
4	頬舌径	6.37		6.8			6.4									5.5	
5	第三切歯近遠心径	7.49	7.39	7.3			7.4									5.8	6.3
6	頬舌径	6.96	6.93	6.9	7.5		7.6									5.6	7.2
7	犬歯近遠心径			13.6	15.1	14.2	13.7								13.8	12.0	15.4
8	頬舌径			9.2	9.4	9.2	8.8		9.7						10.1	6.4	10.4
9	第一小臼歯近遠心径	4.9	4.87	5.3	5.8	6.2	5.6	6.0								5.8	5.8
10	頬舌径	4.02	3.93	4.7	4.7	4.5	4.0	4.4								3.8	4.3
11	第二小臼歯近遠心径	11.45	11.15	9.9	13.2	10.9	11.6	11.6								11.1	12.8
12	頬舌径	5.75	5.90	6.2	6.1	6.5	6.0	5.8								5.0	6.1
13	第三小臼歯近遠心径	12.69	12.90	11.7	14.4	13.2	13.4	13.3		11.6						12.1	14.5
14	頬舌径	6.50	6.69	6.5	6.7	6.7	6.3	6.6		5.8						5.1	6.7
15	第四小臼歯近遠心径	15.07	15.12	13.4	16.8		15.8	15.4		12.7			12.8	12.8		13.2	16.7
16	頬舌径	7.36	7.54	7.7	8.2	8.2	7.8	7.9		6.5						6.3	8.0
17	第一大臼歯最大長	27.29	27.40	25.1	29.6		27.5	26.8		24.8	26.4	26.4	24.7	24.9	26.0	23.9	29.3
18	近心部頬舌径	10.87	10.79	10.5	11.3		10.5	10.6	11.6	9.5	10.0				10.1	9.6	11.3
19	遠心部頬舌径	10.03	9.87	10.3	10.4	11.3	9.7	10.3		9.3	9.5					8.8	11.5
20	第二大臼歯近遠心径	10.85	10.72	9.4	12.2	11.3	11.4	9.9		9.1	9.4					10.5	12.6
21	頬舌径	8.32	8.01	8.0	9.0	9.3	9.4	8.1		7.7	7.3					7.9	9.6
22	第三大臼歯近遠心径	5.41		6.4	5.2		4.8	5.3								5.7	5.5
23	頬舌径	4.94		5.4	5.0		4.9	5.0								5.0	4.4

第Ⅷ章　総括

今回の発掘調査では調査期間が十分に確保できなかった上、遺構の切り合いが激しかったこともあって、遺構の把握が困難な調査となった。しかしながら、坂城町の縄文時代後・晩期及び、古墳時代～平安時代の遺跡の状況を知る上での重要な資料を数多く得られたことは大きな成果といえよう。個々の詳細については第Ⅳ章に報告したとおりであるが、下記にその概要を述べ総括としたい。

第１節　縄文時代後期・晩期の遺構、遺物について

１　遺構

本遺跡から検出された縄文時代後・晩期の遺構、遺物において特筆されるのは、複数個体分の人骨を伴う墓址や、埋甕址といった遺構である。このような遺構が確認されたのは町内初であり、６号墓址のような埋葬のあり方は、同時期で人骨の出土した遺跡が近隣市町村でも少ない状況の中で、極めて特異な例といえよう。

469基の墓坑が出土し、多数の人骨が出土した明科町の北村遺跡（長野県埋蔵文化財センター　1993）は縄文人骨や墓址のあり方を解明する上では、欠かすことのできない遺跡となっている。当遺跡の墓址や人骨などに関する問題点は多岐にわたり、非常に複雑な状況を呈しているため、ここでは、北村遺跡の状況と比較しつつ、出土した墓址に係る問題点や課題を提示することにとどめておき、それらの分析によって解明できる保地遺跡の集落構造等については今後に委ねたい。

１号トレンチの１・２・６号墓址は、出土遺物から縄文時代後期、堀之内２式並行期に属する遺構であることが判明した。ここからは遺存状態の良好な人骨が少なくとも17個体分、特殊な埋葬状態で検出されたことは先に触れたとおりである。そのなかで、６号墓址では、①Ａ・Ｂ人骨　②Ｎ人骨　③Ｃ～Ｍ人骨・四肢骨と、埋葬順序についての概要は概ね把握することができた。このＡ～Ｍ人骨のうち、性別が判定できたものは男性３体、女性３体の計６体となっていて、年齢は15歳くらいから高齢のものまで幅広いという分析結果が得られている。四肢骨には３～４歳の幼児のものまで含まれており、老若男女を問わず埋葬されている状況が看取される。これらの中のＮ人骨、及びＣ～Ｍ人骨・四肢骨はバラバラの状態で出土しており、この状況から考慮して二次的な埋葬であったものと思われ、再葬されたものと考えるのが自然であろう。Ａ・Ｂ人骨とＣ～Ｎ人骨の詳細な関係は不明であるが、同一墓内に埋葬されたことを考えると、何らかの関係があることはまず間違いないと思われる。

抜歯については、第Ⅴ章で報告されているように、犬歯と小臼歯の抜歯は長野県内では初の例となった。また、15歳以下の個体でも抜歯が確認できたことは、この地域では抜歯が成人儀礼としてではなく、より若い段階で行われていたことを示す貴重な資料となる。また、犬歯と小臼歯を抜歯する形式は通常西日本領域に見られることから、埋葬された人々が、西日本の領域と何らかの関わりをもっていた可能性も考慮しなければならない問題である。しかしながら、出土遺物に目を向けて見ても、同時期の土器などには西日本の影響を受けたものは見られないことから、短絡的に西日本との関係を結論づけることはできず、より細かな分析が今後必要といえる。骨の個体間の関係も含め、今後解決していくべき課題は多い。

埋葬形態を見ると、北村遺跡では当遺跡６号墓址のような伸展葬されたＡ・Ｂ人骨をほとんど破壊するこ

となく、C～N人骨を再葬するような埋葬状態を示す墓坑は見られない。しかし、北村遺跡の墓坑の中には、墓の存在を不特定の人に認知させる墓標のような機能を有すると思われる「上面配石」と呼ばれる墓坑が存在している。保地遺跡でのあり方を見ると、1号墓址の敷石が6号墓址の上面にあたるため、1号墓址の人骨が埋葬される以前より、6号墓址の上面配石として機能していたことも十分考えられる。発掘調査では、出土状況等から1号墓址と6号墓址の関係を判断する材料は乏しい。同様にして6号墓址の一部を切って構築されている2号墓址との関係についても、意図的に6号墓址に隣接して構築した可能性を指摘することはできるが、6号墓址の存在を認識せず偶然構築した可能性も残る。今後の課題である。

また、先述の北村遺跡では、墓坑の埋土に焼骨片や炭化粒が混在している例があるが、本遺跡の1・2・6号墓址と4号墓址でも、人骨のほかに、焼けた獣骨片や炭化粒が少量ながら出土していることは注目される。このことは、北村遺跡の発掘調査報告書でも検討されていた、葬送に獣骨の加熱・粉砕・散布を伴う儀礼が、保地遺跡でも行われていた可能性があることを示唆しているといえよう。

以上のように北村遺跡との比較を中心に問題点や課題を挙げてきたが、抜歯の状況や食性のあり方などでは大きな違いが見られることから、北村遺跡との交流は少なかったといえる。しかし、墓坑のなかに焼けた獣骨片や炭化粒を含む点など共通している点もあり、このことが北村遺跡との交流を物語っていると仮定するならば、他地域との交流関係の複雑さが浮かび上がってきたといえるかもしれない。今後の類例の増加に期待したいところである。

本来なら空間的な視点から、保地遺跡の集落構造及び墓域構造等を解明したかったところではあるが、今回の発掘調査は調査面積が小さく、古代に所属する遺構との切り合いが激しかったこともあって、居住域や墓域などの配置が把握できなかったことから、空間的な関係は不明となっている。今後この周辺で発掘調査が実施され資料の蓄積が図られるならば、そのような問題も解明されてくるものと思われる。今後に委ねたい。

2　遺物

縄文時代の土器・石器は、遺構に伴うものが少なかったため、ほとんどが調査区一括資料となっている。しかし、小破片が多いものの出土量は多く、これらは、今回の調査区の概要を把握する十分な資料となり得るといえる。前回の昭和40年に実施された調査では、晩期初頭の土器が多く出土し、該期の編年のなかに「保地段階」が設定されるなど、晩期初頭の遺跡という認識が強かったといえる。しかし、今回の調査において、縄文土器の中で最も多く出土したのは、晩期後半の浮線文期の土器であって、保地遺跡に対する認識を改めざるを得ない結果となった。今回の発掘調査では、明確に浮線文期に位置付けられる遺構は検出されていないが、それらの遺構は、土器の出土状況が古代の遺構覆土中に多く見られたこともあり、古代の遺構に全て破壊されてしまった結果と思われた。そのため、遺構自体は確認できなかったが、この地に浮線文期の集落が存在していた可能性は高いといえよう。また、第Ⅳ章第2節でも触れたように、2号トレンチ内から検出された1号埋甕址の一括遺物は、晩期中頃の土器編年を検討する上での良好な資料になり得る。

石器については、紙幅の都合もあり、十分な検討を行うことができなかったが、本遺跡から出土した多くの黒曜石は、当然搬入されているわけであるが、その数は原石、石核など約5000点認められる。これらの入手ルートを初めとして、当遺跡内での石器製作のあり方など、今後検討すべき課題は多い。また、精神的な石器である第二の道具の類が他遺跡に比べ少ない傾向が看取されることも課題となる。

以上、問題点や課題を列挙してきたが、多くの課題が今後に残された。今後の資料の蓄積を待ちつつ、出

土資料のより詳細な分析を進めていきたい。

第2節　古墳時代～平安時代の遺構・遺物について

古墳時代～平安時代の遺構・遺物では、住居址が14軒検出され、複合集落の存在が確認できた。この時期の集落遺跡の調査例では、中之条地区の中之条遺跡群寺浦・上町・宮上・北川原遺跡や南条地区の東裏・青木下遺跡などで確認されているが、保地遺跡周辺では、町横尾遺跡で集落が確認されているものの、調査例が少なく不明な状況であったといえ、今回の調査でこの地域の集落の様子を解明する手がかりを得ることができた意義は高いといえる。

住居址や掘立柱建物址柱などの遺構個々の状況については、調査区が狭かった上、重複関係が激しかったため、壁面や床面の破壊が著しいものが多く、詳細がつかめなかったものが多い。しかしその中で、H4号住居址は、特筆すべき点が多い。カマドからは、当遺跡では初めての出土であるが、土師質の円筒形土製品がカマドの芯材として用いられた状態で、多くの遺物と共に良好な遺存状態で検出された。当時のカマドの状況を知る上での重要な資料が得られたことになった。また、豊富な土師器や須恵器などの土器のほかに、鍍銀製の耳環が見られたことは今後の集落構造を解明する手がかりとなる。それ以外には、D1号土坑址からは円面硯が出土し、町内でも2例目の貴重な資料が得られたことになった。これらのことより本遺跡が古墳時代～平安時代の集落址としても注目される結果が得られたことは当初の調査目的を果たせた結果と思われる。

引用・参考文献（五十音順、前出のものを除く）

小杉　康　1995「縄文時代後半期における大規模配石記念物の成立　――「葬墓祭制」の構造と機能――」『歴台史学』93

重久淳一　1985『雷文土器の研究』『古代探叢』早稲山大学出版部

高橋　桂　1982『宮中遺跡』『長野県史考古資料編（主要遺跡北・東信）』

中沢遺彦　1991『長野県の概要』『東日本における稲作の受容』東日本埋蔵文化財研究会

中条村教育委員会　1993『宮遺跡』

長野市教育委員会　1988『宮崎遺跡』

永峰光一　1967『佐野』長野県考古学会

野沢温泉村教育委員会　1985『岡ノ峯』

林　茂樹　1983『野口遺跡』『長野県史考古資料編（主要遺跡南信）』

樋口昇一　1983『大明神遺跡』『長野県史考古資料編（主要遺跡中信）』

丸子町教育委員会　1979『深町』

宮下健司　1997「中部地方の縄文時代墓地」『考古学ジャーナル』422

向坊鋼二　1961「長野県中ノ沢出土の土器と土製耳飾り」『第四紀研究』2-1　第四紀研究会

百瀬長秀　1999a「中ノ沢式土器の再検討」『長野県考古学会誌』89　長野県考古学会

1999b「雁山遺跡羽状沈線文土器の編年観」『長野県考古学会誌』90　長野県考古学会

2002予定「唐渭縄文系突起と「つ」の字文系突起」『長野県埋蔵文化財センター紀要』9　長野県埋蔵文化財センター

表7　出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量(cm)	残存度	調整	胎土	備考
35-1	H1住	須恵器	坏	〈11.6〉 3.6 7	口縁～底部1/2	外面・内面：ロクロヨコナデ 外面底部：回転糸切り	外面・内面・断面：10Y5/1 灰色土。	
2		須恵器	坏	－ － 〈5.3〉	底部1/2	外面・内面：ロクロヨコナデ 外面底部：回転糸切り	外面・内面・断面：10Y6/1 灰色土。砂粒を含みやや粗い。	
3		須恵器	坏	－ － 4.5	底部完形	外面・内面：ロクロヨコナデ 外面底部：回転糸切り	外面・内面・断面：10Y6/1 灰色土。	
4		須恵器	坏	－ － 6.2	底部完形	外面・内面：ロクロヨコナデ 外面底部：回転糸切り	外面・内面・断面：10Y6/1 灰色土。	
5		須恵器	坏	－ － 〈6.4〉	底部1/3	外面・内面：ロクロヨコナデ 外面底部：回転糸切り	外面・内面・断面：10Y6/1 灰色土。	外面に付着物あり。
6		須恵器	坏	－ － 〈5.4〉	底部1/2	外面・内面：ロクロヨコナデ 外面底部：回転糸切り	外面・内面・断面：10Y7/1 灰白色土。	
7		須恵器	坏	－ － 〈5.8〉	底部1/4	外面・内面：ロクロヨコナデ 外面底部：回転糸切り	外面・内面・断面：7.5GY6/1 緑灰色土。	
8		土師器	坏	〈14.6〉 3.6 〈6.5〉	口縁～底部1/2	外面：ロクロヨコナデ→ナデ 外面底部：回転糸切り 内面：黒色処理、ヘラミガキ	外面・断面：7.5YR5/3 にぶい褐色土。雲母・石英粒を含む。	
9		土師器	坏	〈13.2〉 3.5 〈5.2〉	口縁～底部1/8	外面：ロクロヨコナデ 外面底部：回転糸切り 内面：ヘラミガキ	外面・断面：10YR5/4 にぶい黄褐色土。 内面：10YR5/6 黄褐色土。	胎土に雲母・石英粒をやや含む。
10		土師器	坏？	－ － 〈6.4〉	底部ほぼ完形	外面：ロクロヨコナデ 外面底部：回転糸切り 内面：黒色処理？	外面・断面：10YR7/4 にぶい黄橙色土。　雲母・石英粒を多量に含む。	
11		土師器	甕	－ － 〈6.2〉	底部1/8	外面：ヘラケズリ 内面：黒色処理、ヘラミガキ？	外面・断面：10YR6/3 にぶい黄橙色土。	
12		土師器	甕？	－ － 〈7.0〉	胴～底部1/8	外面：ヘラミガキ 内面：黒色処理、ヘラミガキ	外面・断面：10YR6/6明黄褐色土。	
13		土師器	高坏	－ － 〈12.0〉	脚部1/4	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	外面・内面：10YR6/4 にぶい黄橙色土。 断面：10YR5/1　褐灰色土。	混入遺物か。
14		土師器	甕	－ － 〈8.4〉	胴～底部1/4	外面・内面：ヘラナデ 底部外面に木葉痕	外面・断面：10YR5/4 にぶい黄褐色土。 内面・断面：10YR1/3 黒褐色土。	胎土に雲母・石英粒多量に含む。
15		土師器	甕	－ － 〈5.0〉	底部完形	外面・内面：ヘラナデ	外面：10YR4/1　褐灰色土。 内面・断面：10YR5/2灰黄褐色土。	雲母・石英粒子を含む。
16		土師器	甕	－ － 〈5.4〉	底部1/6	外面：磨耗により不明 内面：ヘラナデ	外面・断面：10YR4/2 灰黄褐色土。 内面：10YR5/4　にぶい黄褐色土。	
17		土師器	甕	－ － 〈9.4〉	底部1/4	外面・内面：ヘラナデ（ミガキに近い）	外面・断面：2.5Y6/4 にぶい黄色土。 内面:2.5Y6/3　にぶい黄色土。	
18		土師器	甕	－ － 〈6.4〉	胴～底部1/3	外面・内面：ヘラナデ	外面・断面:10YR5/4 にぶい黄褐色土。 内面：10YR4/2灰黄褐色土。	
19		土師器	甕	－ － 〈5.2〉	底部1/2	外面：ヘラナデ 内面：ヘラナデ？	外面・断面：10YR5/3 にぶい黄褐色土。 内面：10YR6/3　にぶい黄橙色土。	外面に黒斑あり。
20		土師器	甕	－ － 〈5.8〉	底部1/3	外面：ヘラナデ 内面：ナデ？	外面・断面：10YR5/4 にぶい黄褐色土。 内面：10YR6/4にぶい黄橙色土。	雲母・石英粒子を多量に含む。
21		土師器	甕	－ － 〈8.0〉	底部完形	外面：ヘラケズリ 底部外面：回転糸切り 内面：ロクロヨコナデ	外面：7.5YR4/3 褐色土。 内面・断面：7.5YR5/3 にぶい褐色土。	
22		土師器	甕	－ － 〈9.6〉	底部1/6	外面：横位ヘラナデ 内面：ヘラナデ	外面・内面・断面：10YR6/4 にぶい黄橙色土。	
23		土師器	甕	－ － 〈9.4〉	底部1/6	外面・内面：ナデ 底部外面：木葉痕・工具痕あり	外面・内面：10YR5/6 明黄褐色土。断面：10YR4/2 灰黄褐色土。雲母・石英粒を多量に含む。	外面に黒斑あり。
24		土師器	甕	〈18.0〉 － －	口縁部1/4	外面：口縁端～頸部　ヨコナデ 　　　胴部ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	外面：10YR5/3　にぶい黄褐色土。 内面・断面：7.5YR4/2 灰褐色土。	
25		須恵器	突帯付四耳壺	－ － －	頸～胴部1/5	外面：タタキ→突帯貼り付け	外面・内面：10GY5/1　緑灰色土。 断面：10Y6/2オリーブ灰色土。	
26		須恵器	甕	－ － 〈12.8〉	胴～底部1/4	外面・内面：ナデ	外面：N4/0　灰色土。内面・断面：10GY5/1緑灰色土。	
27		須恵器	突帯付四耳壺？	－ － 15.4	胴～底部1/5	外面：タタキ 内面：ナデ	外面・内面・断面：10GY5/1 緑灰色土。	
36-1		土師器	甕	〈22.0〉 〈28.9〉 〈4.8〉	口縁～底部1/2	外面：口縁～胴部上半　ロクロヨコナデ 　　　胴部　縦位ヘラケズリ 内面：ナデ	外面・断面:10YR4/3 にぶい黄褐色土。 内面：10YR4/4褐色土。	
2		土師器	甕	〈19.8〉 － －	口縁～胴部2/3	外面：口縁～頸部　ヨコナデ 　　　胴部ヘラケズリ 内面：ヨコナデ　頸部のみヘラナデ	外面・内面・断面：10YR5/4 にぶい黄褐色土。	
3		土師器	鍋	31 － －	口縁～胴部1/3	外面：口縁～胴部上位　ロクロヨコナデ 　　　胴部中位以下　ヘラケズリ 内面：ナデ	外面:10BG3/1 暗青灰色土。 内面・断面：2.5GY3/1暗オリーブ灰色土。	

表8　出土土器観察表

番　号	遺構名	種　別	器　形	法量(cm)	残存度	調　整	胎　土	備　考
36-4	H 1住	土師器	鉢？	(42.4) — —		外面：口縁～胴部上位　ロクロヨコナデ 胴部中位以下　ヘラケズリ 内面：口縁～胴部 ヨコナデ　胴部 ハケ調整	外面・内面・断面：2.5Y6/4 にぶい黄色。	
41-1	H 4住	土師器	坏	14.1 4.6 3.6	口縁～胴部2/3	外面：口縁端部～体部　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ 内面：内面黒色処理　ヘラミガキ	外面・断面：10YR7/4 にぶい黄 橙色上。雲母粒を多く含む。	
2		土師器	坏	13.3 4.8 5.5	ほぼ完形	外面：口縁端部ヨコナデ 体部～底部　ヘラケズリ 内面：黒色処理　ヘラミガキ	外面：10YR7/4 にぶい黄橙色 上。雲母・石英粒を含む。	
3		土師器	坏	14.4 6.7 5	口縁～底部1/2	外面：口縁端部　ヨコナデ 体部～底部　ヘラケズリ 内面：黒色処理　ヘラミガキ	外面・断面：10YR7/4 にぶい黄 橙色上。雲母・石英粒を若干含 む。	
4		土師器	坏	(13.8) 7.1 2.5	口縁～胴部1/3	外面：口縁端部　ヨコナデ 体部～底部　ヘラケズリ 内面：黒色処理　ヘラミガキ	外面・断面：10YR6/4 にぶい黄 橙色十。	
5		土師器	高坏(坏部)	16.5 5 —	坏部 口縁～底部4/5	外面：口縁端部　ヨコナデ 体部～底部　ヘラミガキ 内面：黒色処理　ヘラミガキ	外面・断面：10YR7/4 にぶい黄 橙色上。雲母粒を多く含む。	
6		土師器	高坏(脚部)	— — 13.2	脚部完形 坏部底部～一部	脚部外面：内面ナデ 竹管状工具による工具痕あり 坏部内面：黒色処理	脚部外面・内面・断面：10YR7/6 明黄褐色上。雲母・石英粒を含 む。	
7		土師質	支脚	(4.6) 11.3 5.5	ほぼ完形	外面：ナデ	外面：10YR6/3 にぶい黄橙色 十。	雲母・石英粒、砂礫 を多量に含む。
8		土師器	甕	— — 7.6	完形	外面・内面：ヘラナデ	外面・断面：10YR6/6明黄褐色 上。内面:10YR6/3にぶい黄橙 色十。	雲母・石英粒を多量 に含む。
9		土師器	甕	12.9 14.5 7.5	完形	外面・内面：摘耗により不明	外面・内面・断面：10YR5/4 にぶい黄褐色上。雲母・石英 粒子等多量に含み、粗い。	内面スス付着。
10		土師器	甕	(17.0) 29.5 7	口縁～底部2/3	外面：口縁部　ヨコナデ 胴部　タテハケ 内面：ナデ	外面・内面・断面：10YR5/4 にぶい黄橙色十。雲母・石英粒 を多量に含む。	
11		土師器	甕	16.3 28 6.6	口縁～底部2/3	外面：口縁部　ヨコナデ 胴部　タテハケ 内面：ナデ	外面・内面・断面：10YR5/6 黄橙色上。雲母・石英粒を多量 に含む。	外面スス付着。
12		土師器	甕	— 32.3 8	胴～底部3/4	外面：胴部　タテハケ 内面：ナデ	外面・内面・断面：7.5YR4/3 褐色上。雲母・石英粒を多量に 含む。	
13		土製品	内面形土製品	9.6 55.4 9.6	ほぼ完形	外面：タテハケ 内面：一部ナデ	外面・内面・断面：10YR5/4 にぶい黄褐色十。雲母・石英粒 を多量に含む。	
43-1	H 5住	須恵器	坏	— — —	口縁～体部1/4	外面・内面：ロクロヨコナデ	外面：10Y6/1　灰色土。内面・ 断 面：N4/0 灰 色 上。φ3～ 5mmの砂粒を含む。	焼成やや不良。
2		須恵器	坏	— — 6	底部完形	外面・内面：ロクロヨコナデ 底部外面：回転糸切り	外面・内面・断面：5GY6/1 オリーブ灰色上。	焼成やや不良。
3		須恵器	坏	— — 5.6	底部完形	外面・内面：ロクロヨコナデ 底部外面：回転糸切り	外面・内面・断面：7.5GY6/1 緑灰色十。	焼成やや不良。
4		須恵器	坏	— — (5.0)	体～底部2/3	外面・内面：ロクロヨコナデ 底部外面：回転糸切り	外面・内面・断面：10GY5/1 緑灰色上。	
5		須恵器	坏	13.9 3.9 6	ほぼ完形	外面：内面：ロクロヨコナデ 底部外面：回転糸切り	外面・内面・断面：10Y7/1 灰白色上。雲母・石英粒、 その他鉱物粒を含む。	焼成やや不良。
6		土師器	坏	(12.8) 4 (6.0)	口縁～底部1/2	外面：ロクロヨコナデ 底部外面：回転ヘラケズリ 内面：黒色処理、ヘラミガキ	外面・断面：10YR5/6 明黄褐色 十。雲母・石英粒他鉱物粒を多 量に含む。	
7		土師器	坏	13.6 4.5 6	口縁～底部1/4	外面：ロクロヨコナデ 底部外面：手持ちヘラケズリ 内面：黒色処理、ヘラミガキ	外面・断面：10YR5/4 にぶい黄 橙色上。雲母・石英粒を多量 に含む。	
8		土師器	坏	— — (6.6)	体～底部1/2	外面：ロクロヨコナデ 底部外面：糸切り 内面：黒色処理、ヘラミガキ	外面・断面:2.5Y7/4 浅黄色十。	
9		土師器	坏	— — (6.6)	底部1/6	外面：ロクロヨコナデ 底部外面：糸切り 内面：黒色処理	外面・断面:10YR5/4 にぶい黄 褐色上。	
10		土師器	甕	— — (10.0)	底部1/4	外面：ヘラナデ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	外面・内面・断面：10YR6/4 にぶい黄橙色上。雲母・石英粒 を含む。	
11		土師器	甕	— — (10.0)	底部1/3	外面：ヘラナデ 内面：ナデ	外面・内面・断面：10YR6/3 にぶい黄橙色十。	
45-1	H 6住	須恵器	坏	— — (7.6)	底部1/2	外面・内面：ロクロヨコナデ 底部外面：回転ヘラ切り	外面：5B4/1 暗青灰色上。 内面・断面：5G4/1暗緑灰色上。	
2		須恵器	高台付坏	— — (10.6)	体～底部1/5	外面：ロクロヨコナデ 底部外面：回転ヘラケズリ→高台貼り付け、 ヘラ状工具による条痕が放射状に残る。	外面:10Y5/2　オリーブ灰色。 内面：10Y6/1 灰色十。断面:N 4/0 灰色上。	
3		須恵器	高台付坏	— — (11.6)	底部1/4	外面・内面：ロクロヨコナデ 底部外面：回転ヘラケズリ→高台貼り付け	外面・内面:10Y6/1 灰色土。 断面:N5/0灰色上。	
4		土師器	坏	(12.8) — —	口縁～体部1/2	外面：ヘラミガキ 内面：黒色処理、ヘラミガキ	外面・内面：10YR7/2 にぶい黄 橙色上。	
5		土師器	坏	(10.4) (4.1) —	口縁～体部1/5	外面：ヘラナデ 内面：黒色処理、ヘラミガキ	外面・断面：10YR7/2 にぶい黄 橙色上。	

表9　出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量(cm)	残存度	調整	胎土	備考
45-6	H6住	土師器	坏	〈13.6〉 — —	口縁～体部1/2	外面：口縁部　ヨコナデ 　　　胴部　ヘラナデ 内面：ナデ	外面・断面:5G4/1 暗緑灰色土。内面：7.5GY5/1 緑灰色土。	焼成やや不良。
7		土師器	坏	〈12.0〉 — —	口縁～底部1/3	外面・内面：磨耗により不明	外面・内面・断面：10YR6/6 明黄褐色土。	焼成やや不良。
8		土師器	鉢	— — —	底部完形	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラナデ	外面・内面・断面：2.5Y7/4 浅黄色土。雲母・石英以外の鉱物粒をやや含む。	
9		土師器	甕	— — 〈8.2〉	底部1/4	外面・内面：ナデ 底部外面に木葉痕	外面：10YR5/4　にぶい黄褐色土。内面・断面：10YR4/2灰黄褐色土。	雲母粒を多量に含む。
10		土師器	甕	— — 〈7.2〉	底部1/4	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	外面・断面：10YR5/2 灰黄褐色土。内面：褐灰色土。	雲母・石英以外の鉱物粒を多量に含む。
11		土師器	甕	— — 〈7.4〉	底部1/2	外面・内面：ナデ	外面・断面：10YR7/3 にぶい黄橙色土。内面：10YR4/2 灰黄褐色土。	石英粒多量に含む。
12		土師器	甕？	— — 〈5.0〉	底部2/3	外面：ナデ 内面：不明	外面・内面：10YR6/6明 黄褐色土。断面:10YR4/1 褐灰色土。	
13		土師器	甕	— — 〈4.8〉	底部1/4	外面：ナデ 内面：ヘラナデ	外面・断面10YR5/3 にぶい黄褐色土。内面:5G4/1　暗緑灰色土。	
14		土師器	甕	— — 〈4.8〉	底部1/3	外面：ヘラケズリ 内面：ヘラナデ	外面・断面：10YR5/3 にぶい黄褐色土。	
49-1	H8住	須恵器	坏	〈13.0〉 4.2 〈5.0〉	口縁～底部1/6	外面・内面：ロクロヨコナデ 底部外面：回転糸切り	外面・内面・断面：2.5GY5/1 オリーブ灰色土。	生焼け部分あり。
2		須恵器	坏	〈13.4〉 3.3 〈7.4〉	口縁～底部1/3	外面・内面：ロクロヨコナデ 底部外面：回転糸切り	外面・内面・断面：5G5/1 緑灰色土。	内面スス？付着。
3		須恵器	坏	〈12.4〉 3.8 〈5.2〉	口縁～底部1/6	外面・内面：ロクロヨコナデ 底部外面：回転糸切り	外面・内面・断面：2.5GY6/1 オリーブ灰色土。	
4		土師器	？	— — 〈6.0〉	底部1/2	外面・内面：ロクロヨコナデ 内面：黒色処理	外面・断面:10YR7/6 明黄褐色土。雲母粒、その他鉱物粒を含む。	
5		土師器	？	— — 〈7.0〉	底部完形 高台部欠損	外面：ロクロヨコナデ 底部外面：回転ヘラケズリ 内面：ロクロヨコナデ、黒色処理	外面・断面:10YR6/1 褐灰色土。鉱物粒を含む。	
6		土師器	坏	〈17.6〉 7.0 〈8.0〉	口縁～底部1/3	外面：口縁～体部　ロクロヨコナデ 　　　腰部　ヘラケズリ 内面：黒色処理、ヘラミガキ	外面・断面：10YR7/3 にぶい黄橙色土。鉱物粒を多量に含む。	
7		土師器？	甕	— — 6.4	底部2/3	外面・内面：ナデ	外面・内面・断面：10YR5/2 灰黄褐色土。石英粒をやや多く含む。粗い。	混入遺物(縄文)か？
8		土師器？	甕	— — 6.2	底部完形	外面：ヘラケズリ 内面ナデ	外面：7.5YR6/3 にぶい褐色土。内面・断面：10YR5/2褐灰色土。	石英粒、その他鉱物粒多量に含む。混入遺物（縄文）か？
9		土師器	甕	— — 〈5.6〉	胴～底部1/3	外面：ヘラケズリ 内面：ナデ	外面・内面・断面：10YR5/3 にぶい黄褐色土。雲母・石英粒を含む	
51-1	H9住	須恵器	坏	〈13.4〉 — —	口縁～底部1/4	外面：口縁～体部上半　ロクロヨコナデ 　　　体部中位以下　回転ヘラケズリ 内面：ロクロヨコナデ	外面・内面・断面：10GY5/1 緑灰色土。	
55-1	H12住	土師器	坏	〈12.0〉	口縁～底部1/2	外面：口縁部　ヨコナデ 　　　体部ヘラケズリ？ 内面：黒色処理、ヘラミガキ	外面・断面：10YR6/3 にぶい黄橙色土。雲母・石英粒を多量に含む。	
2		土師器	甕	〈18.2〉 35.4 7.5	口縁～底部1/2	外面：口縁部　ヨコナデ 　　　胴部　ヘラナデ 内面：ヘラナデ	外面・断面：10YR5/3　内面：10YR5/6 黄褐色土。雲母・石英粒を含む。	
57-1	H13住	土師器	坏	〈13.0〉 4.5 —	口縁～底部2/3	外面：口縁部　ヨコナデ 　　　体部　ヨコナデ 内面：黒色処理、ヘラミガキ	外面：2.5Y7/3 浅黄色土。内面・断面：10YR3/2 にぶい黄褐色土。	鉱物粒を含む。
2		土師器	鉢	〈20.8〉 9.8 6.0	口縁～底部2/3	外面：口縁部　ヨコナデ 　　　体部　ヘラケズリ 内面：黒色処理、ヘラミガキ	外面・断面：10YR6/4 にぶい黄橙色土。雲母・石英粒他鉱物粒を含む。	
3		土師器	高坏(脚部)	— — —	脚端部欠損	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ、黒色処理？	外面・断面：10YR7/3 にぶい黄橙色土。	
4		土師器	高坏	〈15.6〉 13.5 〈11.6〉	坏部1/2 脚部完形	外面：坏部 ヘラケズリ→ヘラミガキ　脚部ヘラミガキ　内面：坏部 黒色処理、ヘラミガキ？　脚部 ヘラミガキ、ナデ	外面：5Y7/4　浅黄色土。脚部内面・断面：10YR6/4 にぶい黄褐色土。	
5		土師器	坏	〈12.0〉 5.2 6.0	口縁～底部1/2	外面：口縁部　ヨコナデ 　　　体部　ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ	外面・内面・断面：10YR7/4 にぶい黄褐色土。	
6		土師器	小型甕	11.4 12.5 3.0	完形	外面：口縁～頸部　ヨコナデ　胴～底部ヘラケズリ　　内面:口縁～頸部 ヨコナデ　胴部 ヘラミガキ	外面・内面：10YR6/4 にぶい黄色土。鉱物粒を含む。	
7		土師器	甕	〈21.6〉 — —	口縁部1/2	外面：ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	外面・内面・断面：10YR7/3 にぶい黄橙色土。鉱物粒を多量に含み、粗い。	
8		土師器	甕	— — 8.0	頸～底部1/2	外面：頸部　ヨコナデ　以下ヘラナデ 内面：ナデ	外面：10YR5/4　にぶい黄褐色土。内面・断面：10YR6/3 にぶい黄橙色土。	雲母・石英粒多量に含む。
9		土師器	甕	22.4 35.7 7.1	ほぼ完形	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：10YR7/4　にぶい黄褐色土。内面・断面：10YR6/6 明黄褐色土。	雲母・石英粒多量に含む。

表10　出土土器観察表

番号	遺構名	種別	器形	法量(cm)	残存状	調整	胎土	備考
57-10	H13住	土師器	甕	21.0 39.0 (5.0)	口縁～胴4/5 底部1/4	外面：口縁～胴部 ヨコナデ 胴部 ヘラナデ ハケ調整 内面：口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラナデ	外面：7.5YR5/4 にぶい褐色土。内面・断面：7.5YR4/3 褐色十。	雲母・石英粒多量に含む。
11		土師器	甕	－ － 7.0	胴～底部1/2	外面：ヘラナデ 内面：ナデ	外面：10YR5/4 にぶい黄褐色土。内面・断面：10YR4/3 にぶい黄褐色土。	雲母・石英粒多量に含む。
65-1	D 1	須恵器	円面硯	－ － －	脚部欠損	外面・内面：ロクロヨコナデ	外面・内面・断面：10Y6/1 灰色十。	
70-1	D 5	須恵器	坏	13.4 3.8 7.3	ほぼ完形	外面・内面：ロクロヨコナデ 底部外面：回転ヘラ切り？ →ナデ	外面・内面・断面：2.5GY6/1 オリーブ灰色土。鉱物粒をやや含む。	焼成やや不良。
83-1	P61	須恵器	坏	13.0 3.9 4.7	口縁～底部2/3	外面・内面：ロクロヨコナデ 底部外面：回転糸切り	外面・内面・断面：7.5GY5/1 緑灰色土。鉱物粒を含む。	一部生焼け。
2	Tく6 グリッド 一括	須恵器	坏	(12.8) 3.4 (6.0)	口縁～底部1/2	外面・内面：ロクロヨコナデ 底部外面：回転糸切り	外面・断面：7.5GY5/1 緑灰色土。 内面：5GY6/1オリーブ灰色土。	
3	Tく6 グリッド 一括	須恵器	坏	－ － 5.0	体～底部2/3	外面・内面：ロクロヨコナデ 底部外面：回転糸切り	外面・内面・断面：10G4/1 暗緑灰色十。	
4	Tく6 グリッド 一括	須恵器	短頸壺？	－ － (7.4)	胴～底部1/4	外面・内面：ロクロヨコナデ 底部外面：回転糸切り	外面：7.5GY4/1 暗緑灰色十。 内面：2.5GY5/1 オリーブ灰色土。 断面：7.5GY5/1 緑灰色土。	
5	Tお7 グリッド 一括	土師器	坏	－ － (9.0)	体～底部1/4	外面：ロクロヨコナデ 底部外面：糸切り 内面：黒色処理、ヘラミガキ	外面・断面：10YR7/4 にぶい黄橙色土。 雲母・石英粒包蔵物粒を多量に含む。	
6	Oこ6 グリッド 一括	土師器	甕	－ － －	底部完形	外面：ナデ 内面：ヘラナデ 底部中央に1ヶ所焼孔	外面・内面・断面：10YR6/4 にぶい黄橙色土。	
7	Tあ6 グリッド 一括	須恵器	甕	(27.2) － －	口縁部1/4	外面・内面：ロクロヨコナデ	外面・内面・断面：10Y6/1 灰色十。鉱物粒をやや含む。	

表11　出土石器観察表

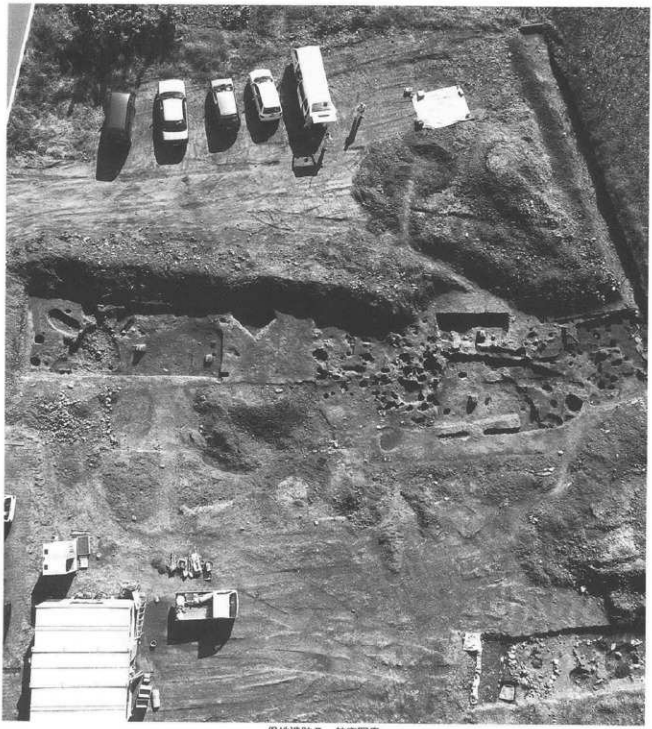
番号	出土位置	器種	材質	法量(cm、g)（ ）内の数値は残存値				備考
				長さ	幅	厚さ	重量	
32-1	H3住覆土	石鏃	頁岩	17	15	3	0.8	
2	1トレ4号墓址	石鏃	黒曜石	16	13	3	0.6	
3	Tえ4グリッド	石鏃	チャート	26	23	5	2.1	
4	2トレ一括	石鏃	チャート	23	14	4	1.1	
5	2トレ一括	石鏃	頁岩	27	15	4	1.4	
6	H4住覆土	石鏃	黒曜石	23	14	3	0.6	
7	Tお7グリッド	石鏃	黒曜石	33	16	3	1.1	
8	Tい4グリッド	石鏃	頁岩	40	9	4	1.6	
9	Tく7グリッド	石鏃	頁岩	(37)	24	7	(3.9)	機能部欠損。
10	1区一括	石匙	黒曜石	(34)	32	8	(7.0)	機能部一部欠損。
33-1	Oこ6グリッド	刃器	安山岩	44	32	12	16.9	
2	1トレ4号墓址周辺	横刃形石器	黒曜石	157	50	32	215.3	
3	P82	打製石斧	安山岩	93	51	18	70	
4	P27	磨製石斧	結晶片岩	104	55	24	213.7	
5	H1住覆土	磨石	安山岩	153	107	46	1160	付着物あり。
6	D 7	凹石	安山岩	119	80	46	582	
7	Tう6グリッド	石皿	安山岩	(273)	140	70	(4470)	一部欠損。
8	H4住	砥石	砂岩	(138)	(110)	13	(313)	一部欠損。
9	H5住	石棒	結晶片岩	(98)	(45)	28	(127.8)	一部欠損。
10	Tう10グリッド	用途不明石器	花崗岩	33	33	29	36.3	光沢著しい。

表12　出土石器観察表（写真図版）

番　号	出土位置	器　種	材　質	法量(mm, g)（ ）内の数値は残存値				備　考
				長さ	幅	厚さ	重量	
写真図版　13-1	Q 3号特殊遺構	石錐	頁岩	27	21	4	1.7	
-2	2トレ一括	石錐	黒曜石	19	15	2	0.6	
-3	1トレ一括	石鏃	黒曜石	20	18	3	0.7	
-4	1トレ一括	石錐	頁岩	19	11	3	0.5	
-5	T a 1グリッド	石錐	黒曜石	14	17	2	0.5	
-6	1トレ一括	石鏃	黒曜石	19	12	4	0.6	
-7	1トレ4号墓址	石錐	頁岩	19	14	4	1.0	
-8	T v 1グリッド	石鏃	黒曜石	23	9	4	0.7	
-9	D 7	石錐	頁岩	42	20	9	5.7	
-10	1区	石鏃	頁岩	32	14	3	1.2	
-11	1トレ一括	石鏃	頁岩	29	14	5	1.3	
-12	1トレ一括	石鏃	頁岩	25	12	3	0.7	
-13	T 2.5グリッド	石鏃	頁岩	23	14	4	0.8	
-14	T く 7グリッド	石鏃	頁岩	20	17	2	0.9	
-15	H 6住	石鏃	頁岩	36	27	5	2.0	
-16	T v 1グリッド	石鏃	黒曜石	24	12	4	0.6	
-17	2トレ一括	石鏃	黒曜石	18	11	3	0.3	
-18	2トレ一括	石鏃	頁岩	27	15	4	1.4	
-19	調査区一括	石鏃	黒曜石	16	15	3	0.6	
-20	調査区一括	石鏃	黒曜石	14	13	2	0.3	
写真図版　14-1	2トレ一括	石錐	頁岩	(40)	8	5	(2.0)	基部欠損。
-2	Q 3号特殊遺構	石錐	頁岩	(45)	8	3	(1.9)	基部欠損。
-3	T a 4グリッド	石錐	頁岩	(38)	8	4	(1.7)	基部欠損。
-4	1トレ一括	石錐	頁岩	(40)	7	3	(1.0)	基部欠損。
-5	D 7	石錐	頁岩	(31)	9	6	(1.5)	基部欠損。
-6	H 3住	石錐	頁岩	(31)	9	6	(1.6)	基部欠損。
-7	1トレ一括	石錐	頁岩	(29)	9	7	(1.6)	基部欠損。
-8	T v 1グリッド	石鏃	頁岩	(32)	9	4	(1.5)	基部欠損。
-9	T a 4グリッド	石鏃	頁岩	(29)	9	25	(1.2)	基部欠損。
-10	T 5 4グリッド	石錐	黒曜石	28	12	6	1.5	
-11	2トレ一括	石錐	頁岩	(45)	26	10	(9.0)	機能部欠損。
-12	1トレ一括	石錐	頁岩	(27)	23	6	(3.8)	機能部欠損。
-13	2トレ一括	石錐	頁岩	(32)	17	5	(2.2)	機能部欠損。
-14	H14住	石錐	頁岩	(32)	19	6	(2.6)	機能部欠損。
-15	H4住	石錐	頁岩	(32)	18	6	(2.6)	機能部欠損。
-16	2トレ一括	石錐	頁岩	(21)	14	6	(1.3)	機能部欠損。
-17	1トレ一括	石錐	黒曜石	(18)	17	4	(0.7)	機能部欠損。
-18	3トレ一括	石匙	頁岩	(54)	29	10	(11)	刃部一部欠損。
-19	3トレ一括	石匙	頁岩	70	38	15	34	
-20	T a 2グリッド	刃器	安山岩	61	58	18	71	
-21	H4住	刃器	頁岩	42	34	12	11.4	
-22	1トレ一括	刃器	頁岩	36	32	9	8.5	
-23	H4住	刃器	頁岩	39	29	7	7.4	
-24	O 5グリッド	刃器	頁岩	(37)	28	8	(6.8)	一部欠損。
-25	H13住	刃器	頁岩	38	32	10	11.8	
-26	H4住	刃器	頁岩	(32)	(27)	8	(4.3)	一部欠損。
-27	P8	刃器	頁岩	(36)	(24)	6	(4.2)	一部欠損。
-28	1トレ一括	刃器	頁岩	60	40	19	37.6	
-29	H4住	刃器	黒曜石	37	25	12	11.1	
-30	H4住	刃器	頁岩	54	23	10	11.3	

表13　出土石器観察表（写真図版）

番　号	出土位置	器　種	材　質	法量(cm, g)　（　）内の数値は残存値				備　考
				長さ	幅	厚さ	重量	
写真図版　15-1	T8J2グリッド	横刃形石器	頁岩	81	68	10	55	
-2	1区	横刃形石器	頁岩	90	53	10	61	
-3	H1住	打製石斧	粘板岩	112	53	19	113	
-4	P82	打製石斧	安山岩	93	51	18	70	
-5	Oこ1グリッド	打製石斧	安山岩？	95	51	24	113	
-6	Tか5・6グリッド	打製石斧	粘板岩？	92	50	14	95	
-7	Tい1グリッド	磨製石斧	透緑岩	106	55	22	195	
-8	I112・13住	磨製石斧	砂岩	(84)	49	28	(193)	一部欠損。
-9	D7	磨製石斧	蛇紋岩	(59)	(28)	5	(16)	刃部・部欠損。
-10	Tき6グリッド	磨製石斧	蛇紋岩	(57)	53	27	(96)	基部欠損。
-11	Tく7グリッド	磨製石斧	頁岩	71.5	17.5	4	7.8	
-12	Tう6グリッド	石刀	結晶片岩	(141)	35	24	(168)	一部欠損。
-13	Q3号特殊遺構	石刀	安山岩？	(80)	21	15	(38)	一部欠損。
-14	Tい10グリッド	用途不明石器	花崗岩？	35	35	34	51	光沢著しい。
-15	P68	用途不明石器	輝岩	55	60	14	85	表面研磨。
写真図版　16-1	Tき5グリッド	磨石	安山岩	117	110	47	844	敲打痕あり。
-2	Q3号特殊遺構	磨石	安山岩	105	92	83	1080	敲打痕あり。
-3	D7	磨石	安山岩	147	115	8	2550	
-4	P95	敲石	安山岩	74	64	54	305	
-5	H13住	敲石	安山岩	153	83	38	635	敲打痕あり。
-6	Tか2グリッド	凹石	輝岩	137	62	34	313	敲打痕あり。
-7	Oこ2グリッド	磨石	安山岩	145	57	54	607	敲打痕あり。
-8	Tお1グリッド	石皿	安山岩	(183)	(125)	74	(1420)	
-9	H8住	石皿	安山岩	(235)	(122)	53	(1800)	
-10	H1住	石皿	砂岩	(109)	99	27	(277)	
-11	H8住	石皿	安山岩	(167)	(143)	66	(1680)	
-12	D7	台石	安山岩	235	168	48	2060	

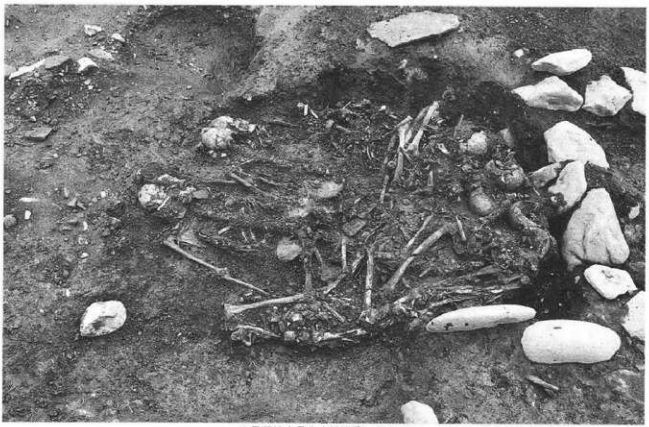


保地遺跡Ⅱ　航空写真

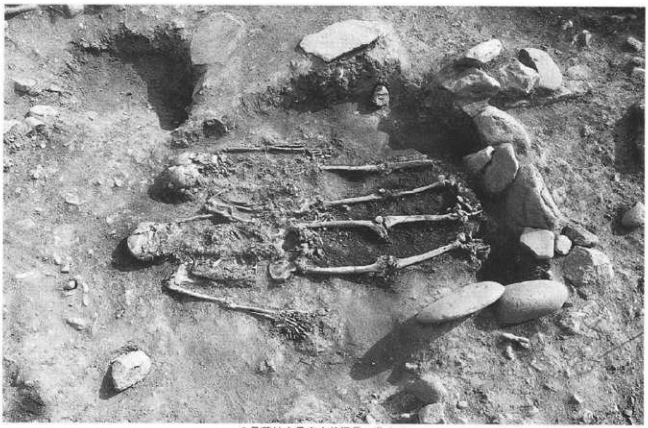
1号墓址人骨出土状況　北より

1号墓址敷石検出状況　北より

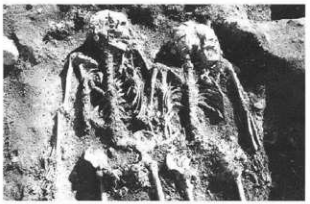
6号墓址人骨出土状況①　北より



6号墓址人骨出土状況②　北より



6号墓址人骨出土状況③　北より



6号墓址A・B人骨出土状況　西より

6号墓址翡翠製垂飾品出土状況　南より

4号墓址人骨出土状況　南より

5号墓址人骨出土状況　南より

1号トレンチ1号埋甕址

2号トレンチ1号埋甕址

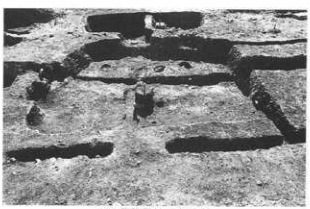
H1号住居址　西より

H3号住居址　西より

H4号住居址　東より

H4号住居址カマド　東より

H5号住居址　南より


H6号住居址　北より

H8号住居址　西より

H9号住居址　北東より

H10号住居址　南より

H12号住居址　南より

H13号住居址　南より

H13号住居址カマド　東より

D5号土坑址礫出土状況　南より

D5号土坑址　南より

D6号土坑址　南より

D7号土坑址　東より

Q3号特殊遺構（航空写真）

作業風景

H1号住居址　35－1

H1号住居址　35－27

H1号住居址　36－1

H4号住居址　41－1

H4号住居址　41－4

H4号住居址　41－7

H4号住居址　41－2

H4号住居址　40－1（1：2）

H4号住居址　41－9

H4号住居址　41－3

H4号住居址　40－2（1：2）

H４号住居址　41—13

H５号住居址　43—５

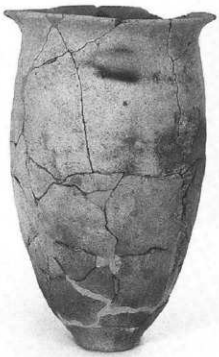
H13号住居址　57—１

H13号住居址　57—４

H13号住居址　57—６

H13号住居址　57—８

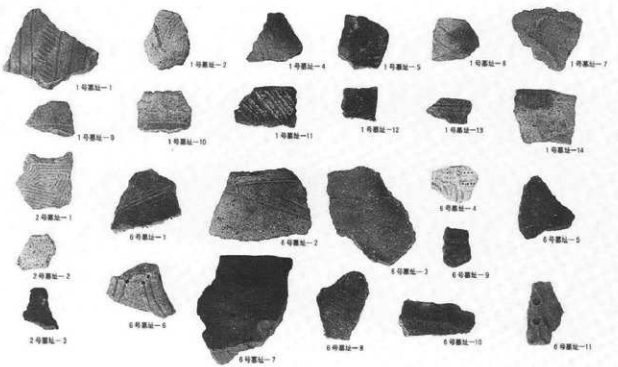
H13号住居址　57—２



H13号住居址　57－9

1号トレンチ
6号墓址1
10－1（1：2）

1号トレンチ6号墓址　10－2



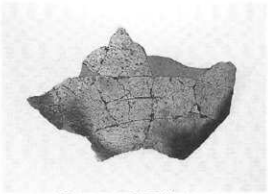
1号トレンチ1・2・6号墓址出土土器（第19図）

2号トレンチ1号埋甕址　20－1（1：6）

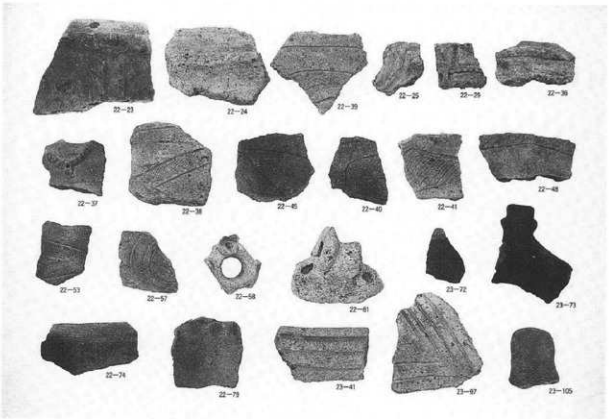
2号トレンチ1号埋甕址　20－2（1：6）

2号トレンチ1号埋甕址　20－3

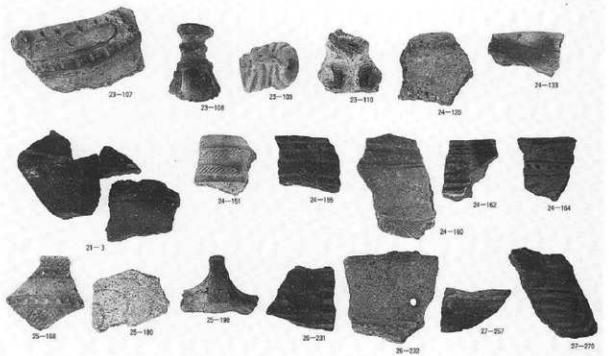
2号トレンチ1号埋甕址　20－4



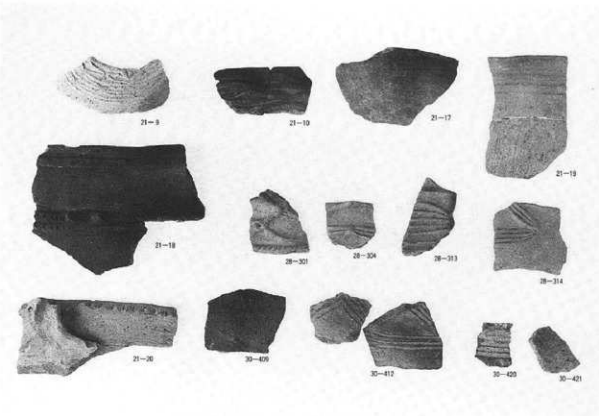
2号トレンチ1号埋甕址　20－5



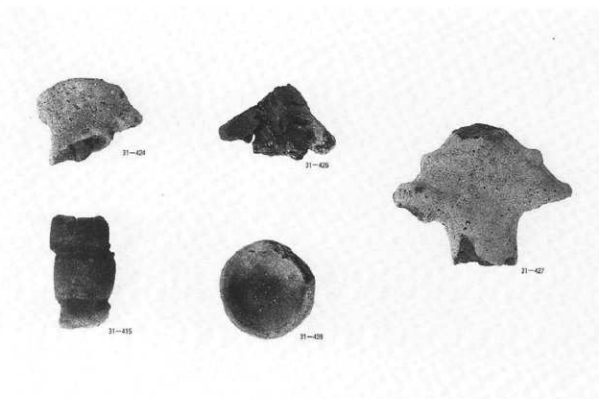
縄文時代後期前半～中頃の土器（1：3）



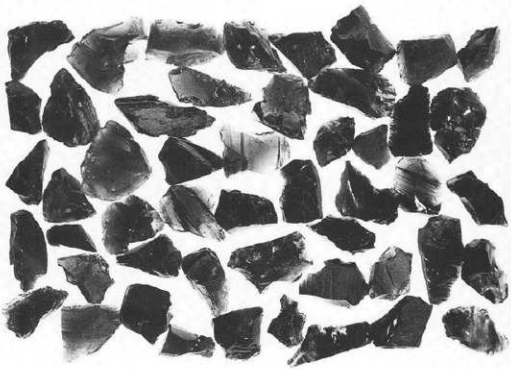
縄文時代後期後半～晩期中頃の土器（1：3）



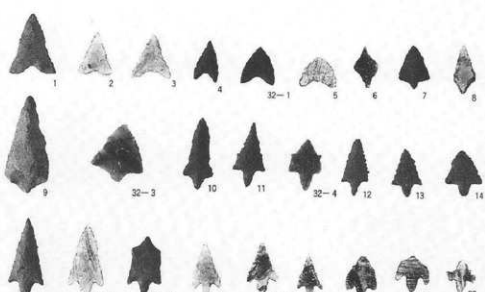
縄文時代晩期後半～弥生時代中期の土器（1：3）



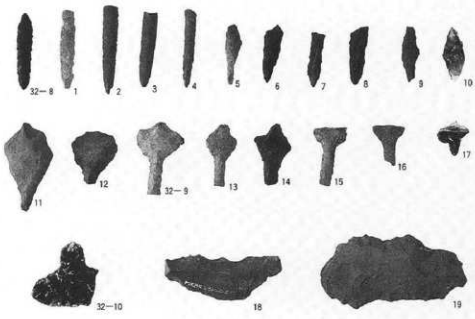
土製品（1：2）



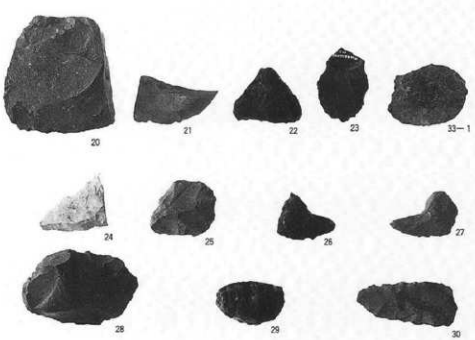
黒耀石原石・石核・剥片（1：2）



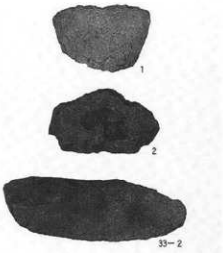
石鏃（2：3）


32－8
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
32－9
13
14
15
16
17
32－10
18
19

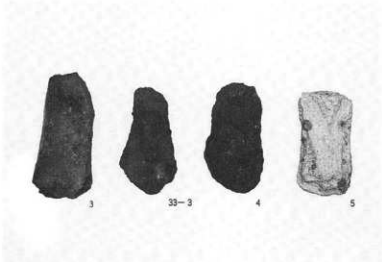
石錐・石匙（1：2）


20
21
22
23
33－1
24
25
26
27
28
29
30

刃器（1：2）

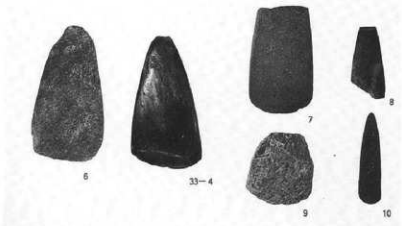


横刃形石器（1：3）

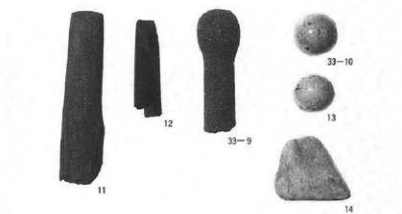


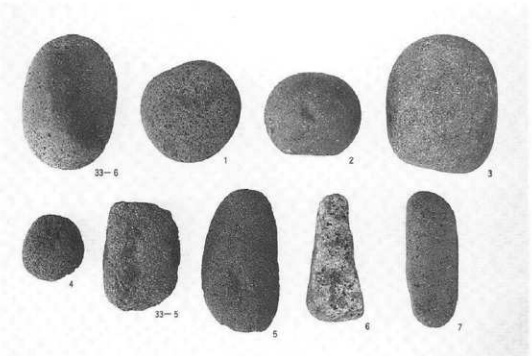
打製石斧（1：3）

磨製石斧（1：3）

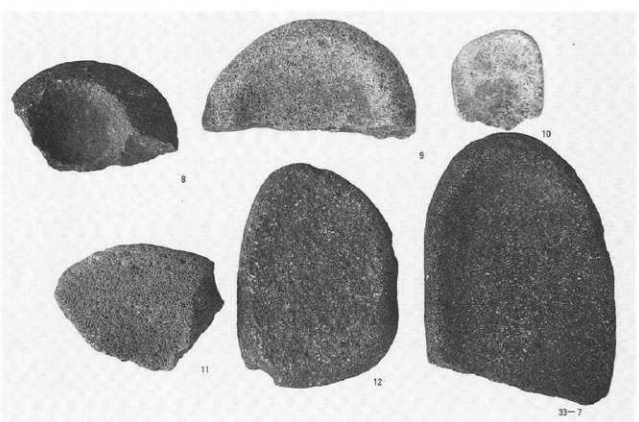


石棒・石刀、用途不明石器（1：3）





磨石・凹石・敲石（1：6）



石皿・台石（1：4）

あとがき

坂城町発掘調査指導者　塩入　秀敏

坂城町に所在する考古遺跡のうち学界で最も著名なのは保地遺跡だと言えます。昭和40年（1965）4月、道路建設に先立って行われた発掘調査により、抜歯された成人男子の頭蓋骨を伴う特殊な遺構が検出され、それに伴って縄文時代後・晩期の土器が多量に出土しました。それにより、長野県における亀ケ岡系土器を出土する代表的な遺跡として一挙に知られるところとなったのです。その後、縄文時代晩期遺跡の調査が増え、その時代の土器様相も次第に明らかにされつつありますが、とくに晩期初頭の様相について、多くの問題を内包しつつも「保地段階」と称されるように、まさに長野県を代表する遺跡となりました。

現在の保地遺跡は畑地・住宅地・道路敷などとなっていますが、その畑地の一角を新たに開発する計画がもちあがり、保護協議に基づいて試掘調査を実施しました。多くの遺構・遺物が検出されましたが、遺存状態の良い多量の人骨とそれを埋納するための墓址の検出は、今回の調査の白眉であります。この結果にかんがみ、一部分は試掘調査から発掘調査に切り替え、全容解明に努めることになりました。

出土した土器の様相から縄文後晩期の土器については、後期前半・後期中頃・後期後半・晩期初頭～前半・晩期中頃・晩期後半（～弥生中期初頭）という編年観が示されました。従来の「保地段階」は晩期初頭の様相を言いましたが、昭和40年の調査からは30年近くの年月が経過しており、その間に多くの後晩期遺跡が発掘調査されたので、「保地段階」についても見直しが迫られておりました。今回の調査では後晩期の全期間にわたっており、とくに晩期全期にわたって多くの土器が出土していることから、そのことはますます現実性を帯びたことになったと言えます。幸い、今回の調査により保地遺跡の該期土器については位置づけがしっかりでき、従来以上に研究に寄与することが可能になりました。

今回の調査の白眉である遺存状態の良い多量の人骨とそれを埋納するための墓址および埋甕は、伴出遺物が少ないことにより所属時期を確定することが難しいという問題点を残しました。しかし、人骨の観察、とくに抜歯の検討結果によると、保地遺跡出土人骨の抜歯は15才頃より以前に行われていたと考えられ、平均的な抜歯年齢よりかなり若い頃に抜歯が行われていた可能性が示されました。また、その抜歯が「犬歯と第1小臼歯」を抜くという長野県では見られない型式であることが判明し、非常に重要な事実が指摘されています。抜歯については、所属する氏族集団ごとに型式に差異があることが認められていますが、それならば保地の地に住んだ氏族集団はどのように位置づけられるのでしょうか。新たな問題が提示されました。人骨の所属時期の問題、抜歯の型式の問題、今後さらに検討していかなければならない課題であります。

今回の保地遺跡の調査は、大部分が試掘調査であり、発掘調査は一部分に過ぎなかったにもかかわらず、上述のような多くの成果を上げるとともにいくつもの新たな課題を提起して終わりました。ここに報告書を刊行することができますが、それまでに多くの方々のご指導ご協力をいただきました。とりわけ、縄文時代～弥生時代の土器について㈶長野県埋蔵文化財センター百瀬長秀氏、人骨について京都大学霊長類研究所茂原信生氏、食性復元について国立環境研究所米田穣氏からそれぞれの玉稿を賜りました。厚く感謝申し上げます。また、いちいち芳名は記しませんが、現場で作業に従事された皆さん、ご指導ご協力をいただいた方々・機関に対しても心から敬意と謝意を表し、あとがきとさせていただきます。

平成14年（2002）3月

報告書抄録

ふりがな	かないひがしいしせきぐんぼちいせきに
書名	金井東遺跡群保地遺跡Ⅱ
復書名	長野県埴科郡坂城町宅地造成事業に係る緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	坂城町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第20集
編集者名	塩入秀敏・助川朋広・齋藤達也
編集機関	坂城町教育委員会
所在地	〒389－0602　長野県埴科郡坂城町大字中之条2468　TEL 0268－82－2069
発行年月日	2002年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
保地遺跡Ⅱ	埴科郡坂城町大字南条	1521		36° 26′ 8″	138° 11′ 50″	1999年4月21日 ～1999年6月4日 1999年7月7日～ 1999年11月19日	960㎡	宅地造成事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な時代	主な遺構	特記事項
保地遺跡Ⅱ	集落址	縄文～平安	竪穴住居址　14棟 掘立柱建物址　5棟 土坑址　11基 集石址　3基 特殊遺構　3基 ピット　102基 墓址　5基 埋甕址　2基	土師器、須恵器、耳環、刀子、弥生土器、縄文土器、石器、石製品、土偶、木製品	古墳～古代の集落址、及び、縄文時代後晩期の墓址、埋甕址の調査

坂城町埋蔵文化財調査報告書

	『開畝製鉄遺跡－第1次調査報告書』	1977
	『開畝製鉄遺跡－第2次調査報告書』	1978
	『東裏遺跡』	1983
	『中之条遺跡群　宮上遺跡Ⅱ』（概報）	1993
	『南条遺跡群　塚田遺跡』	1993
第1集	『南条遺跡群　東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡』	1994
第2集	『町内遺跡発掘調査報告書』	1994
第3集	『町内遺跡発掘調査報告書』	1995
第4集	『南条遺跡群　塚田遺跡Ⅱ』	1995
第5集	『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』	1996
第6集	『中之条遺跡群　寺浦遺跡Ⅱ』	1996
第7集	『中之条遺跡群　上町遺跡Ⅱ』	1996
第8集	『上五明条里水田址』	1996
第9集	『町内遺跡発掘調査報告書1995』	1996
第10集	『坂城町試掘調査・立会い調査報告書』	1996
第11集	『町内遺跡発掘調査報告書1996』	1997
第12集	『戌久保遺跡・町横尾遺跡』	1998
第13集	『込山Ｂ遺跡ほか　発掘調査報告書1997』	1998
第14集	『町内遺跡発掘調査報告書1998』	1999
第15集	『町内遺跡発掘調査報告書1999』	2000
第16集	『開畝遺跡Ⅲ』	2000
第17集	『中之条遺跡群　北川原遺跡Ⅱ』	2001
第18集	『町内遺跡発掘調査報告書2000』	2001
第19集	『中之条遺跡群　宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』	2001
第20集	『金井東遺跡群　保地遺跡Ⅱ』（本書）	2002

発行日　2002年３月29日

編集者　坂城町教育委員会

〒389－0602長野県埴科郡坂城町大字中之条2468番地

TEL　0268（82）2069

印刷者　信毎書籍印刷株式会社

〒381－0037長野県長野市西和田470

TEL　026（243）2105